鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（50）

―南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 Ⅵ―

（伊集院IC～市来IC）

犬ヶ原（いぬがはら）遺跡

（日置郡東市来町）

２００３年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

序　　文

この報告書は，南九州西回り自動車道鹿児島道路建設に先立つて，平成11年度に実施した犬ヶ原遺跡の埋蔵文化財発掘調査記録です。

調査では，旧石器時代，縄文時代，古墳時代，古代の遺物・遺構が発見されました。

なかでも，古代の遺構・遺物の出土状況は，南九州の古代文化を知るうえで注目されています。

本書は，地域の先史・古代の解明に貴重な手掛かりを提供するものと考えており，文化財保護と学術研究のために活用していただければ幸いです。

終わりに，この発掘調査にご協力くださった関係各位の皆様をはじめ，発掘調査に参加された地元の皆様に感謝の意を表します。

平成１５年３月

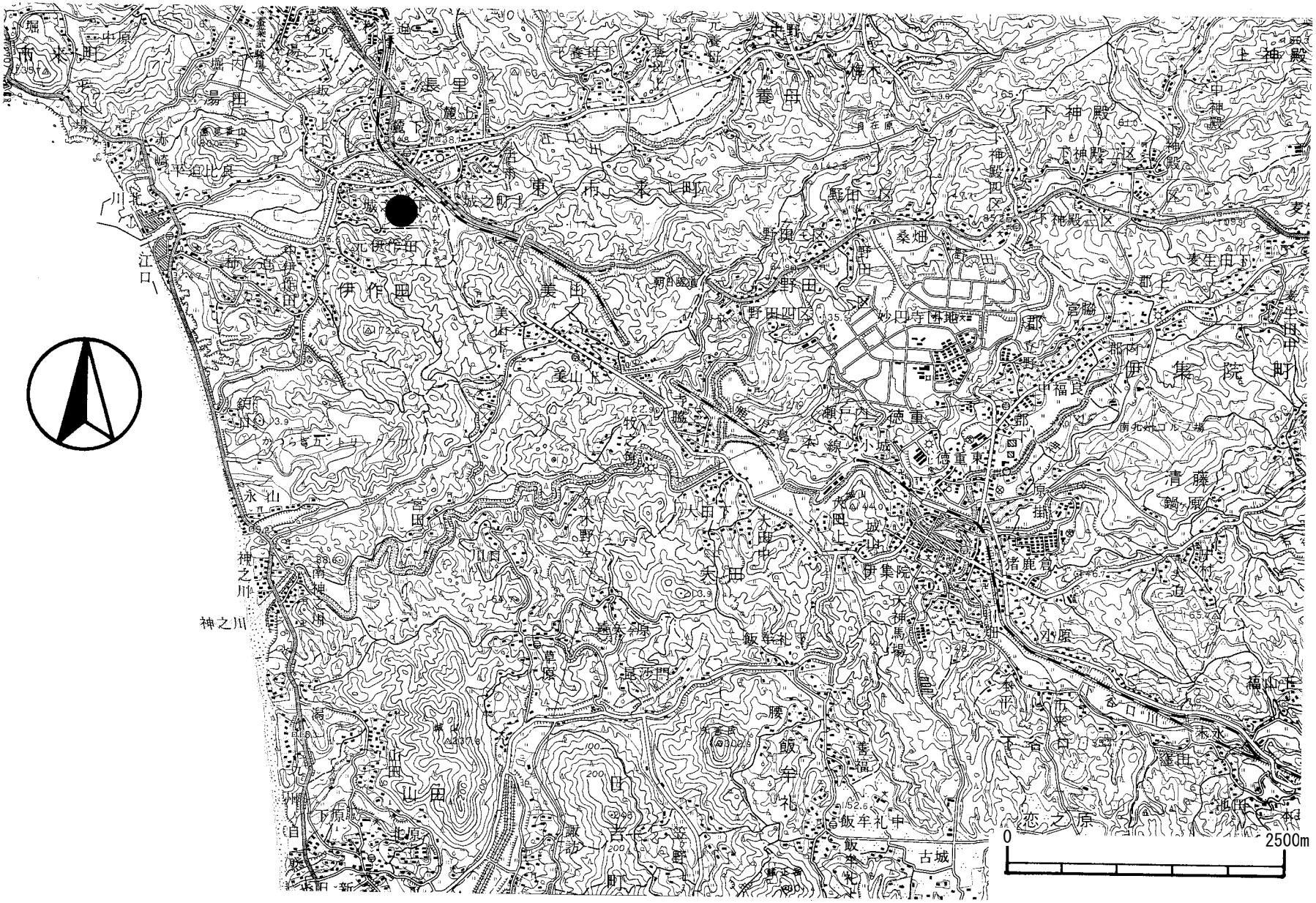
鹿児島県立埋蔵文化財センター
所　長　　井　上　明　文

報 告 書 抄 録

ふりがな	いぬがはら　　いせき
書　　名	犬 ヶ 原　　遺 跡
副 書 名	南九州西回り自動車道鹿児島道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	Ⅵ
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第５０集
編 著 者 名	牛ノ濵　修
編 集 機 関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所　在　地	〒899-4461　鹿児島県国分市上之段１１７５番地１　　℡0995-48-5811
発行年月日	２００３年３月２５日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
いぬがはらいせき 犬ヶ原遺跡	かごしまけんひおきぐん 鹿児島県日置郡 ひがしいちきちょういさきだ　いぬがはら 東市来町伊﨑田字犬ヶ原	463621	2972	31° 38′ 54″	130° 24′ 52″	確認調査 1997,2 1998,6 全面調査 19991206 ～ 20000223	2,000	南九州西回り自動車道鹿児島道路建設

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
犬ヶ原遺跡	包含地	旧石器 縄文時代 古墳時代 平安時代 鎌倉時代	 掘立柱建物跡１軒 竪穴遺構　８基 土坑　２基 焼土　３か所	細石刃・細石刃核 浅鉢・深鉢・石斧・ 石皿・石匙・石鏃 成川式土器（甕・壺） 須恵器・土師器・石 鍋・滑石製加工品・ 紡錘車（土製・鉄製 焼塩壺・墨書土器・ 刻書土器・刀子・鉄 滓・砥石・硫黄 青磁（碗・皿）	



第１図　犬ヶ原遺跡の位置図

例　　言

1　本報告書は，南九州西回り自動車道鹿児島道路建設（伊集院ＩＣ～市来ＩＣ）に伴う犬ヶ原遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は，国土交通省　鹿児島国道工事事務所の受託事業として，鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。

3　発掘調査については，東市来町教育委員会の協力を得た。

4　本報告書の執筆・編集は牛ノ濱修が行った。

5　現地調査に関する実測及び写真撮影は，調査担当者（牛ノ濱修・橋口勝嗣・大窪祥晃）で行い，遺物写真撮影については，鶴田静彦・福永修一が行った。

6　本書に用いたレベル数値は海抜絶対高である。遺物番号は通し番号とし，本文・挿図・図板の番号は一致し，本報告書に掲載した遺物の縮尺はそれぞれの挿図内に掲示してある。

7　本遺跡の出土遺物は，鹿児島県立埋蔵文化財センターが一括して保管している。

目　　次

序文
例言

第１章　はじめに …… 1
　第１節　調査に至るまでの経過 …… 1
　第２節　遺跡の概要 …… 1

第２章　調査の経過 …… 7
　第１節　調査に至るまでの経過 …… 7
　第２節　調査の組織 …… 7
　第３節　調査の経過 …… 8
　第４節　整理作業の経過 …… 9

第３章　位置及び環境 …… 10
　第１節　遺跡の位置及び自然環境 …… 10
　第２節　歴史的環境 …… 10

第４章　調査の概要 …… 17
　第１節　調査の概要 …… 17
　第２節　層位 …… 18
　第３節　旧石器時代 …… 20
　第４節　縄文時代 …… 21
　第５節　弥生～古墳時代 …… 26
　第６節　古代 …… 31
　　１．調査の概要 …… 31
　　２．遺構 …… 31
　　①掘建柱建物跡 …… 31
　　②土坑 …… 31
　　③柱穴 …… 31
　　④竪穴遺構 …… 37
　　３．出土遺物 …… 43
　　須恵器 …… 43
　　土師器 …… 49
　　黒色土師器 …… 61
　　墨書土器・刻書土器・焼塩壺 …… 70
　　紡錘車 …… 70
　　土錘 …… 71
　　鞴の羽口 …… 72
　　鉄製品 …… 72
　　石器 …… 72
　第７節　中世 …… 77

第５章　まとめ …… 78

挿　図　目　次

第１図　犬ヶ原遺跡の位置図（5万分の1）
第２図　西回り自動車道伊集院 IC～市来 IC 遺跡位置図 …… 4
第３図　犬ヶ原遺跡の位置（20万分の1）…… 6
第４図　犬ヶ原遺跡の位置及び周辺遺跡 …… 13
第５図　遺跡周辺の地形図 …… 16
第６図　調査地域とグリッド図 …… 17
第７図　土層模式柱状図 …… 18
第８図　土層図 …… 19
第９図　旧石器時代石器（１～３） …… 20
第10図　縄文土器（１） …… 20
第11図　縄文土器（２） …… 21
第12図　縄文石器（１） …… 23
第13図　縄文石器（２） …… 24
第14図　成川式土器（１） …… 27
第15図　成川式土器（２） …… 28
第16図　成川式土器（３） …… 29
第17図　遺構配置図 …… 32
第18図　堀立柱建物跡 …… 33
第19図　土坑１・土坑２ …… 35
第20図　竪穴遺構 …… 36
第21図　遺構出土の遺物（１） …… 37
第22図　遺構出土の遺物（２） …… 38
第23図　遺構出土の遺物（３） …… 39
第24図　遺構出土の遺物（４） …… 40
第25図　遺構出土の遺物（５） …… 41
第26図　須恵器出土状況 …… 44
第27図　須恵器（１） …… 45
第28図　須恵器（２） …… 46
第29図　須恵器（３） …… 47
第30図　須恵器（４） …… 48
第31図　土師器出土状況 …… 50
第32図　土師器（坏） …… 51
第33図　土師器（椀） …… 52
第34図　土師器（皿）１ …… 53
第35図　土師器（皿）２ …… 54
第36図　土師器（皿）３ …… 55
第37図　黒色土師器出土状況 …… 58
第38図　黒色土師器（１） …… 59
第39図　黒色土師器（２） …… 60
第40図　赤色土師器出土状況 …… 62

第41図　赤色土師器 …… 63
第42図　土師器（甕）出土状況 …… 65
第43図　土師器（甕）１ …… 66
第44図　土師器（甕）２ …… 67
第45図　特殊遺物出土状況 …… 69
第46図　墨書土器・刻書土器・焼塩壺 …… 70
第47図　紡錘車 …… 71
第48図　土錘 …… 72
第49図　鞴羽口 …… 73
第50図　鉄製品 …… 73
第51図　石器 …… 74
第52図　滑石製品 …… 75
第53図　中世の遺物　 …… 77

表　目　次

第１表　南九州西回り自動車道鹿児島道路（伊集院北～市来北）建設に伴う
　　埋蔵文化財発掘調査遺跡一覧表 …… ５
第２表　周辺遺跡（１） …… 14
第３表　周辺遺跡（２） …… 15
第４表　縄文時代土器観察表 …… 22
第５表　縄文時代石器計測表 …… 25
第６表　成川式土器観察表 …… 30
第７表　掘立柱建物跡計測表 …… 34
第８表　遺構出土の遺物 …… 42
第９表　土師器観察表（１） …… 56
第10表　土師器観察表（２） …… 57
第11表　黒色土師器観察表 …… 61
第12表　赤色土師器観察表 …… 64
第13表　土師器甕観察表 …… 68
第14表　紡錘車観察表 …… 70
第15表　土錘観察表 …… 71
第16表　石器観察表 …… 76

図　版　目　次

巻頭グラビア　犬ヶ原遺跡遠景（東から）　カラー
図版１　犬ヶ原遺跡遠景（南から），犬ヶ原遺跡遠景（東から）…… 81
図版２　犬ヶ原遺跡遠景（西から），犬ヶ原遺跡遠景　…… 82
図版３　犬ヶ原遺跡遠景，犬ヶ原遺跡近景 …… 83
図版４　Ｃ－１区Ⅲ層　焼土，土坑１ …… 84
図版５　土坑１，Ｄ－２区　地層 …… 85
図版６　Ｄ－２区　地層，鍛冶炉跡 …… 86
図版７　鍛冶炉跡，鍛冶炉跡 …… 87
図版８　発掘前全景，土師器（坏）出土状況 …… 88
図版９　遺物出土状況，内黒土師器出土状況 …… 89
図版10　土師器（坏）出土状況，土師器（坏）出土状況 …… 90
図版11　作業風景，土師器（甕）出土状況 …… 91
図版12　土坑１，遺跡全景 …… 92
図版13　作業風景，掘立柱建物跡 …… 93
図版14　遺跡全景，鍛冶炉 …… 94
図版15　伊作田小　体験学習，縄文土器（１） …… 95
図版16　縄文晩期土器（１），縄文晩期土器（２） …… 96
図版17　石　器 …… 97
図版18　成川式土器 …… 98
図版19　遺構出土の遺物 …… 99
図版20　須恵器 ……100
図版21　土師器（坏・埦・皿１） ……101
図版22　土師器（皿２） ……102
図版23　土師器（皿３） ……103
図版24　黒色土器 ……104
図版25　土師器（甕） ……105
図版26　赤色土器，墨書土器，刻書土器，焼塩壺 ……106
図版27　紡錘車，土錘，羽口 ……107
図版28　滑石製品，桃の種子，硫黄 ……108

第１章　はじめに

第１節　調査に至るまでの経過

建設省九州地方建設局（中央省庁再編により平成13年１月より国土交通省九州地方整備局に改称）は，鹿児島～市来間に南九州西回り自動車道鹿児島道路の建設を計画し，事業区内の埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化課（組織改革により平成８年度より文化財課に改称）に照会した。この計画に伴い，文化課が平成３年６月に伊集院ＩＣと市来ＩＣ間の埋蔵文化財の分布調査を実施したところ，当事業区内には，27か所の遺物散布地及び確認調査の必要な地点が所在することが判明した。

事業区間内の埋蔵文化財の取り扱いについては，建設省鹿児島国道工事事務所と文化課の協議に基づき，鹿児島国道工事事務所と鹿児島県知事との間で委託契約が結ばれ，埋蔵文化財の確認調査・本調査が実施されることになった。

これを受けて，平成８年度から平成12年度にかけて，毎年度，計画的かつ継続的に各遺跡の確認調査及び本調査を実施し，埋蔵文化財の記録保存を図ることになった。発掘調査は鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。

なお，事業区間内の遺跡の概要については，以下の通りである。

第２節　遺跡の概要

１　一ノ谷……伊集院町下谷口字一ノ谷の飯牟礼台地から西側へ延びた標高90～95ｍの丘稜端部に位置し，調査面積は1,250㎡である。中世～近世の古道・五輪塔及び染付や近世～近代にかけての掘立柱建物跡・溝状遺構・土坑・ピットが青磁・染付・土師器・薩摩焼などと一緒に発見された。

２　永迫平……伊集院町下谷口字下永迫の恋之原台地 から延びた支脈が盆地状の水田地帯に落ちる直前の標高約150m 程の小台地上に立地している。調査面積は14,000㎡で旧石器時代ナイフ形石器文化の２か所のブロックと細石刃文化期の細石刃が出土し，縄文時代早期前半の前平式期には９軒の住居跡を始め，３基の連穴土坑と９基の集石，多数の土坑を検出。その他，古墳時代から近世にかけての遺物も出土している。

３　下永迫Ａ…伊集院町下谷口字下永迫の標高85～110ｍのやせ尾根に挟まれた谷間に立地する。調査面積は2,600㎡で，縄文時代後期の指宿式土器と石鏃，古墳時代の成川式土器，古代～中世では土坑・集石が検出され，青磁・白磁が出土した。

４　柳原……伊集院町下谷口の標高約90～100ｍの山間の谷間，傾斜地及び周辺のやや小高いテラス状の尾根部に立地する。調査面積は6,000㎡である。縄文時代早期の集石４基や後期の石匙，石鏃，古代の土坑，焼土跡と共に土師器・須恵器が発見された。

５　上山路山…伊集院町大田字上山路山の標高約130ｍのシラス台地上に位置する。舌状台地の端部にあたり，平坦面から続く緩やかな斜面と，谷頭を含んだかなり急な斜面とからなる。調査面積は6,000㎡である。旧石器時代細石刃文化の遺物と縄文時代（早期・後期），弥生～古墳時代の遺物が発見された。主になるのは，縄文時代早期で遺構は，

道跡や集石，遺物は岩本式・前平式・吉田式土器等が出土した。

6　大田城跡…伊集院町大田字下城山迫の標高約120m の台地上に所在する。調査面積は4,000㎡である。中世山城の可能性を指摘された遺跡であったが，山城の存在を示す遺構は検出されなかった。旧石器時代ナイフ形石器文化，細石刃文化の遺物と縄文時代早期の集石，土坑等の遺構と岩本式・前平式土器等の遺物が発見された。

1　堂平窯跡…東市来町美山の標高約85～92mの傾斜面にある江戸時代の薩摩焼の窯跡である。調査面積は3,500 ㎡で，窯，作業場，物原が発見された。窯は長さ約30m，幅1.2m，傾斜角17°の半円筒形をした単室傾斜窯である。陶器（甕・壺・徳利・土瓶・こね鉢・摺鉢・動物形土製品），瓦（軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・のし瓦）や窯道具が多量に出土した。

8　池之頭……東市来町美山字池之頭にあり，美山池北西部の標高約80～100mのシラス台地の尾根状部分に立地し，調査面積は7,500㎡である。旧石器時代のナイフ・台形石器・スクレイパー・細石刃核・細石刃，縄文時代早期の集石8基・前平式・吉田式・石坂式土器や中期の春日式・並木式・阿高式土器，晩期の入佐式や黒川式土器が出土した。また古墳時代の成川式土器（甕・壺・高坏等）が多く発見された。

9　雪山……東市来町美山字雪山の標高約95mの台地東端に立地する。調査面積は2,700㎡で，旧石器時代の細石刃核・細石刃，縄文時代の集石2基と前平式・春日式土器・石鏃・石皿・磨石，古墳時代の成川式土器が出土したが，主体は近世～近代の薩摩焼の遺構・遺物で，炉跡・物原？・土坑等が薩摩焼（茶家・土瓶・擂鉢・瓶・碗），染付（碗・皿）や窯道具と一緒に発見された。

10　猿引……東市来町長里字猿引の標高約110～115mの尾根状の台地に立地する。調査面積は800㎡で，旧石器時代ナイフ形石器文化の礫群1基と三稜尖頭器・ナイフ・台形石器・敲石や細石刃文化の細石刃核・細石刃と縄文時代前期の曽畑式土器・黒曜石片が出土した。

11　犬ヶ原……東市来町伊作田字犬ヶ原の標高約66mの独立丘陵のシラス台地に立地する。調査面積は，2,000㎡で，旧石器時代の細石刃核・細石刃，縄文時代の浅鉢・深鉢・石斧・石皿・石鏃・石匙，古墳時代の成川式土器（甕・壺・鉢）等が出土したが，主になるのは平安時代で，掘立柱建物跡（4間×4間・総柱）が製鉄に関する遺物（鞴羽口・鉄滓・鉄製品）・土師器・須恵器と共に多く発見された。

12　向栫城跡…東市来町伊作田の標高約50mの独立台地上に所在する。調査面積は14,000㎡である。旧石器時代ナイフ形石器文化の剥片尖頭器・ナイフ，縄文時代草創期の隆帯文土器が多量の石鏃と一緒に見つかった。また古墳時代の竪穴住居跡や中世～近世にかけての空堀・帯曲輪・堀切・竪穴状遺構・堀立柱建物跡・炉跡などが発見され，中世山城の遺構が検出された。

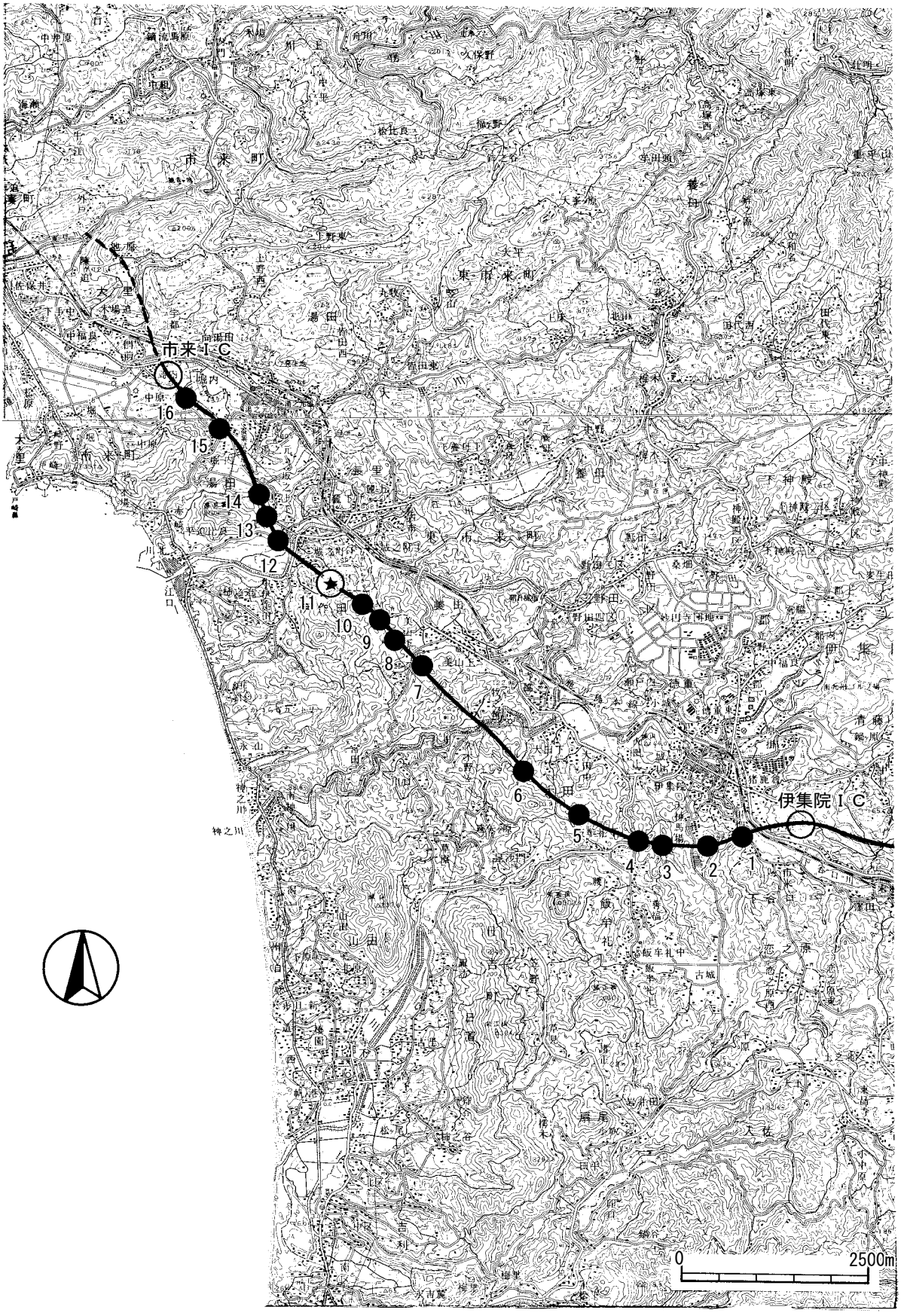
13　堂園平……東市来町伊作田の遠見番山から下る斜面の裾部にあり，標高約50mの平坦地に立地する。調査面積は2,000㎡で，旧石器時代のナイフ形石器文化の礫群9基と剥片尖頭器・ナイフ・台形石器と細石刃文化の細石刃核・細石刃，縄文時代の集石4基・吉田式・

塞ノ神式土器や轟式土器等が発見されている。また古代の土師器・須恵器等も出土している。

14　今里……東市来町伊作田字今里の標高約65ｍの台地端の傾斜地に所在する。調査面積は14,000㎡で，旧石器時代ナイフ形石器文化の礫群，剥片尖頭器・ナイフ・台形石器や細石刃文化の細石刃核・細石刃・調整剥片が出土し，縄文時代の集石や前平式・深浦式・出水式・黒川式土器や石匙などの石器，古墳時代の成川式土器が発見された。

15　市ノ原……市来町大里字上ノ原前から東市来町湯田字市ノ原に至る標高約50ｍ台地西側に所在する。調査面積は62,000㎡である。遺跡は第1地点から第5地点まであり，旧石器時代ナイフ形石器文化，細石刃文化，縄文時代（早期～晩期），弥生時代の住居跡・壺棺，古墳時代の住居跡，古代～中世，近世の街道跡など多時期に渡り，多種多様な遺構・遺物が発見された。

16　上ノ原……市来町大里の東シナ海を望む標高40ｍの台地上に立地し，三方は急峻な傾斜面となっている。調査面積は2,000㎡で縄文時代の集石3基，土坑が検出され，塞ノ神式，轟式土器と石斧・石鏃・石匙などが出土した。古墳時代では竪穴式住居跡1基と土坑・成川式土器が，古代～中世は土師器・須恵器・青磁・滑石製石鍋が発見された。

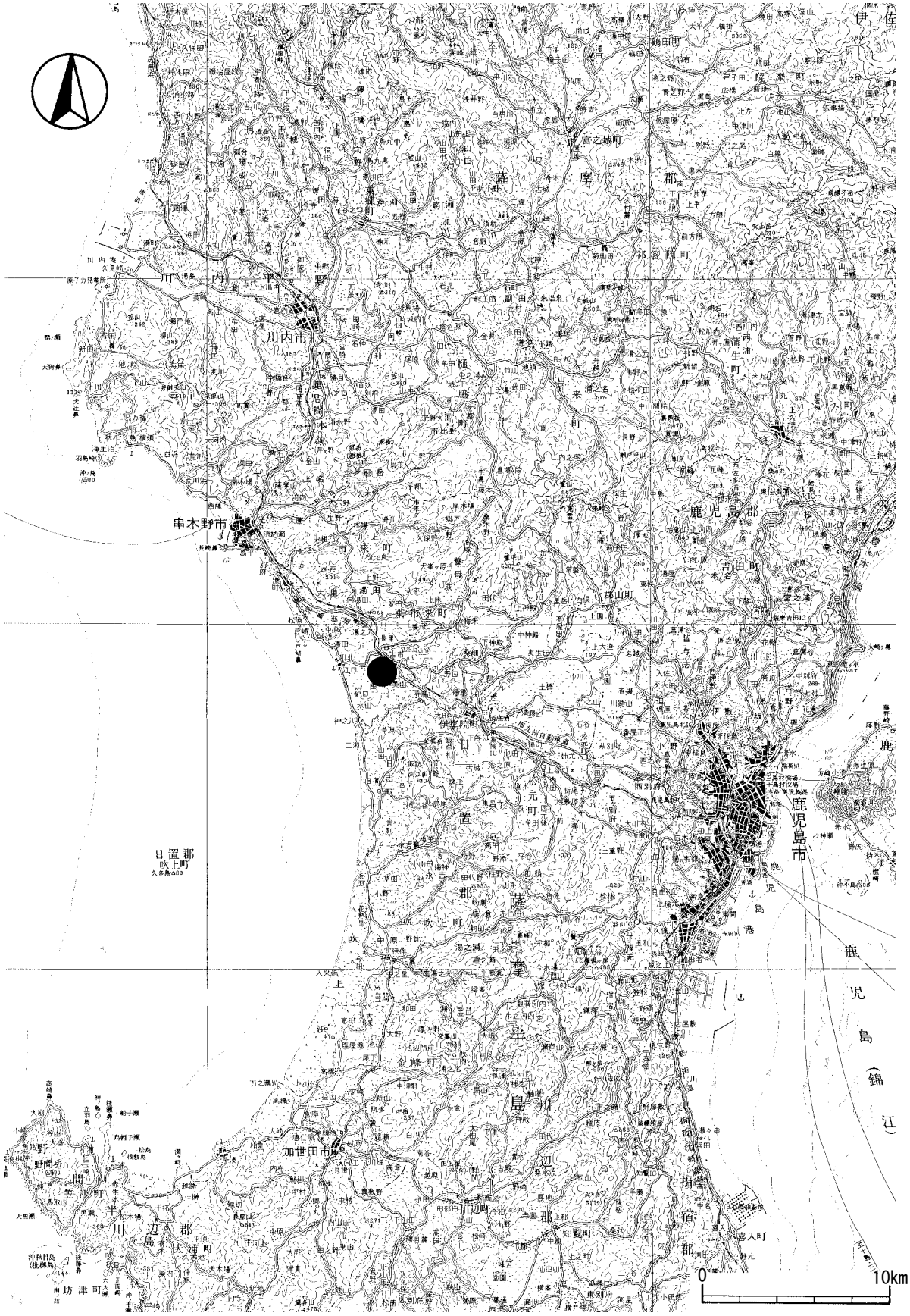


第２図　西回り自動車道

第1表　南九州西回り自動車道鹿児島道路（伊集院IC～市来IC）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査員	時代	備考
①	一ノ谷	伊集院町下谷口	確認　H8.10 全面　H8.10～11	1,250㎡	三垣・桑波田	中世 近世	掘立柱建物跡・土坑 陶磁器 **県埋文センター報告書31　2001刊行**
2	永迫平	伊集院町下谷口	確認　H8.10～12 全面　H8.12～H10.7	14,000㎡	三垣・桑波田 繁昌・藤崎・三垣・中原 桑波田・川口・大窪	旧石器（ナイフ） 旧石器（細石刃） 縄文(早・後・晩) 古代～近世	礫群・剥片尖頭器・ナイフ・台形石器 細石刃 竪穴住居跡・集石・連穴土坑・前平式土器 土師器・青磁
3	下永迫A	伊集院町下谷口	確認　H9.10 全面　H10.5～7	2,600㎡	池畑・三垣・元田 上之園・栗林	古代 中世	土坑・集石・土師器・須恵器 青磁・白磁
4	柳原	伊集院町下谷口	確認　H9.11 全面　H10.7～10	6,000㎡	池畑・三垣・元田 繁昌・中原・川口・大窪	古代～中世 中世～近世	土坑・焼土・土師器・須恵器・鉄製品 ピット・溝状遺構
5	上山路山	伊集院町大田	確認　H9.2 全面　H9.5～H10.3	6,000㎡	三垣・桑波田 寺原・桑波田	旧石器 縄文（早・後） 弥生～古墳	剥片・砕片 道跡・集石・岩本式・前平式・吉田式 成川式
6	大田城跡	伊集院町大田	確認　H8.12～H9.1 全面　H9.12～H10.3	4,000㎡	三垣・桑波田 湯之前・橋口	旧石器 縄文（早）	三稜尖頭器 集石・土坑・前平式・石鏃・磨石
7	堂平窯跡	東市来町美山	確認　H10.2 全面　H10.8～12	3,500㎡	池畑 池畑・繁昌・宮田洋一・ 森田・元田・川口・大窪	江戸	窯・柱跡・粘土溜まり・土坑・物原 陶器・瓦・窯道具
⑧	池之頭	東市来町美山	確認　H9.8 全面　H10.8～11 H12.7～8	7,500㎡	湯之前・橋口 宮田洋一・寺原 宮田洋一・三垣	旧石器（細石刃） 縄文（早・後・晩）	細石刃核・細石刃 集石・前平式・吉田式・石坂式 成川式土器 **県埋文センター報告書32　2002 刊行**
⑨	雪山	東市来町美山	確認　H12.6 全面　H12.6～8	2,700㎡	宮田洋一・三垣	縄文（早） 近世～近代	集石・前平式 陶磁器類・窯道具 **県埋文センター報告書53　2003 刊行**
⑩	猿引	東市来町長里	確認　H12.5 全面　H12.5～6	800㎡	宮田洋一・三垣	旧石器 縄文（前）	礫群・ナイフ・台形石器・三稜尖頭器・剥片 曽畑式 **県埋文センター報告書53　2003 刊行**
⑪	犬ヶ原	東市来町伊作田	確認　H9.2，H10.6 全面　H11.12～H12.2	2,000㎡	池畑・三垣 牛ノ濵・橋口・大窪	旧石器・縄文（晩） 古代	細石刃核・細石刃・黒川式 掘立柱建物跡・鍛冶炉・土師器・硫黄・滑石 **県埋文センター報告書50　2003 刊行 本報告書**
12	向椙城跡	東市来町伊作田	確認　H 8.11～12 全面　H9.4～H10.3 H10.7～8	14,000㎡	池畑・西園 鶴田・勇 八木澤・横手	旧石器 縄文（草創・早・後） 古墳 中世～近世	剥片尖頭器・ナイフ 石鏃・隆帯文・前平式・市来式 竪穴住居・成川式 空堀・帯曲輪・曲輪・堀切・竪穴状遺構・掘立柱建物跡・炉跡・土坑・青磁・備前焼
13	堂園平	東市来町伊作田	確認　H8.11～12 全面　H10.5～11	2,000㎡	池畑・西園 八木澤・横手	旧石器（ナイフ） 旧石器（細石刃 ） 縄文（早・前・後） 古代	尖頭器・ナイフ・台形石器・敲石 礫群・細石刃核・細石刃 集石・吉田式・塞ノ神式・轟式 土坑・土師器・須恵器
⑭	今里	東市来町伊作田	確認　H8.11 全面　H9.4～11	14,000㎡	池畑・西園 湯之前・橋口	旧石器（ナイフ） 旧石器（細石刃） 縄文(早・前・後・晩) 古墳	礫群・剥片尖頭器・ナイフ・台形石器 細石刃核・細石刃・ブランク・調整剥片 集石・前平式・深浦式・出水式・黒川式・石匙 成川式 **県埋文センター報告書33　2002刊行**
15	市ノ原	東市来町湯田 市来町大里	確認　H8.10～12 全面　H8.12～H11.7	62,000㎡	繁昌・西園・宮田茂 池畑・繁昌・西園・寺師 ・前野・森田・宮田洋・ 八木澤・中原・藤野・三 垣・元田・西村・寺原・ 宮田茂・松村・松崎	旧石器（ナイフ） 旧石器（細石刃 ） 縄文（早～晩） 弥生 古墳 古代～中世 近世	礫群・ナイフ・台形石器・尖頭器 細石刃核・細石刃 集石・土器・石器 竪穴住居跡・壺棺 竪穴住居跡・土坑・成川式 竪穴住居跡・焼土・溝状遺構・土師器・須恵器 街道跡・掘立柱建物跡・鍛冶炉 **県埋文センター報告書49　2003 刊行**
⑯	上ノ原	市来町大里	確認　H8.11 全面　H10.7～9	2,000㎡	繁昌・宮田茂 上之園・栗林	縄文（早） 古墳 古代～中世	集石・土坑・塞ノ神式 竪穴住居跡・土坑・成川式・貝殻土坑 土師器・須恵器・青磁 **県埋文センター報告書62　2003 刊行**

○　報告書刊行済



第３図　犬ヶ原遺跡の位置(20万分の1)

第２章　調査の経過

第１節　調査に至るまでの経過

建設省九州地方建設局（中央省庁再編により平成13年１月より国土交通省九州地方整備局改称）は，鹿児島～市来間に南九州西回り自動車道鹿児島道路の建設を計画し，事業区内に埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化課（組織改革により平成８年度より文化財課に改称）に照会した。この計画に伴い，文化課が平成３年６月に伊集院インターチェンジと市来インターチェンジ間の埋蔵文化財の分布調査を実施したところ，当事業区内に，27か所の遺物散布地及び確認調査の必要な地点が存在することが判明した。

事業区間内の埋蔵文化財の取り扱いについては，建設省鹿児島国道工事事務所と文化課の協議に基づき，鹿児島国道工事事務所と鹿児島県知事との間で委託契約が結ばれ，埋蔵文化財の確認調査・本調査が実施されることになった。

犬ヶ原遺跡については，平成９年２月と平成10年６月に確認調査を行い，遺跡の範囲や性格等を把握した。これを受けて平成11年12月６日から平成12年２月23日まで（実働44.5日）発掘調査を実施し，報告書作成は平成14年度，鹿児島県立埋蔵文化財センターで行った。調査面積は2,000㎡である。

第２節　調査の組織

平成１１年度（発掘調査）

事業主体者	建設省鹿児島国道工事事務所		
調査責任者	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	井上　明文
調査企画者		次長兼総務課長	黒木　友幸
〃		主任文化財主事 兼　調査課長	戸﨑　勝洋
〃		調査課長補佐	新東　晃一
調査・企画担当者		主任文化財主事 兼第三調査係長	青﨑　和憲
調査担当者		主任文化財主事	牛ノ濵　修
〃		文化財研究員	橋口　勝嗣
〃		文化財調査員	大窪　祥晃
調査事務担当		総務係長	有村　貢
〃		主査	今村孝一郎

平成１４年度（報告書作成）

事業主体者	国土交通省鹿児島国道工事事務所		
調査責任者	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	井上　明文
調査企画者		次長兼総務課長	田中　文男
〃		調査課長	新東　晃一
〃		課長補佐	立神　次郎
調査・企画担当者		主任文化財主事	
整理担当者		兼第三調査係長	牛ノ濵　修
〃		文化財主事	吉岡　康弘
調査事務担当		総務係長	前田　昭信
〃		主査	脇田　清幸

尚，調査及び報告書作成中，永山修一（ラ・サール学園教諭）氏から指導・助言をいただいた。記して感謝の意を表したい。

第３節　調査の経過

発掘調査は，平成11年12月６日（月）～平成12年２月23日（水）まで行った。経過は日誌抄により週毎に略述する。

（平成１１年）

12月６日（月）～12月10日（金）

調査開始。トレンチ（２ｍ×８ｍ）３か所設定後掘り下げ。グリッド杭設置。Ｂ・Ｃ－１～３区重機にて表土排除。Ｄ－１・２区表土排除。Ⅱ層掘り下げ。黒色土師器・滑石製石鍋等出土。

12月13日（月）～12月17日（金）

Ｃ・Ｄ－１～３区　Ⅱ層掘り下げ。　Ｅ・Ｆ－１～３区　表土排除。Ⅱ層掘り下げ。

土師器・砥石・紡錘車・土錘・滑石製容器・鉄滓等出土。

12月20日（月）～12月24日（金）

Ｃ・Ｄ－１～３区　Ⅱ層掘り下げ。　Ｃ～Ｅ－１～３区　遺構検出のため清掃。

Ｄ-２区Ⅱ層下面に焼土有り。　Ｅ－２区　ピット内出土土師器実測。

ラ・サール学園　永山修一教諭来訪（20日）

12月27日（火）

Ｄ・Ｅ－１・２区　Ⅱ・Ⅲa 層掘り下げ。　平成11年仕事納め。

（平成１２年）

１月11日（火）～１月14日（金）

Ｃ～Ｆ－２・３区　Ⅱ・Ⅲa 層掘り下げ。 Ｄ・Ｅ－４区　トレンチ（２ｍ×17ｍ）設定後掘り下げ。Ｂ～Ｅ－３区断面実測。

1月17日（月）～1月21日（金）

C・D－2・3区　Ⅱ・Ⅲa層掘り下げ。　C－3区土師器甕出土状況写真撮影。

SK01～SK05，SB01・SB02　遺構検出。　トレンチ調査終了。Ⅵ層より旧石器時代細石刃出土。　伊集院町教育委員会　梅北浩一・東政和氏来訪（21日）

1月24日（月）～1月28日（金）

C－2・3区　ピット検出。　D－1・2区　Ⅲ層掘り下げ。

D－2区　下層確認トレンチ設定後掘り下げ。　SB01，SB02　検出作業。

SK01，SK02　遺構検出。　C－3区　西側断面実測。

SK03，SK04　硫黄・滑石製石鍋。石匙。　F－3区　表層剥土処理。

2月1日（火）～2月4日（金）

D・E・F－1・2・3　Ⅲ層掘り下げ。　D－1・2区　トレンチⅣ～Ⅷ掘り下げ。

晩期土器。　航空写真撮影（2日）。　遺跡全景写真撮影。永山修一（ラ・サール学園教諭），長沼孝（北海道埋蔵文化財センター），寺崎康史（北海道今金町教育委員会）来訪（4日）

2月7日（月）～10日（木）

鉄製紡錘車2点出土。　D・E－2区　Ⅲ層掘り下げ。8日より大窪祥晃合流する。

C・D－1～3区　Ⅲ～Ⅴ層掘り下げ。　SB01，SB02　検出作業。

山中敏史（奈良文化財研究所集落遺跡研究室長），弥栄主任来訪（9日）。

鷲尾史子（鉄器処理）（10日）

2月14日（月）～2月18日（金）

B・C－1・2区　Ⅳ～Ⅴ層を重機にて剥ぎ取り，Ⅵ層以下の掘り下げ。

SB01，SB02　検出作業。　伊作田小学校5～6年35名　発掘体験学習（15日）

2月21日（月）～2月23日（水）

B～E－1・2区　旧石器層（Ⅵ～Ⅷ層）掘り下げ。

SB01，SB02　遺構実測及び検出作業。

23日終了する。　建設省監督官事務所終了挨拶。　作業員集合写真撮影。

第4節　整理作業の経過

整理作業は，平成14年4月～12月にかけて，国分市上之段の県立埋蔵文化財センターで行った。大まかな整理作業および報告書作成作業の経過は下記の通りである。

平成14年4月～5月……注記，遺物選別，接合，復元

6月～8月……遺物実測，遺構図面チェック，遺構図作成

9月～10月……トレース，拓本，レイアウト

11月～12月……レイアウト，写真撮影，観察表作成，文章作成

第３章　位置及び環境

第１節　遺跡の位置及び自然環境

犬ヶ原遺跡は，日置郡東市来町大字伊作田字犬ヶ原に所在する。

東市来町は，薩摩半島および日置郡の北西部に位置し，東は郡山町・伊集院町，西は市来町，南は伊集院町・日吉町，北は市来町・樋脇町に接し，南西は東シナ海に面している。鹿児島から西方へ約28㎞に位置し，東西約16㎞，南北約９㎞の細長い地域で面積は70.97㎢，人口13,623人（平成12年10月１日　国勢調査人口）である。1889年（明治22）市来郷の湯田・伊作田・神之川・長里・養母の５か村を合わせて東市来村として発足，1937年（昭和12）４月，町制を施行，1956年（昭和31）９月，旧下伊集院村の南神之川・苗代川（美山）・宮田・牧之角を合併して現在に至る。

犬ヶ原遺跡のある，東市来町の地形は，北部の重平山・中岳・大峰ヶ原など数百ｍの旧期火山灰の山地と，南西部の中生層の低い山地を除けば，これらの山地の間を埋めた180～50ｍ内外の火山灰台地である。大里川・江口川は町の中央部を貫流し，南端の町境及び南端部を流れる神之川とともに東シナ海に注いでいる。また，それらの河川によってつくられた小さな盆地状の谷底平野がいくつも並び，そこに大里・養母・湯之元などの集落が発達している。水田は主としてこの三河川の流域に沿って開け，畑地はその丘陵に分布しているが，大半はシラス台地である。江口浦の海岸には，海岸砂丘の発達がみられず，シラスの海食崖には，卓越風による風食地形が発達し，「江口蓬莱」の名がある。

シラス台地は，錦江湾奥部にある姶良カルデラから噴出した火砕流が堆積した台地で，シラスは約24,000年前の火山噴出物で「入戸火砕流堆積物」と呼ばれている。東シナ海に沿った砂丘は，吹上浜と呼ばれ，日本三大砂丘の一つで，串木野市島平から加世田市小湊に至る約30㎞のながい遠浅海岸である。冬は北西の風が強く，海岸の砂は内陸部に吹き溜まり，最大幅２㎞，最高所47ｍ（金峰町竹原）という吹上砂丘ができた。

遺跡は，東市来町の南西部，伊作田地域の東方に位置する。上伊作田集落の東後方の丘陵上にあり，標高約66ｍの独立丘陵のシラス台地上にあり，ＪＲ東市来駅の西側にあたる。

第２節　歴史的環境

東市来町では昭和62年養母の上二月田遺跡で縄文時代前期・後期の調査がなされ，仮牧段遺跡・桜町遺跡などわずかな遺跡が知られていたのみで，昭和59年度発行の遺跡地名表では寺院・城跡・窯跡を含んでも15か所が紹介されているのみであったが，平成３年から始まった北薩伊佐地区埋蔵文化財分布調査や南九州西回り自動車道建設に伴う調査が行われたこと等により，遺跡数が一気に増加し，現在では92か所の遺跡が周知されている。そこで，周辺遺跡と併せて主な遺跡を時代順に若干紹介したい。

旧石器時代

東市来町では，南九州西回り自動車道建設が始まるまでは，旧石器時代の遺跡は伊作田の老ノ原遺跡で細石刃核・細石刃が出土したことが知られているのみであったが，今では松元町・伊集院町

と並んで県内でも有数の遺跡群となっている。

今里遺跡は伊作田の標高約63ｍの台地端の傾斜地に所在し，ナイフ形石器文化期の剥片尖頭器・三稜尖頭器・ナイフ形石器・台形石器・スクレイパーと細石刃文化期の細石刃核・細石刃が出土している。特に細石刃核は比較的小規模な発掘にも限らず101点と多く出土し，また分類・編年等もでき，今後の旧石器文化研究に重要な遺跡となっている。猿引遺跡は長里の標高約110～115ｍの尾根上の台地に所在し，旧石器時代の遺物は迫状窪みに集中して出土した。ナイフ形石器文化の礫郡1基と三稜尖頭器・ナイフ形石器・台形石器・敲石や細石刃文化の細石刃核・細石刃がみつかった。池之頭遺跡は美山の標高80～100ｍのシラス台地の尾根状部分に所在し，ナイフ形石器・台形石器・スクレイパー・細石刃核・細石刃が出土した。向栫城跡は伊作田の標高約50ｍの独立台地上に所在し，剥片尖頭器・ナイフ形石器が出土した。堂園平遺跡は伊作田の遠見番山から下る斜面の裾野にあり，標高約50ｍの平坦地に所在する。ナイフ形石器文化の礫群９基と剥片尖頭器・ナイフ形石器・台形石器と細石刃文化の細石刃核・細石刃が出土した。また，湯田の市ノ原遺跡でも多くの旧石器時代の遺物が出土している。

縄文時代

上二月田遺跡は養母に所在し，縄文時代後期の住居跡２基・土坑２・炉跡などが検出した遺跡で，遺物には平栫式・塞ノ神式・深浦式・西平式・黒川式・夜臼式土器等が出土している。今里遺跡では早期の集石３基と早期～晩期の岩本式・前平式・押型文・深浦式・春日式・出水式・上加世田式・黒川式土器が多くの石器（石鏃・石匙・磨石等）と出土している。特に独鈷状石器は注目される。池之頭遺跡では早期の集石８基と前平式・吉田式・石坂式土器が，その他，春日式・並木式・阿高式・入佐式・黒川式土器が出土している。隣接する雪山遺跡では前平式土器の円筒土器と角筒土器の完形品が出土している。向栫城跡では，草創期の配石遺構・集石が多量の隆帯文土器や石鏃・敲石・石斧・石皿と共伴している。前期～晩期でも轟式・阿高式・市来式・黒川式土器が出土している。市ノ原遺跡は湯田の標高約50ｍの台地西側に所在し，調査面積は62,000㎡と広範囲の遺跡で早期～晩期まで多種多様な遺構・遺物が発見された。特殊な遺物として竹崎式土器や耳飾り・三角壽形の土・石製品等，交易品と考えられるものも出土している。

弥生～古墳時代

調査対象地域は台地が多いせいか，弥生時代の遺跡は少ないが，上二月田遺跡で高橋式土器が出土し，市ノ原遺跡では竪穴住居や壺棺が高橋式・北麓式・黒髪式・山ノ口式土器が石鏃・石錐・石斧等と共伴して出土している。

古墳時代の遺跡は多く発見されている。住居跡が検出された遺跡では向栫城跡11基，市ノ原遺跡で７基がある。遺物では成川式土器の甕・壺・高坏・手捏土器と磨石・磨製石鏃等が出土している。老ノ原遺跡では成川式土器と須恵器が共伴していた。

古代

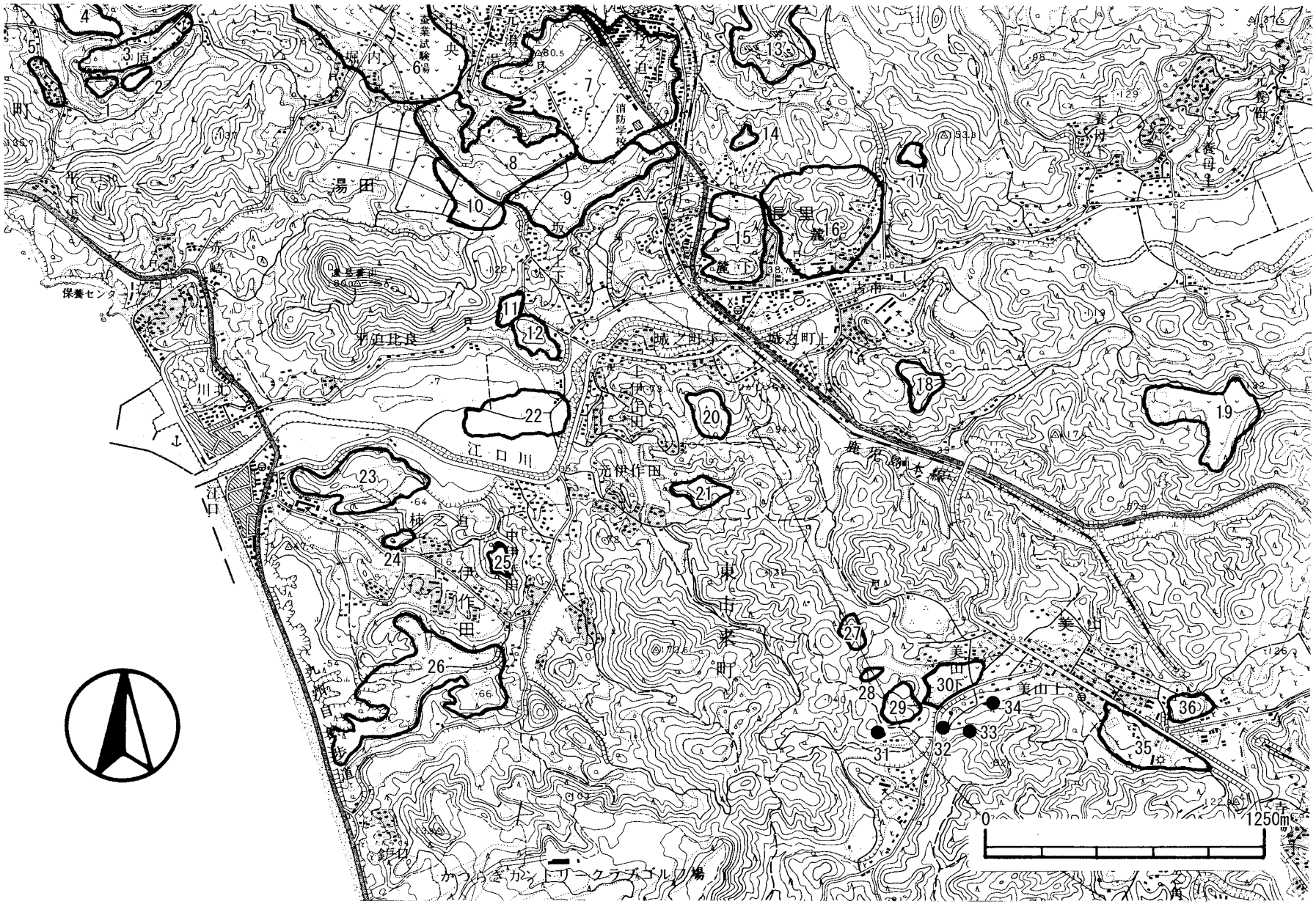
東市来町は古代においては市来町と薩摩国日置郡に属していたと考えられている。市来院は宝亀

年間以降，郡司の大蔵氏一族が支配していた。向栫城跡では円形周溝墓・土坑が土師器・墨書土器・須恵器・古銭と共伴している。市ノ原遺跡では第１地点で掘立柱建物跡15棟・土坑が検出され，墨書土器も100点以上出土し，「春」「奉」「松」「厨」などの文字が判読されている。隣接町の市来町では安茶ヶ原遺跡から「日置厨」の墨書土器が出土している。

中世～近世

東市来町は中世山城が多く，中心となる鶴丸城は古代からの大蔵氏が居を構えて市来氏と称した。中世，惟宗姓を称した市来氏は島津軍に攻められ滅亡するが，鶴丸城には1550年フランシスコ・ザビエルも立ち寄り布教活動をしたとの記録も残されている。また11年後に鶴丸城をたずねた宣教師のイルマン・ルイス・デ・アルメイダは「私たちは城に到着しましたが，これは世界で最も堅固なものの一つです。それは十の要塞に分かれている山にあるからで，そのひとつひとつが互いに離れ，つるはしで削り取ったように険しく，人間の手で作ることは不可能であると思われるほど，深い堀で囲まれています。一つの要塞から他の要塞へ行くためには跳ね橋を渡るのですが，渡るときに下を見るとはなはだしく高いので地獄を見ているようです。全要塞の中心に本丸があって，そこに城主が住んでいますが，これは鹿児島の大名の家来です。」(註) と詳細な記録を残している。向栫城跡は西回り自動車道建設に伴って調査したのであるが，空堀，帯曲輪，曲輪，堀切，通路状遺構，大型円形土坑，竪穴建物跡，堀立柱建物跡，炉跡などの遺構が検出された。また市ノ原遺跡では出水街道の道跡が検出された。

（註）結城了悟『鹿児島のキリシタン』春苑堂書店　1975



第４図　犬ヶ原遺跡の位置及び周辺遺跡

第２表　周辺遺跡（１）

番号	遺　跡　名	遺跡番号	所　在　地	時　代	遺　　物　・　備　　考	文献
１	下諏訪	28-17	市来町大里	縄文	土器片・打製石斧	①
２	中諏訪	28-18	〃　〃	古墳	土師器・須恵器	①
３	西ノ鼻	28-45	〃　〃	古墳・中世	土師器・陶器	②
４	半崎堀	28-46	〃　〃	弥生～中世	弥生土器・土師器・陶器	②
５	上平山	28-47	〃　〃	弥生・古墳	土器	②
６	市ノ原	29-67	市来町大里～ 東市来町湯田	旧石器 縄文 弥生 古墳 古代～中世 近世	礫群・ナイフ・台形石器・細石刃核 集石・土器・石器 竪穴住居跡・壺棺 竪穴住居跡・土坑・成川式土器 竪穴住居跡・焼土・溝・須恵器 街道跡・掘建柱建物跡・鍛冶炉	②
７	諏訪原	29-68	東市来町湯田	古墳・中世	土師器・陶器・染付	②
８	森薗平	29-69	東市来町長里	弥生・古墳	弥生土器・土師器・須恵器	②
９	浦田	29-70	東市来町長里	古墳・中世	土師器	②
１０	今里	29-75	東市来町伊作田	旧石器 縄文 古墳	尖頭器・ナイフ・細石刃核 集石・前平式・深浦式・出水式・石匙 成川式土器	③
１１	堂園平	29-74	東市来町伊作田	旧石器 縄文 古代	礫群・ナイフ・尖頭器・細石刃核 集石・吉田式・塞ノ神式・轟式・黒川式 土坑・土師器・須恵器	②
１２	向栫城	29-23	東市来町伊作田	旧石器 縄文 古墳 中世～近世	剥片尖頭器・ナイフ・剥片 隆帯文・石鏃・前平式・市来式 竪穴住居跡・成川式 空堀・曲輪・竪穴状遺構・炉跡・青磁	④
１３	古城	29-19	東市来町長里	南北朝	石塁	④
１４	番屋城	29-16	東市来町長里	南北朝～室町	消滅	④
１５	平之城	29-29	東市来町長里	南北朝～室町	空堀・古墓塔	④
１６	鶴丸城	29-５	東市来町長里	南北朝～室町	空堀・土塁・礎石	④
１７	得仏城	29-21	東市来町長里		鶴丸城の出城	④
１８	総陣ヶ尾	29-20	東市来町長里		五輪塔	④
１９	馬場ヶ原	29-71	東市来町長里	弥生・古墳 中世～近世	弥生土器・成川式 土師器・陶器	②
２０	犬ヶ原	29-72	東市来町伊作田	旧石器・縄文 古代～中世	細石刃核・細石刃・黒川式・石鏃 掘立柱建物跡・鍛冶炉・土師器・硫黄	本報告書
２１	金木山	29-73	東市来町伊作田	古墳・近世	土器・陶器	②
２２	西原持原	29-85	東市来町	古墳・中世		②

第３表　周辺遺跡（２）

番号	遺　跡　名	遺跡番号	所　在　地	時　代	遺　　物　・　備　　考	文献
２３	伊作田城	29-18	東市来町伊作田	南北朝	伊崎田道材居城	④
２４	柿之迫	29-１	東市来町伊作田	弥生	弥生土器	⑤
２５	桧城	29-22	東市来町伊作田			④
２６	老ノ原	29-76	東市来町伊作田			⑥
２７	猿引	29-90	東市来町長里	旧石器 縄文	礫群・ナイフ・台形石器・尖頭器 曽畑式	⑦
２８	雪山	29-91	東市来町美山	縄文 近世～近代	集石・前平式 陶器・磁器・瓦・窯道具	⑦
２９	池之頭	29-92	東市来町美山	旧石器 縄文 古墳	ナイフ・台形石器・細石刃核・細石刃 集石・石皿集積・前平式・春日式 成川式土器	⑧
３０	池之平	29-78	東市来町美山	古墳・近世	土器・土師器・陶器	④
３１	五本松窯	29-13	東市来町美山	江戸	町指定史跡	⑨
３２	堂平窯	29-84	東市来町美山	江戸		⑨
３３	御定式窯	29-14	東市来町美山	江戸	町指定史跡	⑨
３４	南京皿山窯	29-15	東市来町美山	江戸	町指定史跡	⑨
３５	水溜	29-79	東市来町美山	中世～近世	土師器・陶器・磁器	②
３６	大田城塁跡	29-６	東市来町美山	南北朝～室町	五輪塔・青磁・白磁・須恵器・瓦器	⑨

引用文献

① 『市来町郷土誌』

② 「北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布調査報告書（Ⅰ）」　鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書 61　1992

③ 「今里遺跡」　鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 33　2002

④ 「中世城館」　鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書 40　1987

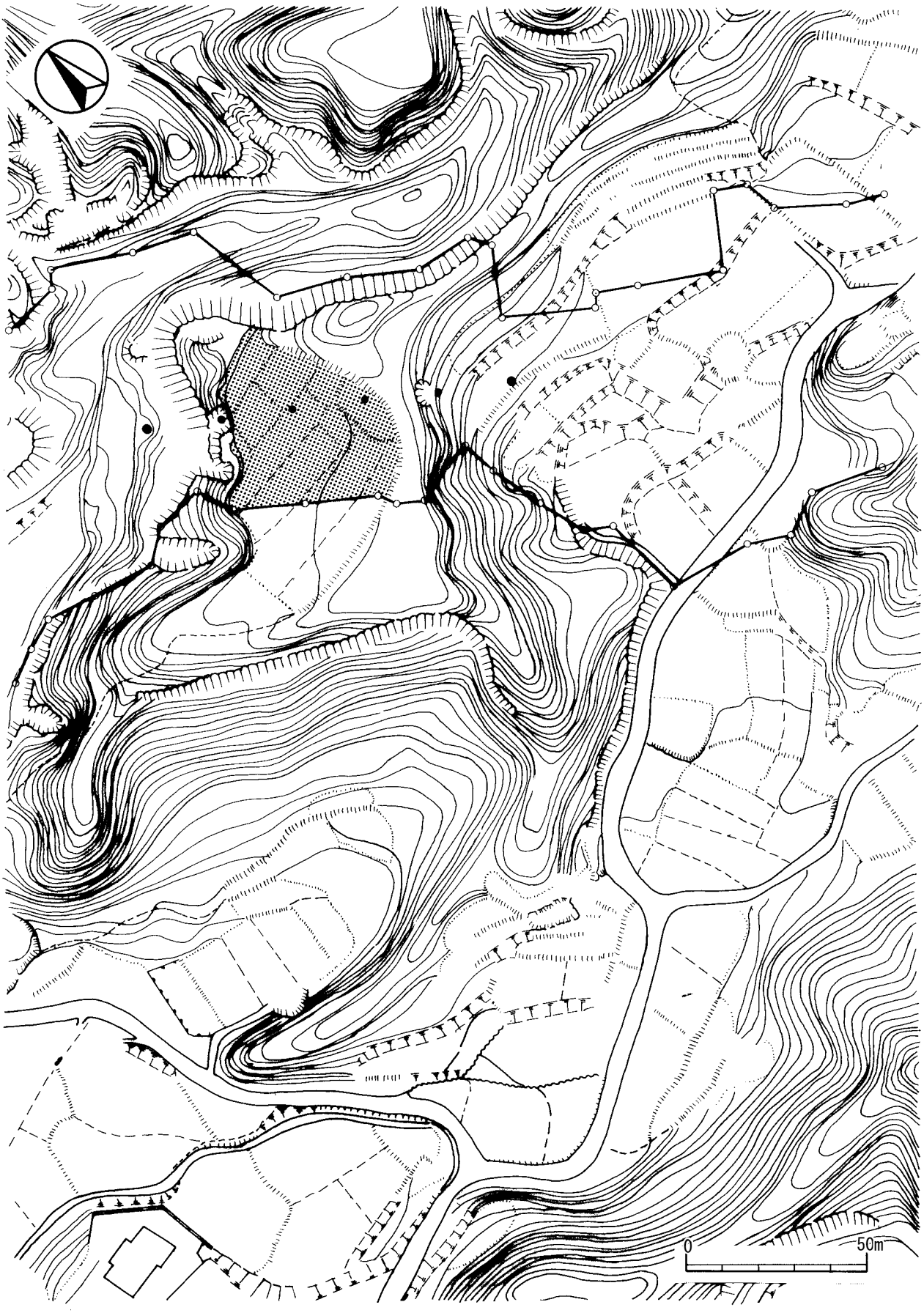
⑤ 「鹿児島県市町村遺跡地名表」　鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書 36　1985

⑥ 「老ノ原遺跡」　東市来町埋蔵文化財発掘調査報告書８　1996

⑦ 「猿引遺跡・雪山遺跡」　鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 53　2003

⑧ 「池之頭遺跡」　鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 32　2002

⑨ 『東市来町郷土誌』　東市来町教育委員会　1987



第５図　遺跡周辺の地形図

第４章　調査の概要

第１節　調査の概要

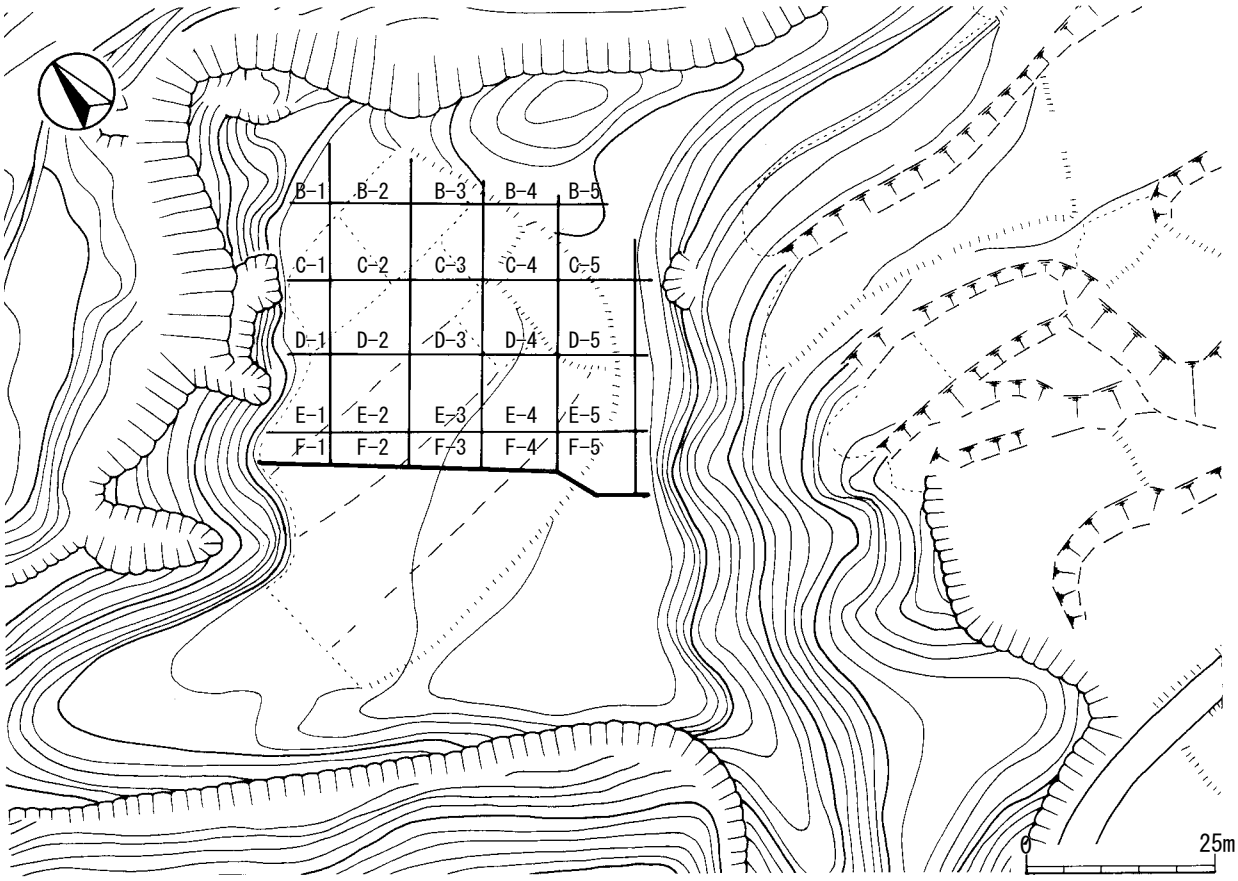
犬ヶ原遺跡は，東市来町伊作田字犬ヶ原の標高約66ｍのシラス台地上に位置する。

調査は道路新設工事図面の STA. 192と STA. 193を基準に10ｍ間隔の区割りを設定した。平成10年度の確認調査の結果に基づいて，表土は重機にて排除し，Ⅱ層の全面調査を実施した。Ⅲ層下位は区割りに沿ってトレンチを設定し，下層確認を行った結果，古墳時代・縄文時代晩期の遺物がⅢ層に包含されていたことが確認されたため，Ⅲ層までは全面調査を行った。また，Ⅵ層から旧石器時代の石器が出土したため，Ⅳ・Ⅴ層は重機で排除し，Ⅵ層以下は２ｍ四方の区割りを設定し調査を進めたが，旧石器時代の遺物集中箇所は検出されなかった。

本遺跡は平安時代の遺構・遺物が主であった。

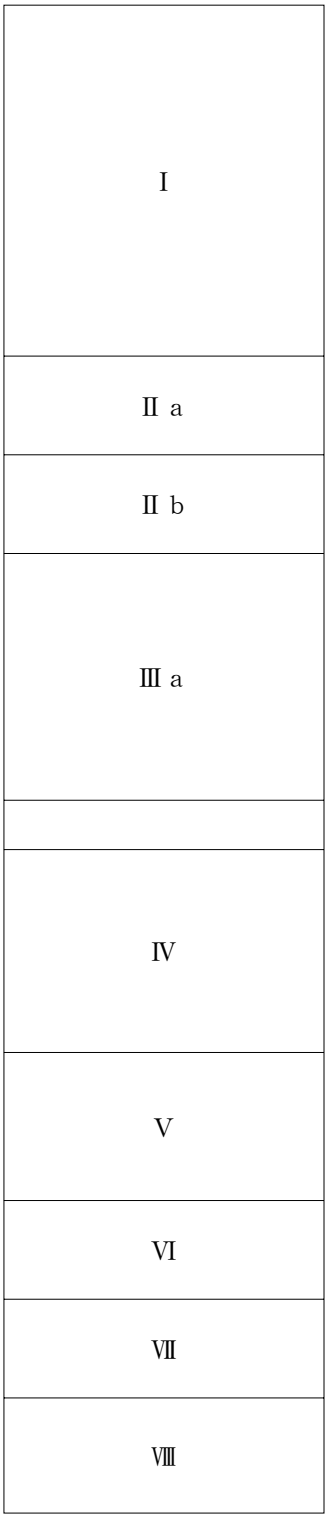
遺構は，掘立柱建物跡（３間×３間，総柱）１軒に土抗２基，竪穴遺構が検出された。特徴のある遺物として，鞴羽口・鉄滓・鉄製品（刀子・紡錘車）・砥石がみられ，遺構との関わり合いから製鉄に関する遺跡と推定される。竪穴遺構内には焼土・灰層がみられ，これらを裏付けるものになる。その他，黒色土器・赤色土器が多量に出土し，建物跡との関連が興味深い。

また，硫黄・焼塩壺・滑石製品・墨書土器・灯明皿など特殊な様相を示す遺物の出土もある。



第６図　調査区域とグリッド図

第２節　層　　位



Ⅰ　層　　褐色の耕作土。色調によって２～３層に区分できる。

Ⅱａ層　　暗灰褐色土。２～３㎜位の白石軽石を含む。鎌倉時代の遺物が包含されている。

Ⅱｂ層　　暗黒褐色土。黒色微量の火山灰土で，やや粘質を帯びる。平安時代の遺物が包含されている。

Ⅲ　層　　下部は，約6,300年前の鬼界カルデラ起源のアカホヤ（幸屋火砕流）に対比される黄橙色軽石（Ⅱｂ）で，上部はその火山灰に有機質が混在したもので，粘質が弱く，径２㎜前後の軽石を含む黄橙色火山灰土（Ⅱｂ）である。上部に縄文時代後・晩期及び古墳時代の遺物が包含されている。

Ⅳ　層　　灰白褐色火山灰土。やや灰色を帯びた硬質の火山灰で，比較的細粒である。

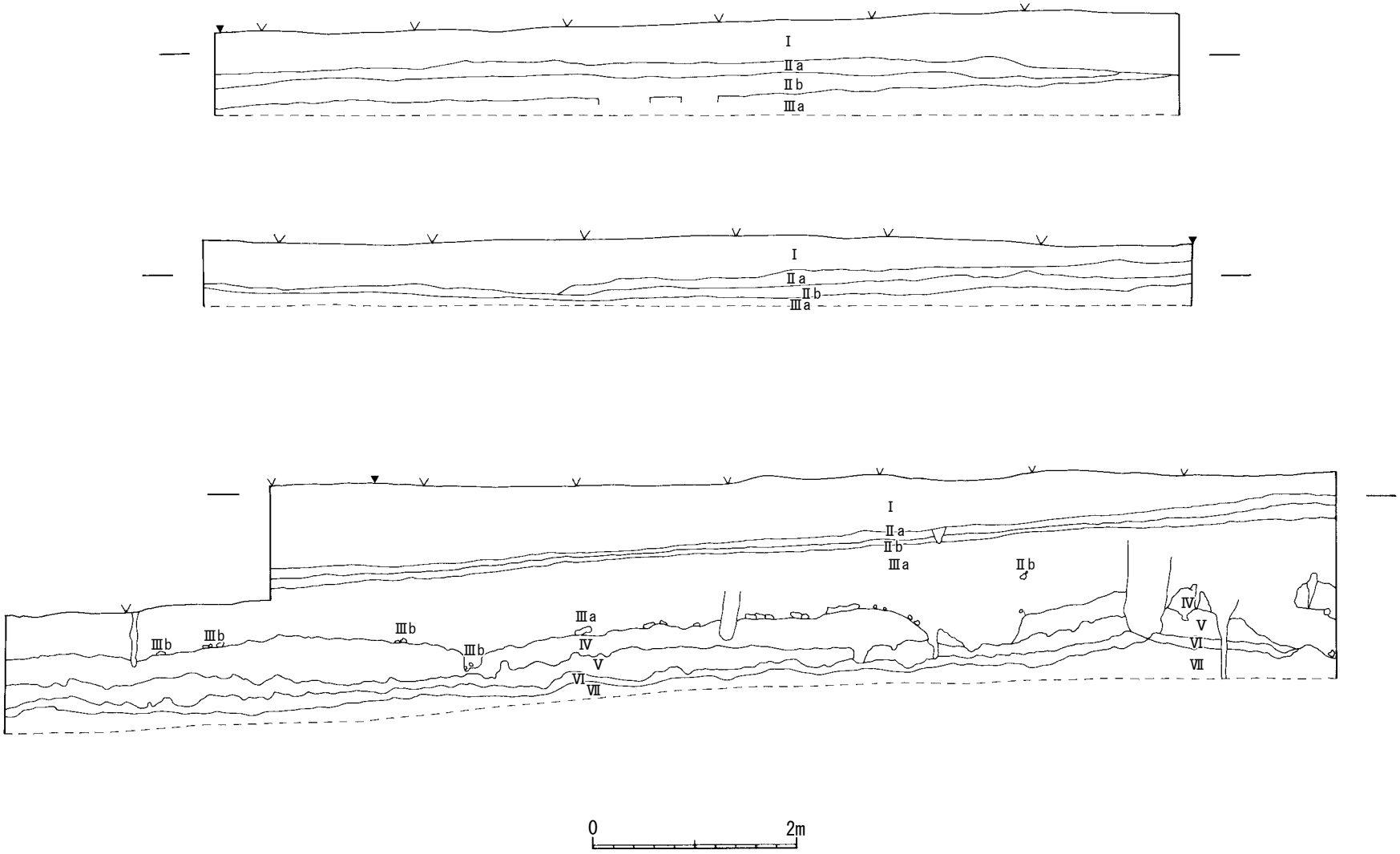
Ⅴ　層　　黒褐色火山灰土。濃い黒色で粘質が強く，径５㎜前後の軽石が混じる。下部には約11,500年前の桜島起源の軽石層（薩摩火山灰Ｐ14）が部分的にみられる。

Ⅵ　層　　暗茶褐色粘質火山灰。極めて微粒で粘質が強く，乾くとクラックが発達する。旧石器時代細石刃文化の遺物が包含されている。

Ⅶ　層　　茶褐色粘質火山灰土。微粒で粘質が強く，乾くとクラックが発達する。

Ⅷ　層　　シラス

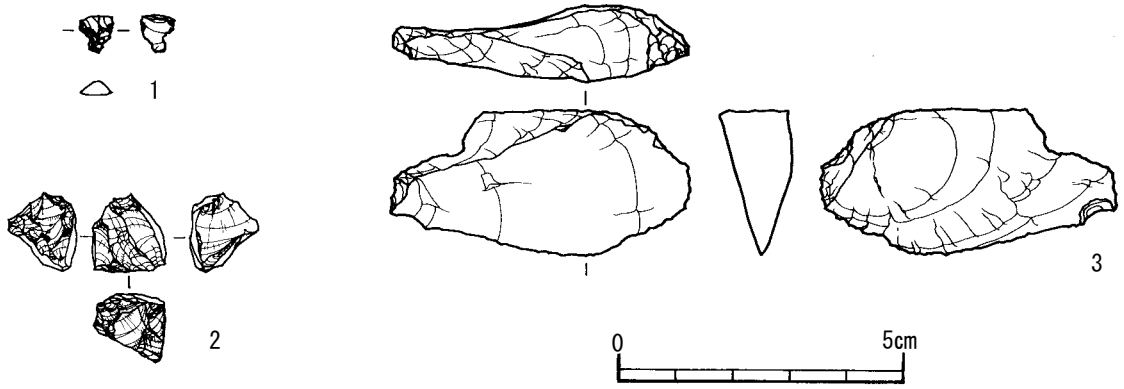
第７図　土層



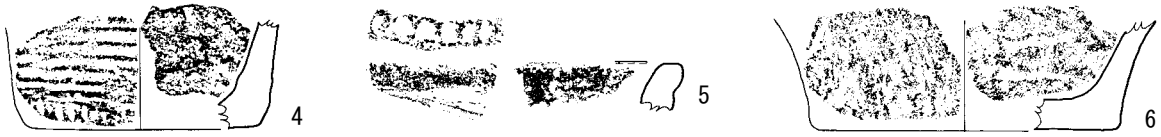
第８図　土層図

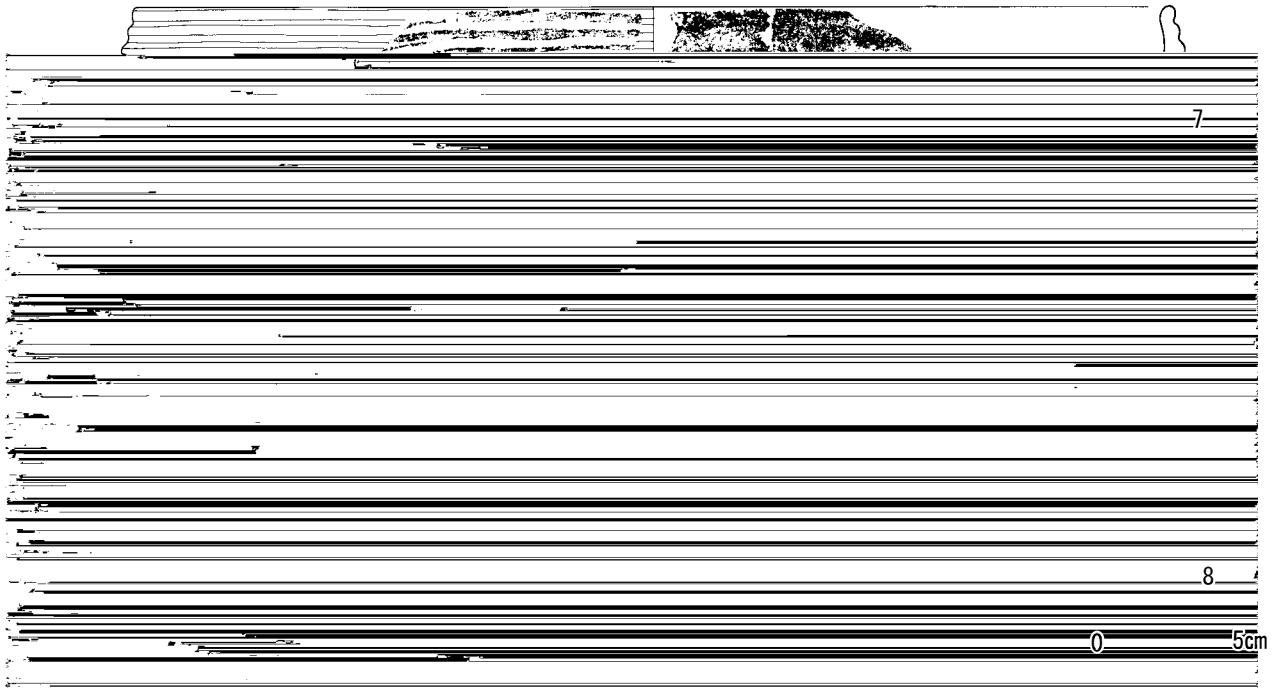
第３節　旧石器時代

Ｄ－４・５区のトレンチ調査でⅥ層から黒曜石砕片が出土したため，Ｂ～Ｄ－２～４区のⅥ・Ⅶ層の全面調査を行ったが，４点の遺物が出土したのみであった。１は細石刃で先端部である。２は細石刃核でⅢ層から出土したが，旧石器時代の遺物である。三船産の黒曜石を用い，礫を半割したものを素材にし，打面調整も行われている。３は赤褐色をした瑪瑙の剥片である。



第９図　旧石器時代石器





第10図　縄文時代土器(1)

第４節　縄文時代

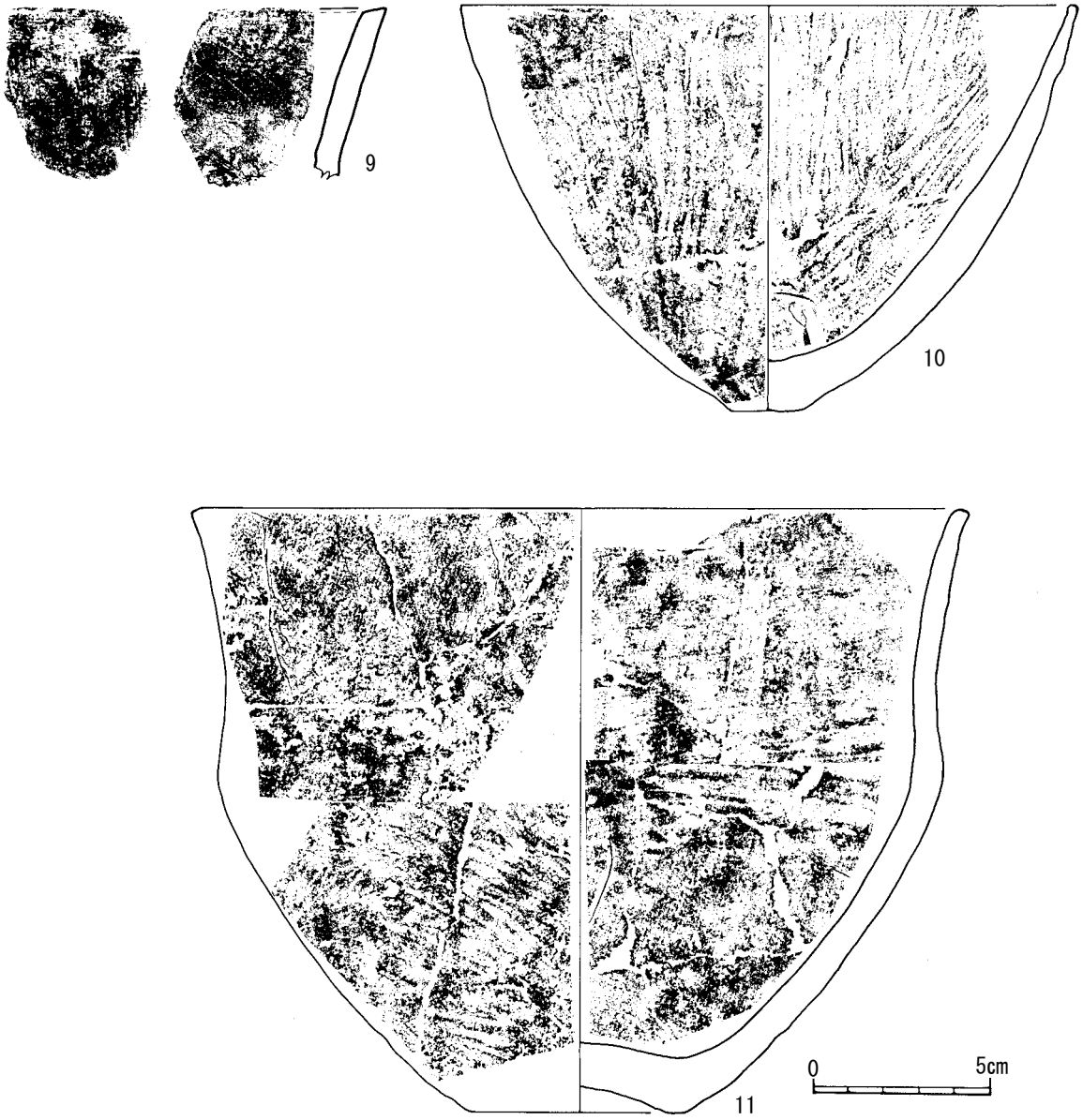
縄文時代の遺構は検出されず，遺物もⅢ層から散在して出土した。

土器

４は貝殻条痕を横位に施したもので，平底の底部付近である。底部端部にはヘラ状施文具で刻目を施している。早期の前平式土器である。５は沈線文を施した口縁部で口唇部に刻目を施している。６は底部で縦位のなで成型を行っている。砂粒を多く含む。後期の土器と考えられる。

７～11は晩期の土器で，７の口縁部は内傾する。口縁の接合部で屈曲し，外反した頸部となる。口縁外面に３条の沈線を横位に巡らし，内外面とも丁寧なナデ調整を施したものである。８・９は深鉢の口縁部である。８はヘラ研磨で調整を施し，口唇部は平坦を呈している。外面口縁付近にススが付着している。９も同様な器形であるが，ナデ調整を施している。

10はＣ－２区，Ⅲ層から出土した鉢形土器の完形品である。口縁部は波状を呈し，丸底の底部



第11図　縄文土器(2)

から口縁部へかけてヘラ削りで調整を行っている。11もＣ－２区，Ⅲ層から一括して出土した深鉢形土器である。底部は上げ底で，頸部から外反した口縁をもつものである。ヘラ磨きで調整を施し，外面にはススが付着している。

第４表　縄文土器観察表

番号	挿図	遺物番号	器種	出土区	層	色　調	胎　土	焼成	備　考
4			深鉢	ＥＦ2･3	表	淡赤褐色	Ｑ・ＰＬ	普通	底部
5			〃	Ｃ２	Ⅱａ	淡黒褐色	Ｑ・ＰＬ長	普通	口縁部
6	10		〃	Ｄ１	表	淡赤褐色	Ｑ・ＰＬ長	普通	底部
7		2481	〃	Ｃ２	Ⅲ	淡赤褐色	Ｑ・ＰＬbi	良	口縁部
8		2256	〃	Ｄ２	Ⅲａ	黒褐色	Ｑ・ＰＬ長	普通	口縁部
9		2460	〃	Ｃ１	Ⅲ	黒褐色	Ｑ・ＰＬ長	良	口縁部
10	11	2700	鉢	Ｃ２	Ⅲ	暗褐色	Ｑ・ＰＬ	普通	完形
11			深鉢	Ｃ２	Ⅲ	淡黒褐色	Ｑ・ＰＬ	普通	完形

石器

石器は，石匙・石鏃・スクレイパー・石斧・石錘・凹石が出土した。また石材については，黒曜石・頁岩・瑪瑙・安山岩・砂岩がみられた。

石匙（12）

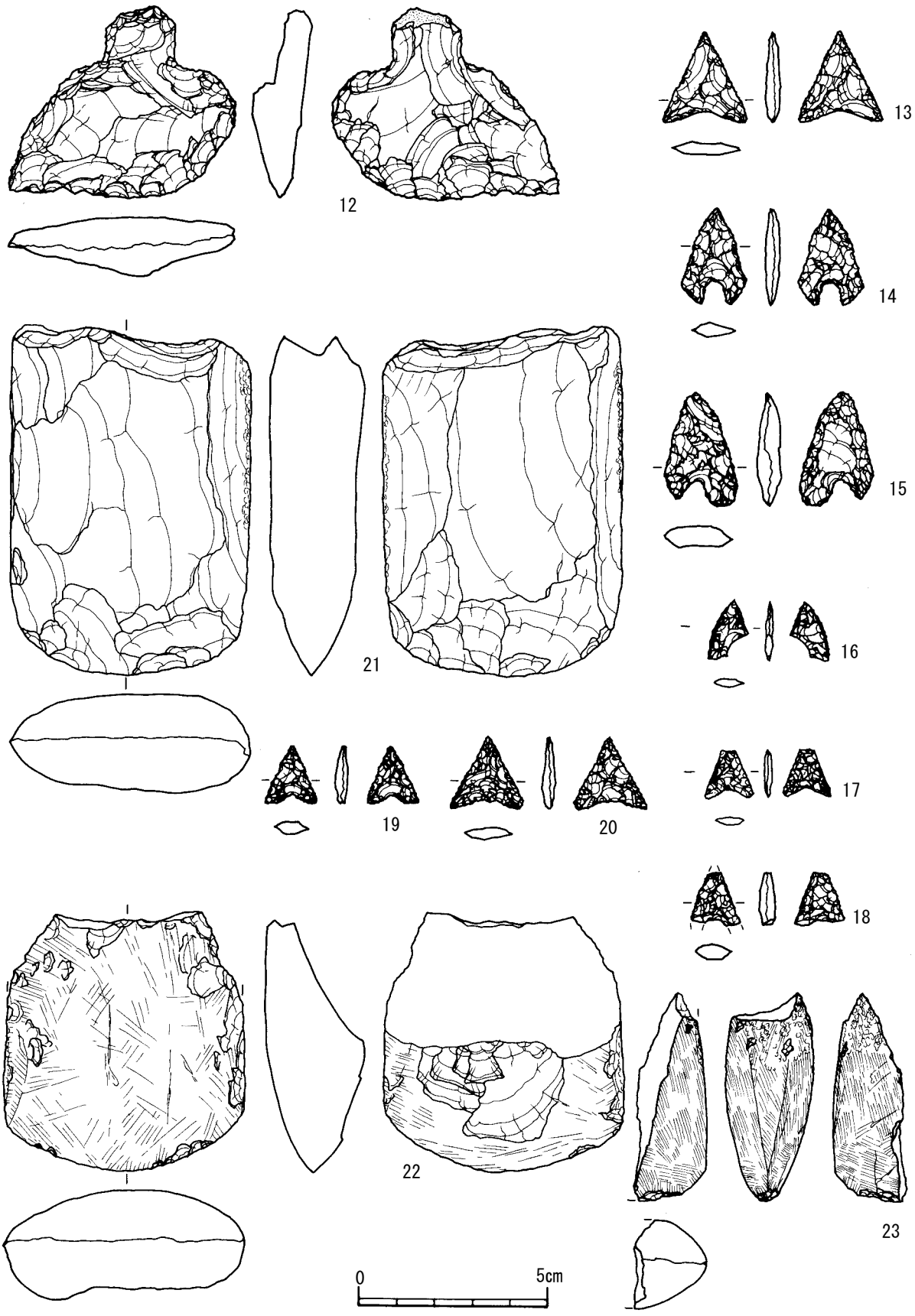
12はＤ２区，Ⅲａ層から出土した。ハリ質安山岩を素材にした厚みのある剥片を用いた横型石匙で，やや大きなつまみ部をもち，下縁部を丁寧な交互剥離により調整を施している。刃部は外湾するものである。

石鏃（13～20）

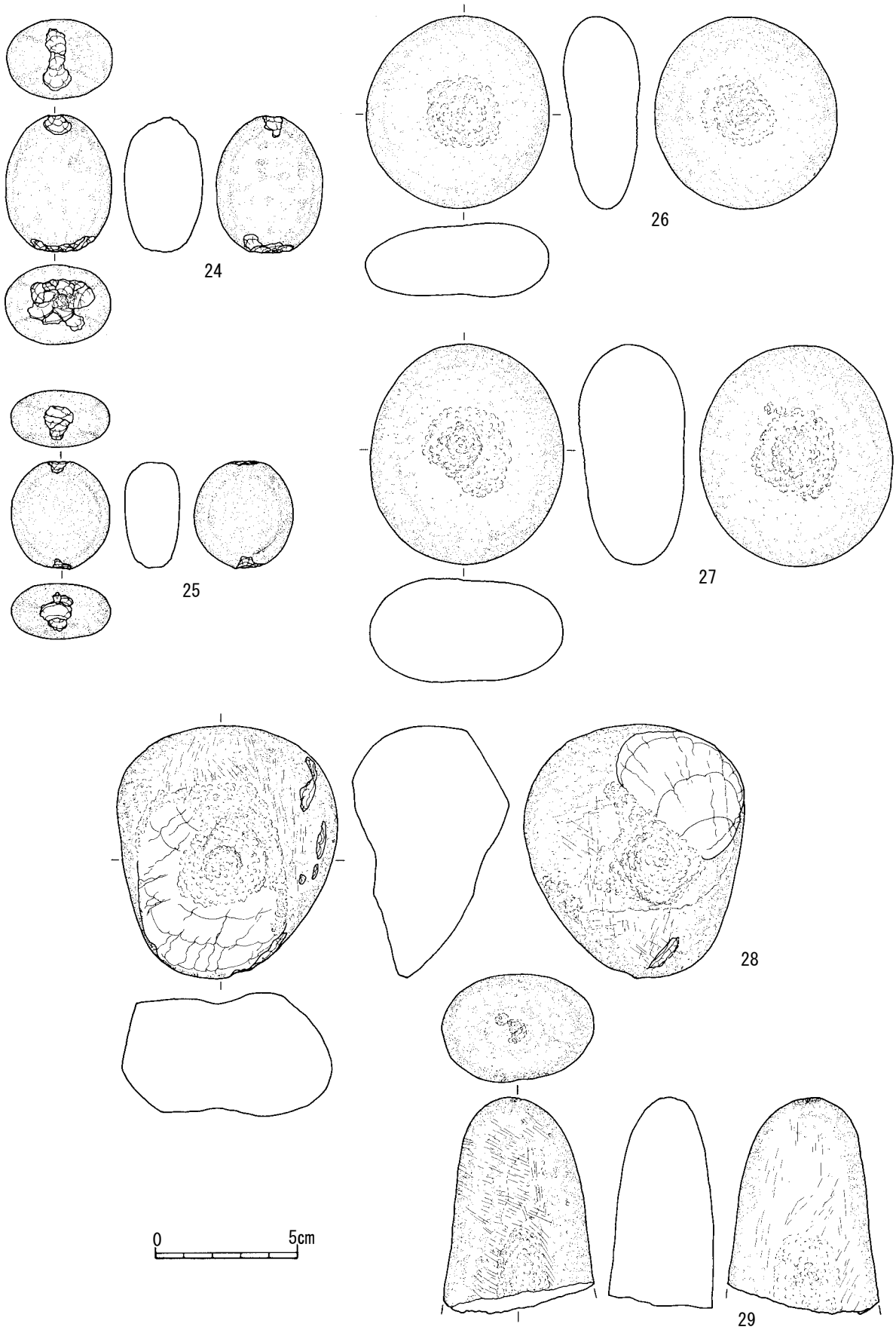
13は安山岩を素材にした石鏃で，先端部は鋭く，側辺がまっすぐで三角形を呈す。基部は逆刺が鋭く抉りが浅い。14は頁岩を素材にしたもので，側辺は側面が外弯し，最大幅が下方にある。基部は逆刺が鋭く抉りが極めて深い。15はチャートを素材にしたもので，やはり側辺の最大幅が下方にあり，基部は逆刺が円く抉りが極めて深く，片脚が極端に違うものである。16は佐賀県の腰岳産黒曜石を素材にしたもので，先端部は鋭く側辺は側面が外弯し，最大幅が下方にある。基部は逆刺が鈍く抉りが深いが片脚が欠損している。17は上牛鼻産の黒曜石を素材にしたもので，先端部は欠損しているが，側辺はまっすぐで三角形を呈し，基部は逆刺が鋭く抉りが深い。18はハリ質安山岩を素材としたもので，先端部と基部は欠損している。側辺はまっすぐで三角形を呈し，抉りは深い。19は上牛鼻産の黒曜石を素材にしたものである。先端部が鋭く，側辺がまっすぐで三角形を呈す。基部は逆刺が鋭く抉りが深いものである。20は佐賀県の腰岳産の黒曜石を素材にしたもので，先端部は鋭く，側辺はまっすぐで三角形を呈し，基部は逆刺が鈍く抉りが浅い。

石斧（21～23）

21は頁岩を素材にした。22は砂岩を素材にした磨製石斧の刃部である。敲打による整形の後，刃部付近に丁寧な研磨を行い，蛤刃を形成している。表裏面には敲打痕がみられる。23はホルンフェルスを素材にした磨製石斧の刃部である。敲打による整形の後，丁寧な研磨を行っている。刃部は蛤刃で使用痕がみられ，側縁部には敲打痕が認められる。



第12図　縄文石器(1)



第13図　縄文石器(2)

石錘（24・25）

24は安山岩の円礫を素材にした石錘である。楕円形の両端を調整して凹部を作り，紐を通して使用したものと考えられる。重量70ｇを測る。25は砂岩の円礫を素材にしたものである。楕円形の長軸両端に調整剥離を加え，凹部を作り24同様の使用が考えられる。重量は35ｇを測る。

凹石（26～29）

26は砂岩の平扁な円礫を素材にした凹石である。表裏面の中央部に敲打による凹みがあり，側縁部にも敲打痕がみられる。27も同様なものであるが厚みがある。28は円礫を用いたもので，やはり中央部１か所に敲打による凹みがみられる。全体的に敲打痕が認められる。29は楕円状の円礫を素材に用いたもので，欠損しているが，表裏面中央部に敲打痕がみられる。凹みは顕著でない。

第５表　縄文時代石器計測表

番号	挿図	器種	石材	区	層	遺物番号	重量g	長さcm	幅cm	厚みcm	備考
1	9	細石刃	黒曜石上牛鼻	Ｃ３	Ⅶ	2199	0.1	0.7	0.5	0.2	
2		細石刃核	黒曜石三船	Ｃ３	Ⅲ	2600	1.7	1.2	1.2	1.3	
3		剥片	瑪瑙	Ｄ２	Ⅵ	2516	12.7	5.0	2.5	1.2	
12	12	石匙	ハリ質安山岩	Ｄ２	Ⅲａ	2408	32.0	6.2	4.7	1.4	
13		石鏃	ハリ質安山岩	Ｄ３	Ⅱｂ	2592	1.1	2.6	2.2	0.4	
14		石鏃	頁岩	Ｄ１	Ⅲ	2520	1.1	2.5	1.7	0.4	
15		石鏃	黒曜石	Ｅ２	Ⅲ	2269	2.9	3.0	1.8	0.5	
16		石鏃	黒曜石腰岳	Ｄ２	Ⅲ	2518	0.3	1.6	0.9	0.2	
17		石鏃	黒曜石上牛鼻	Ｃ３	Ⅲ	2657	0.3	1.2	1.0	0.2	
18		石鏃	ハリ質安山岩	Ｃ２	Ⅲａ	473	0.6	1.5	1.3	0.4	
19		石鏃	黒曜石上牛鼻	Ｅ３	Ⅲ	1963	0.5	1.7	1.4	0.3	
20		石鏃	黒曜石腰岳	Ｃ２	Ⅱｂ	310	0.6	2.2	1.9	0.3	
21		磨製石斧	頁岩	Ｃ２	Ⅱ	1807	248.0	9.1	6.2	2.6	
22		磨製石斧	安山岩	Ｅ２	表		134.0	6.6	6.4	2.6	
23		磨製石斧	砂岩	Ｃ２	Ⅱ	321	26.0	5.7	1.8	2.2	
24	13	石錘	安山岩	Ｃ３	Ⅱｂ	2178	70.0	4.7	3.7	2.7	
25		石錘	砂岩	Ｃ２	Ⅱｂ	2094	35.0	3.7	3.5	1.9	
26		凹石	砂岩	Ｄ２	Ⅱｂ	640	162.0	6.7	6.5	2.5	
27		凹石	砂岩	Ｅ２	Ⅱｂ	1589	283.0	7.6	6.7	3.6	
28		凹石	砂岩	Ｄ２	Ⅱｂ	702	436.0	9.0	7.8	5.3	
29		凹石	砂岩	Ｅ２	Ⅱ	1599	545.0	10.4	8.4	3.9	

第５節　古墳時代

古墳時代の遺物はＣ・Ｄ－１・２区のⅡｂ～Ⅲ層上部にかけて散在して出土した。古墳時代の遺物は成川式土器が主であり，器種は甕形土器・壺形土器・坩形土器・高坏形土器・手捏ね土器に分類される。小片が多かったため29点を図示した。

甕形土器（37～44）

30は口縁部がくの字状に外反し，口縁部外面を縦方向のハケナデで仕上げ，胴部との間に投をもつものである。内面は横方向のハケナデで仕上げている。焼成は良く薄く仕上げている。口径は24.0㎝を測る。31も同様の口縁部で口唇部は平坦である。口径32.4㎝を測る大型のものである。32は屈曲部がなく，頸部から口縁部にかけて外反するものである。外面は縦方向のヘラナデで仕上げている。口径は26.9㎝を測る。33は口縁部がくの字状に外反するもので，ナデ調整を行っている。頸部に投をもつもので，口径28.0㎝を測る。34は内外面ともナデ調整を施したもので，口縁部上方で方向を変えている。口径26.7㎝を測る。35は頸部に投をもつもので，内外面とも横方向のナデ調整を行っている。36は色調が淡褐色で胎土に砂粒を多く含んでいる。やはり頸部に屈曲がみられる。37～38は口縁部がくの字状に外反し，口縁部外面を縦方向のハケナデで仕上げ，胴部との間に段をもつものである。内面は横方向のハケナデで仕上げている。39は口唇部にもハケナデ調整を施している。40・41は頸部に貼り付け突帯をもつものである。40はゆるく外反するもので，口径は27.2㎝を測る。貼り付け突帯の断面形は半円形でナデ整形で仕上げている。41も同様で口径は26.6㎝を測る。42～44は甕形土器の脚部である。42・43はナデ調整がなされ，44は脚部の内外面にハケ目による調整が施されている。

壺形土器（45～53）

壺形土器は胴部と底部のみの出土であった。45～51は胴部の肩部に貼り付け突帯をもつものである。貼り付け突帯の断面形は半円形でヘラ状施文具により刻目を施している。内外面とも器面調整はナデ調整を施している。52・53は底部である。52は平底で外面はヘラ磨き調整を行っている。53も平底でナデ調整を施している。

坩形土器（54）

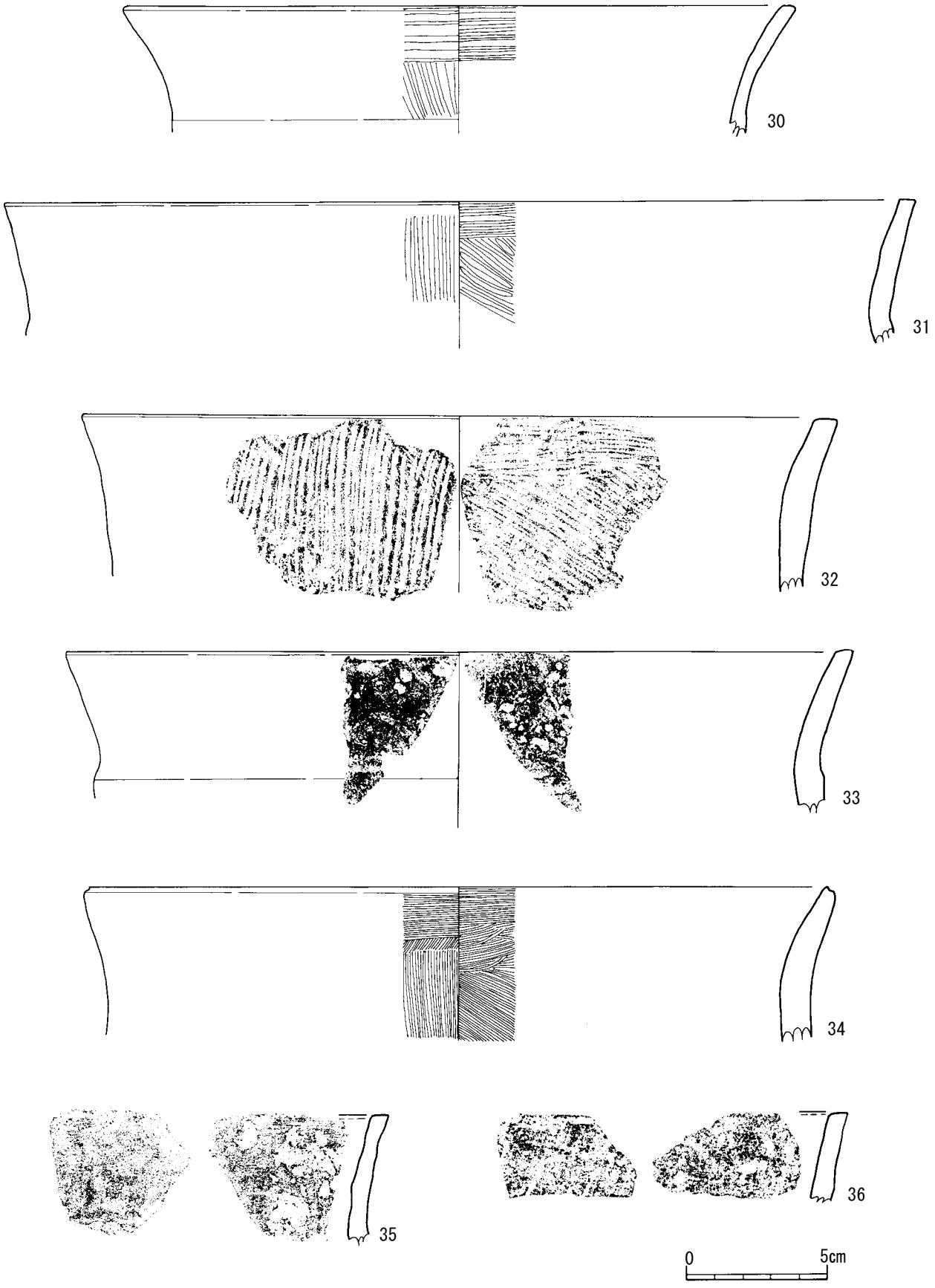
坩形土器は1点のみの出土である。胴部のみであるが，口縁部が長く外へ反するものであると考えられる。頸部に投をもち外面は丁寧なナデ調整を施している。

高坏形土器（55・56）

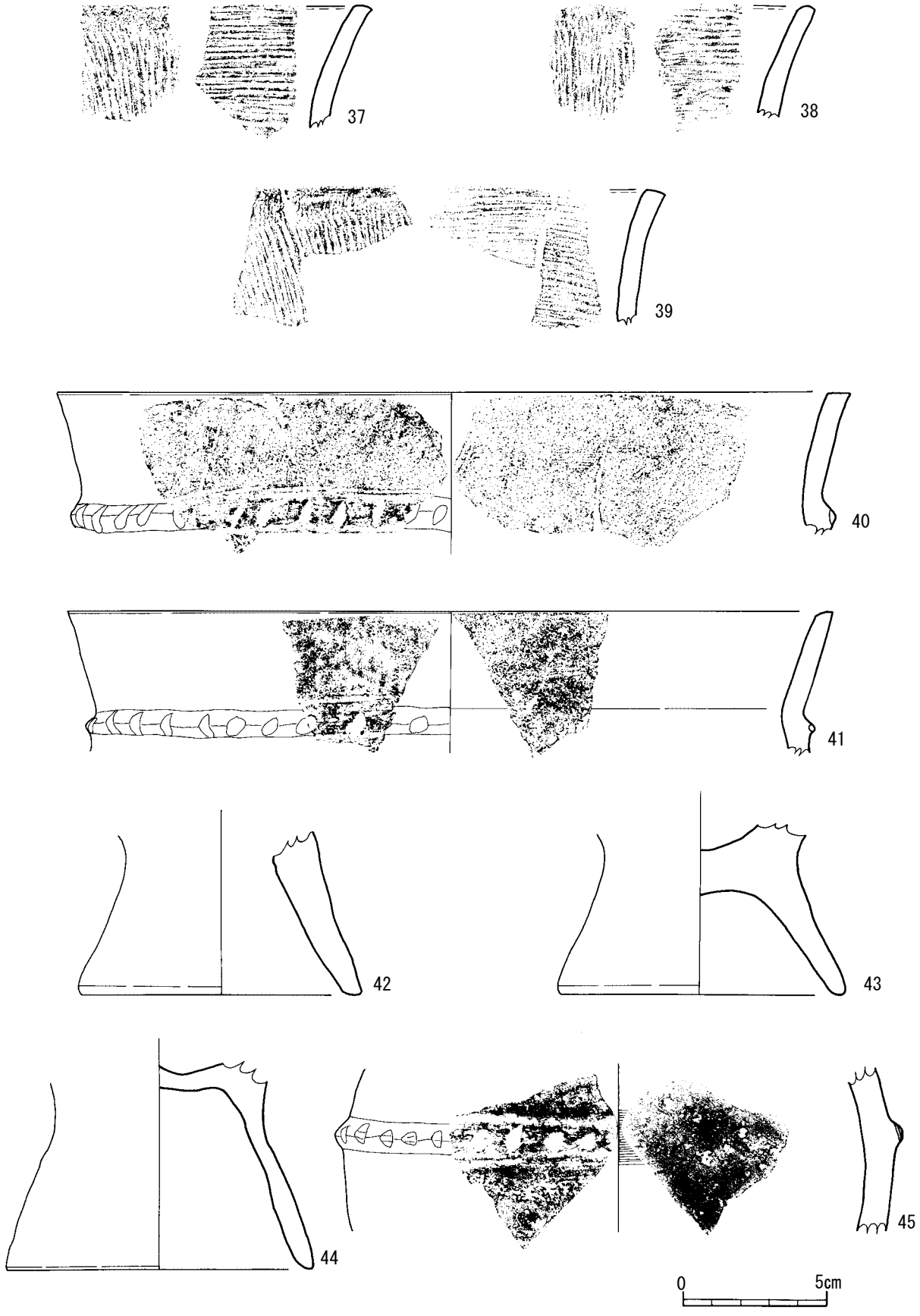
55・56は高坏脚部である。筒部のみであるが裾部との境がはっきりしないものである。55は外面に赤色顔料を塗り込めている。

手捏ね土器（57～60）

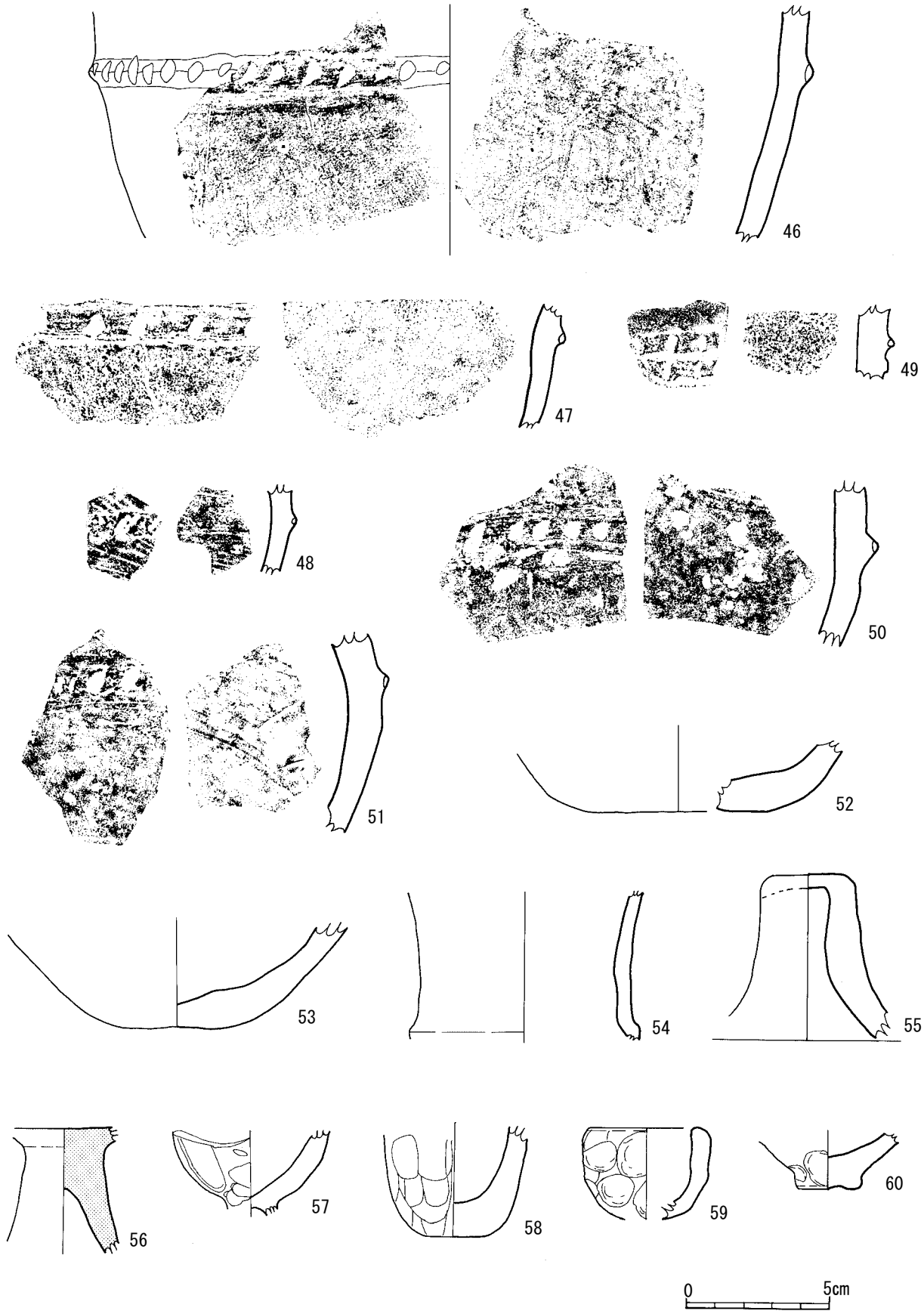
57は脚台を欠損しているが甕形である。58は鉢形で平底を呈する厚みのあるものである。59も鉢形の口縁部で口径は4.0㎝を測る。口縁部が内反するマリ形のものである。60は充実高台をもつ鉢形でナデ調整を施している。



第14図　成川式土器(1)



第15図　成川式土器(2)



第16図　成川式土器(3)

第６表　成川式土器観察表

番号	挿図	遺物番号	器　種	出土区	層	色　調	胎　土	調　整	焼成	備考
30		1849	甕	D1	Ⅱb	暗茶褐色	Q・PL	ナデ	良	
31		1178	甕	D1	Ⅱ	暗茶褐色	Q・PL		良	
32		1660	甕	C2	Ⅱb	暗褐色	Q・PL	ハケ	普通	
33	14	2369	甕	D2	Ⅱb	淡赤褐色	Q・PL	ナデ	普通	
34		2446	甕	C1	Ⅲ	黒褐色	Q・PL	ナデ	良	
35		718	甕	D2	Ⅱb	暗褐色	Q・PL		普通	
36		2440	甕	C1	Ⅲ	淡褐色	Q･PL＋H	ナデ	普通	
37		1751	甕	C2	Ⅱ	赤褐色	Q・PL	ハケ	良	
38		1748	甕	C2	Ⅱb	淡茶褐色	Q・PL	ハケ	普通	
39		1215	甕	D2	Ⅱb	淡赤褐色	Q・PL	ハケ	良	
40		2445	甕	C1	Ⅲ	暗褐色	Q･PL＋H	ナデ	普通	
41	15	2450	甕	C1	Ⅲ	暗褐色	Q･PL＋H	ナデ	普通	
42		1851	甕	C1	Ⅲ	赤褐色	Q･PL＋H	ヘラ削り	普通	
43		597	甕	C2	Ⅱb	暗褐色	Q･PL＋H	ナデ	普通	
44		1681	甕	D3	Ⅲ	暗褐色	Q･PL＋H	ナデ	普通	
45		1363	壺	C2	Ⅱb	淡赤褐色	Q・PL	ナデ	良	
46		1096	壺	C1	Ⅱb	淡赤褐色	Q･PL＋H	ナデ	良	
47		1990	壺	C1	Ⅲ	暗褐色	Q･PL＋H	ナデ	普通	
48		1833	壺	D2	Ⅱb	淡赤褐色	Q・PL	ナデ	普通	
49			壺	C2	Ⅱ	淡赤褐色	Q・PL	ナデ	普通	
50		1852	壺	C1	Ⅲ	淡赤褐色	Q・PL	ナデ	普通	
51		1434	壺	C1	Ⅱb	暗褐色	Q・PL	ナデ	良	
52			壺	C2	表	暗褐色	Q・PL	ナデ	良	
53	16		壺	3T	Ⅰ	褐色	Q･PL＋H	ナデ	普通	
54		456	坩	C1	Ⅲa	淡褐色	Q・PL	ナデ	普通	
55			高坏	D2	Ⅱ	赤褐色	Q・PL	磨き	普通	丹塗り
56		892	高坏	D2	Ⅱb	淡褐色	Q・PL	ナデ	普通	
57		1791	手づくね	D2	Ⅲ	淡茶褐色	Q･PL＋H	ナデ	普通	
58		1624	手づくね	D2	Ⅱb	淡褐色	Q･PL＋H	ナデ	普通	
59			手づくね	D2	Ⅱ	淡褐色	Q･PL＋H	ナデ	普通	
60		2405	手づくね	D2	Ⅲb	暗褐色	Q・PL	ナデ	普通	

第６節　古　　代

１　調査の概要

古代の調査は，Ｂ・Ｃ・Ｄ－2・3・4区のⅡｂ層出土遺物とⅢ層上面で検出された遺構であった。遺構は掘立柱建物跡（４間×４間・総柱）１棟，土坑２基，竪穴遺構３基，柱穴が検出された。また部分的に焼土も確認されている。遺物は土器・石器・鉄製品等約2,700点が出土した。土器では須恵器（坏蓋・碗・壺・甕），土師器（坏・埦・皿），焼塩壺，紡錘車，土錘，黒色土器，墨書土器，刻書土器等が出土している。石器には砥石・磨石があり，鉄器には紡錘車，刀子，鉄滓が出土している。また桃の種子，硫黄も遺構内から出土した。

２　遺構

①　掘立柱建物跡

掘立柱建物跡はＣ・Ｄ－2・3区に検出された。主軸をＮ－90°－Ｗにとる東西４間（約5.7ｍ）×南北4間（約5.63ｍ）を有する総柱建物である。梁間の1間が平均1.88ｍ，桁行間が1.90ｍとなる。柱穴の掘方は円形ないし楕円形のプランを呈し，直径32～45㎝を測る。深さの平均は検出面より55㎝である。柱痕に関しては確認できるものがなく，柱の抜き取りが行われた後に埋め戻したことに起因すると考えられる。

柱穴からは土師器・須恵器の小片が出土したが，細片が多く図示できるものは61～64の4点であった。61は内外面とも黒く研磨したもので，高台は外向し端部が丸くおさまるものである。62は土師器の皿で完形品である。あげ底のヘラ切り底部で，体部は若干内湾するもので，口径は9.6㎝，器高は1.8㎝を測るものである。63・64は土師器の埦で，高台は外向し端部が丸くおさまるものである。

②　柱穴

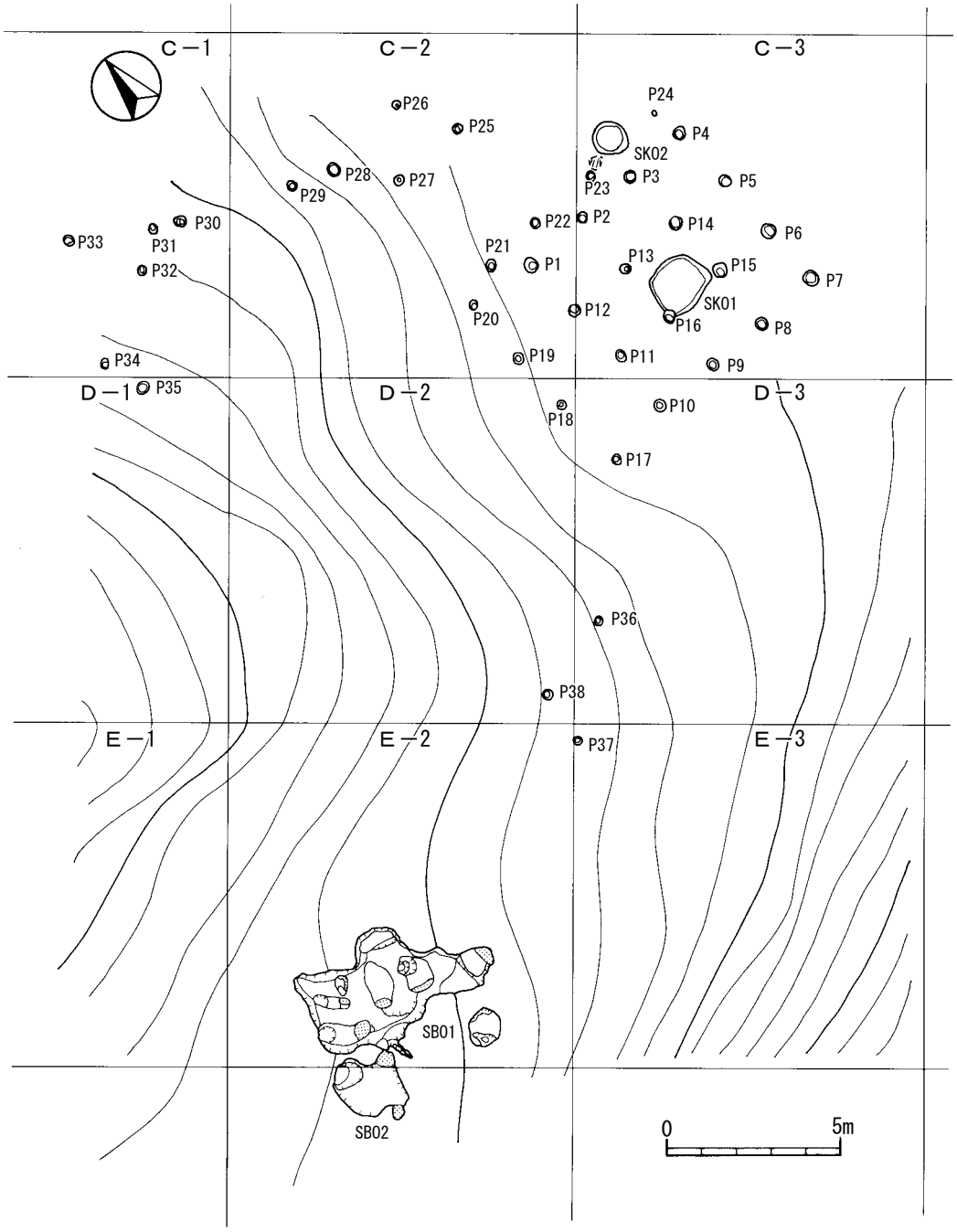
掘立柱建物跡以外にも14個の柱穴が検出された。65～67は柱穴から出土した遺物で，65は土師器皿の完形品である。あげ底のヘラ切り底部で，体部は若干内湾するもので，口径は10.7㎝，器高は1.6㎝を測るものである。67は底径10.7㎝を測る土師器埦である。66は土錘である。

③　土坑

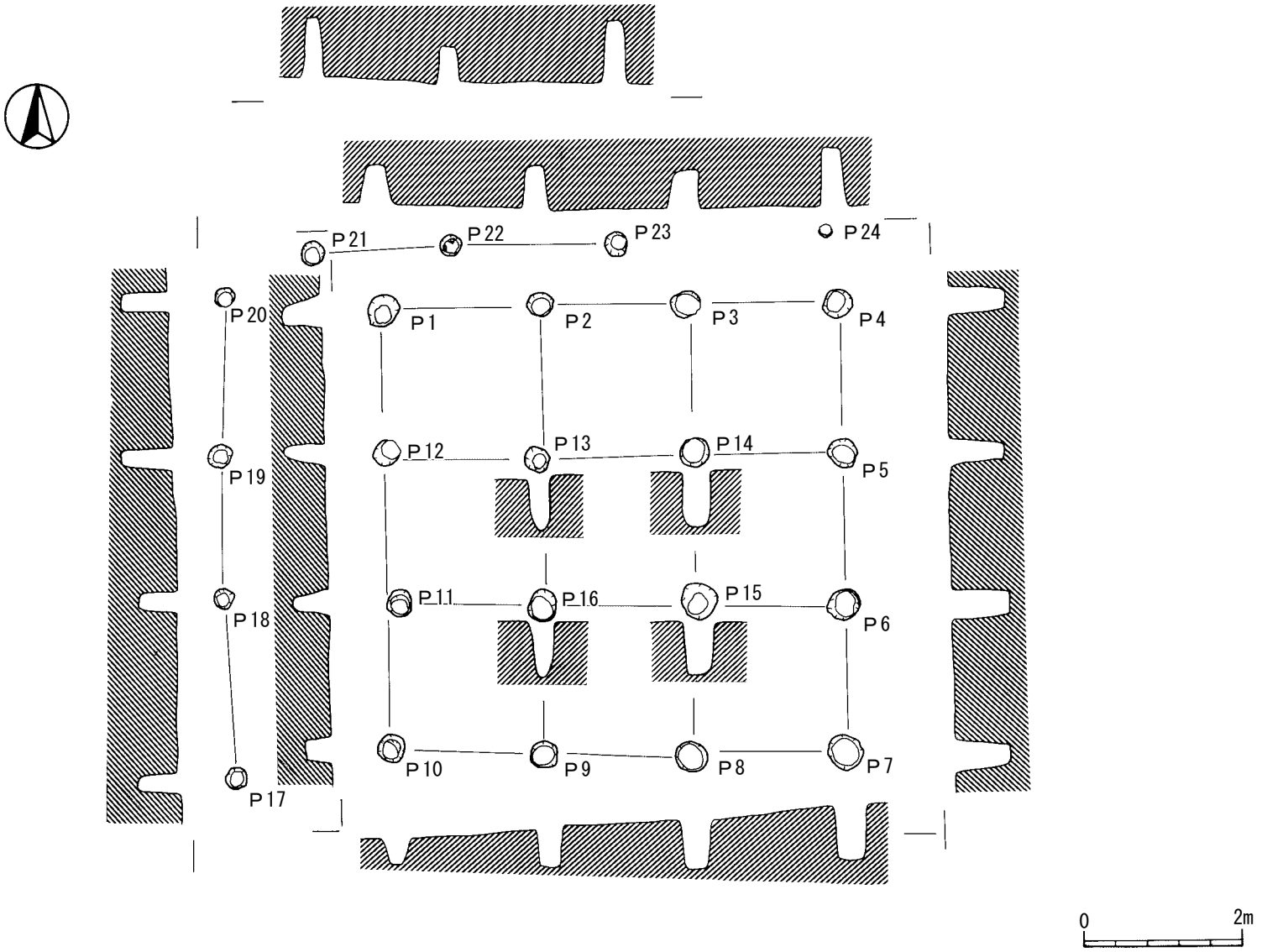
Ｃ－3区Ⅲ層上面で土坑2基を検出した。

土坑1は2.48ｍ×2.23ｍを測る隅丸方形を呈するもので，断面形は逆台形状をなし，底部は平坦で検出面よりの深さ58㎝を測る。掘立柱建物跡の柱穴と複合しているが平坦部に柱穴が掘りこまれていた。土坑内からの遺物は須恵器（壺・甕），土師器（坏・埦・皿），黒色土器，鉄器（紡錘車・刀子），桃の種子など多量の遺物が出土した。

68は口径38.0㎝，高さ19.5㎝を測る甕で，やや中膨らみの胴部をもち，外反する口縁部をもつものである。調整はナデ整形で，外面にススが付着している。69は須恵器甕の胴部で外面は平行状叩きで内面に同心円状叩きがみられるものである。70・71は土師器坏で，あげ底気味の底部から明瞭な稜をなし立ちあがる体部で，口縁部はやや外反するものである。底部はヘラ切り底である。72は内外面とも黒色研磨された埦である。底径6.3㎝を測る。73～77は内黒土師器の埦である。器高は浅く，立ちあがりは緩やかで，斜め上方に直線的にのび，口縁部で段をもち，口縁端部は外反


C－1
C－2
C－3
D－1
D－2
D－3
E－1
E－2
E－3
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
P15
P16
P17
P18
P19
P20
P21
P22
P23
P24
P25
P26
P27
P28
P29
P30
P31
P32
P33
P34
P35
P36
P37
P38
SK01
SK02
SB01
SB02
0
5m

第17図　遺構配置図

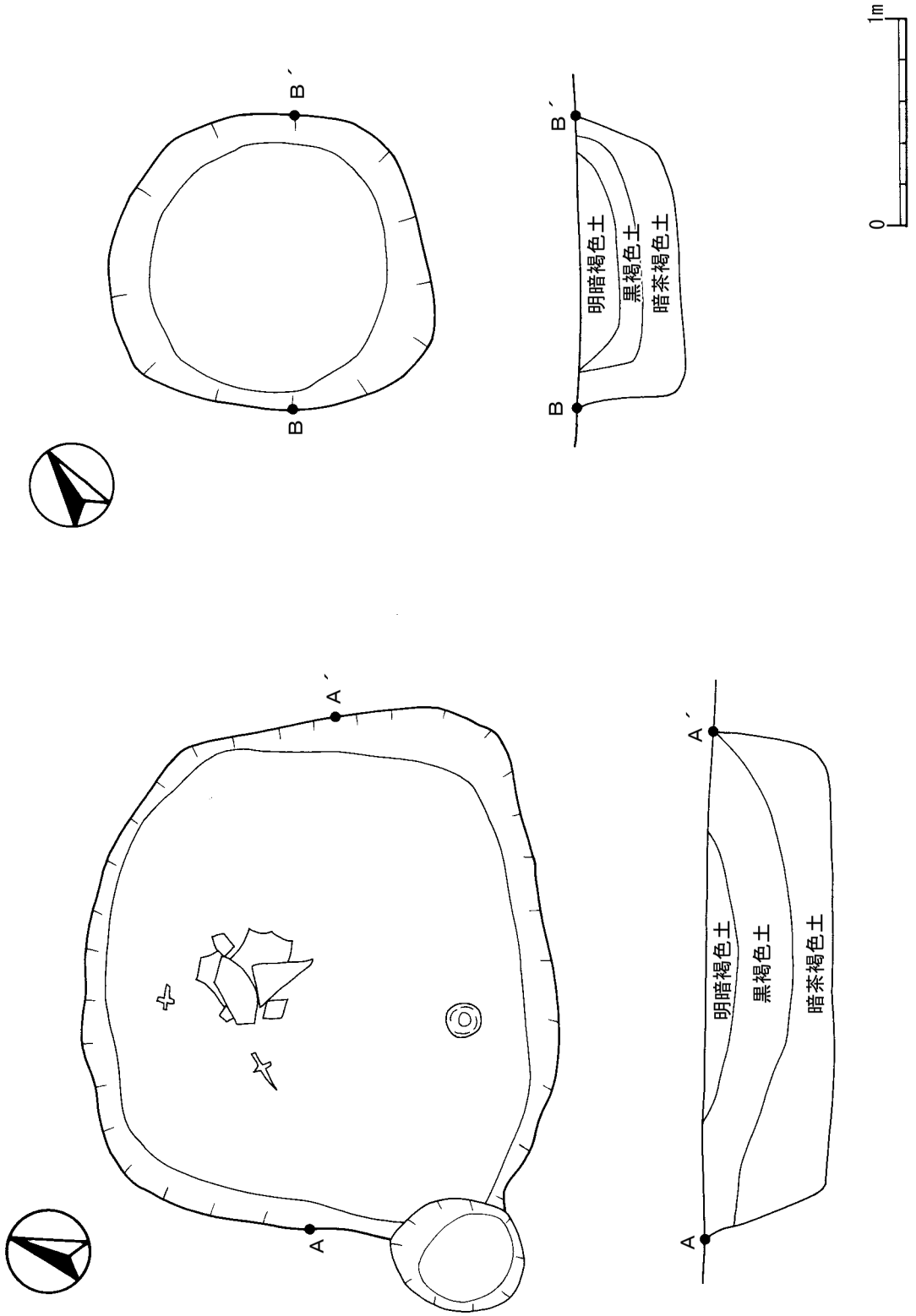

P21
P22
P23
P24
P20
P1
P2
P3
P4
P12
P13
P14
P19
P5
P11
P16
P15
P18
P6
P10
P9
P8
P7
P17
0
2m

第18図　掘立柱建物跡

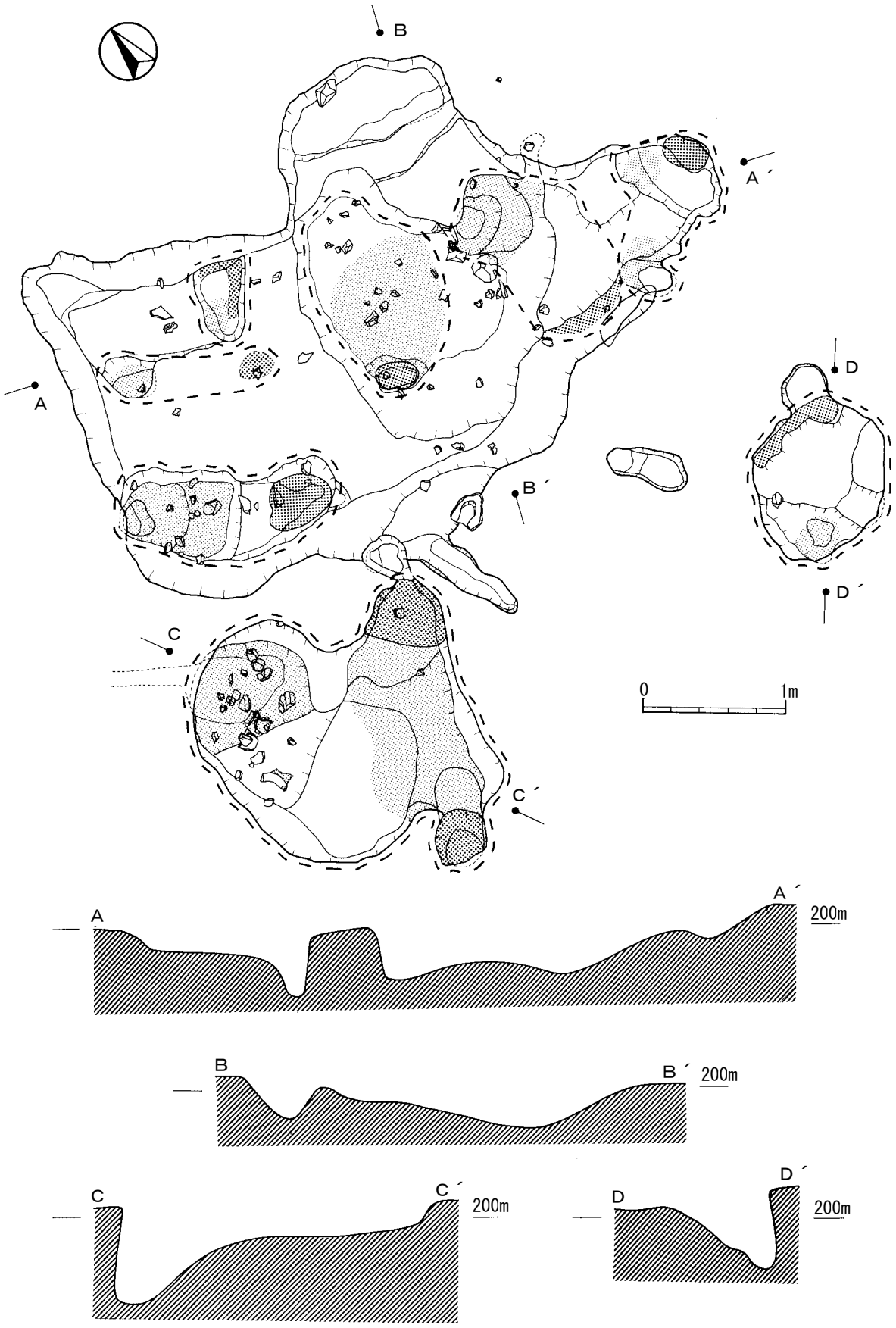
第７表　掘立柱建物跡計測表

３間×３間	梁間柱間 (cm)	梁間間 (cm)	N－00°－E	桁行間柱間	桁行間
P01－P12	170		P01－P02	200	
P12－P11	198	548	P02－P03	186	572
P11－P10	180		P03－P04	186	
P02－P13	194		P12－P13	188	
P13－P16	188	566	P13－P14	194	572
P16－P09	184		P14－P05	190	
P03－P14	184		P11－P16	180	
P14－P15	194	570	P16－P15	198	562
P15－P08	192		P15－P06	184	
P04－P05	192		P10－P09	194	
P05－P06	188	566	P09－P08	186	574
P06－P07	186		P08－P07	194	
平均	188	563		190	570

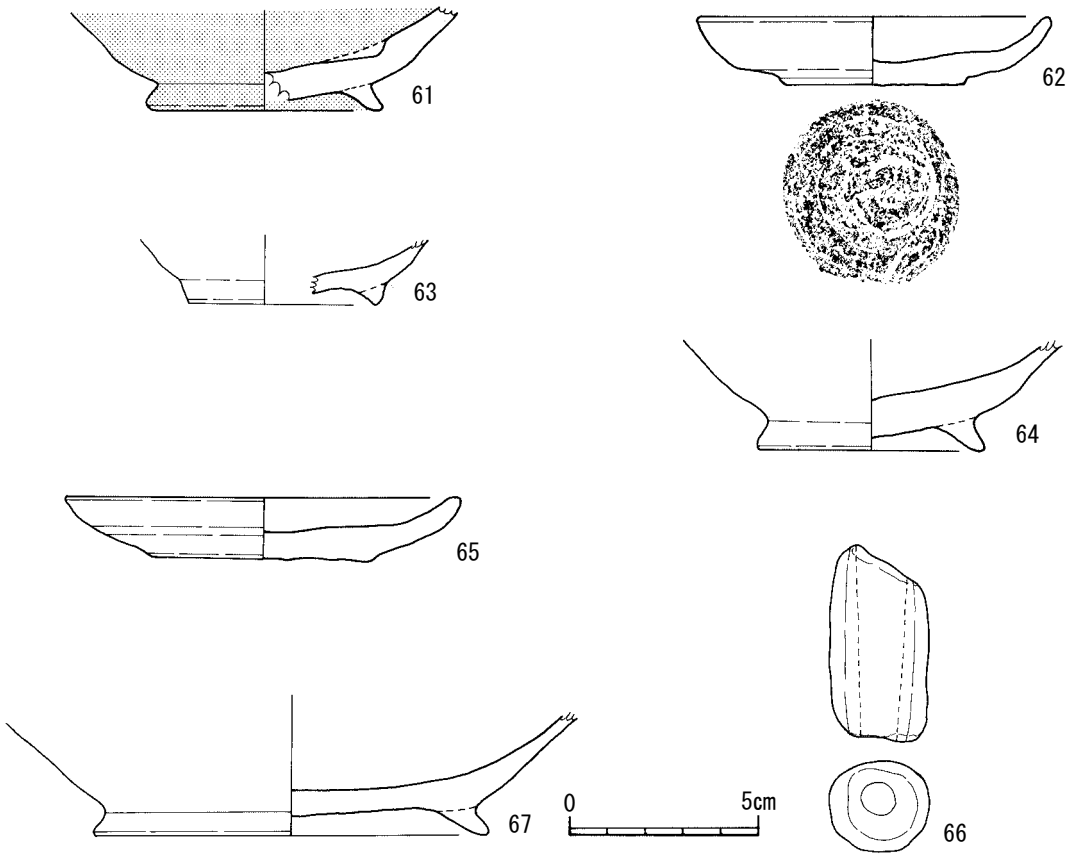
Ｐｉｔ	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	堀り方
P1	48	44	34	
P2	54	32	28	
P3	48	36	32	
P4	70	38	36	
P5	66	39	34	
P6	72	43	38	
P7	66	45	40	
P8	62	40	36	
P9	50	36	34	
P10	32	36	32	
P11	46	32	27	
P12	50	33	28	
P13	66	34	26	
P14	70	38	35	
P15	66	44	42	
P16	71	39	35	
P17	52	27	26	
P18	48	27	23	
P19	64	27	33	
P20	58	26	23	
P21	74	30	26	
P22	46	26	24	
P23	76	28	27	



第19図　土坑１・２



第20図　竪穴状遺構



第21図　遺構出土の遺物(1)

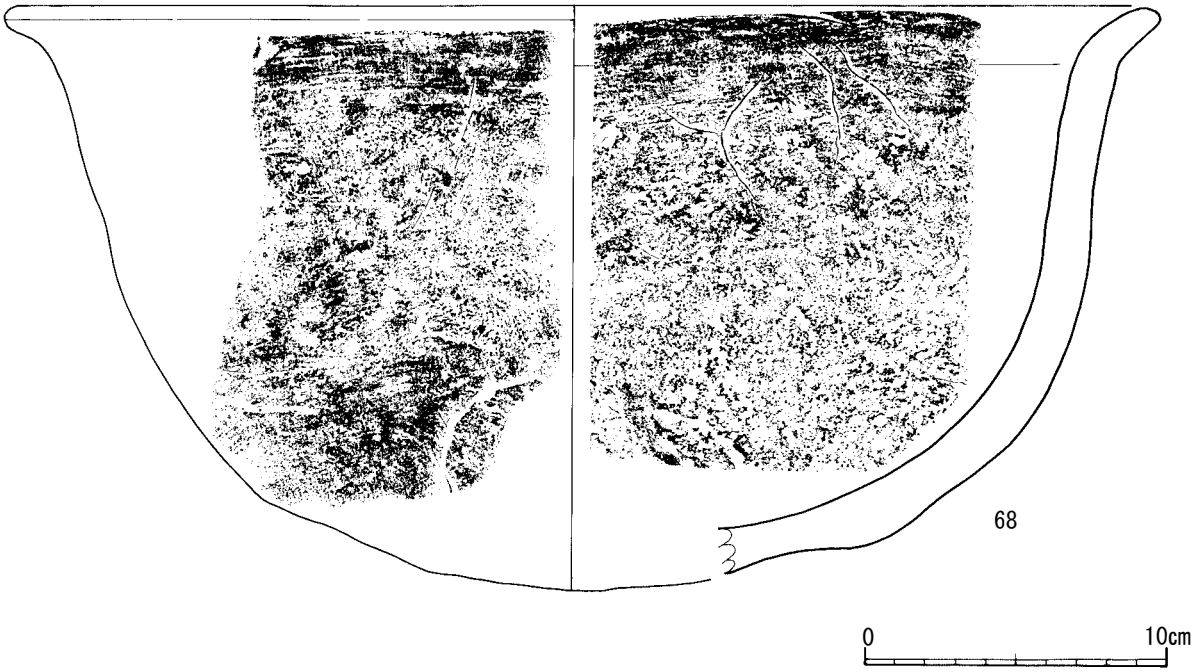
し，尖り気味のものである。口径は14.8～16.0cm を測る。78は内・外面とも赤色顔料が塗られ，外面に稜のみられるものである。高台は外向し端部が尖り気味である。79～82は土師器椀である。83～86はあげ底のヘラ切り底部で，体部と底部の境が若干丸みをおびている。体部は内湾し，口縁端部が丸みをおびるものである。口径は8.4～9.2cm を測る。87は小型の椀で口径6.2cm を測るものである。

土坑２は1.50ｍ×1.42ｍを測る略円形を呈するもので，断面形は逆台形状をなし，底部は平坦で検出面よりの深さ50cmを測る。掘立柱建物跡に隣接する位置で検出された。土坑内の遺物は少なく，図示できるものは88～90の３点であった。88は須恵器の壺で体部から頸部にかけての破片である。外面に平行状叩きを施し，内面は灰色で横ナデ調整を行ったものである。89は内黒土師器で，高台は外向し，端部はやや尖りぎみのものである。底径は6.4cmを測る。90は土師器の坏で，あげ底のヘラ切り底部である。出土遺物は，須恵器壺・内黒土師器・土師器坏が出土した。

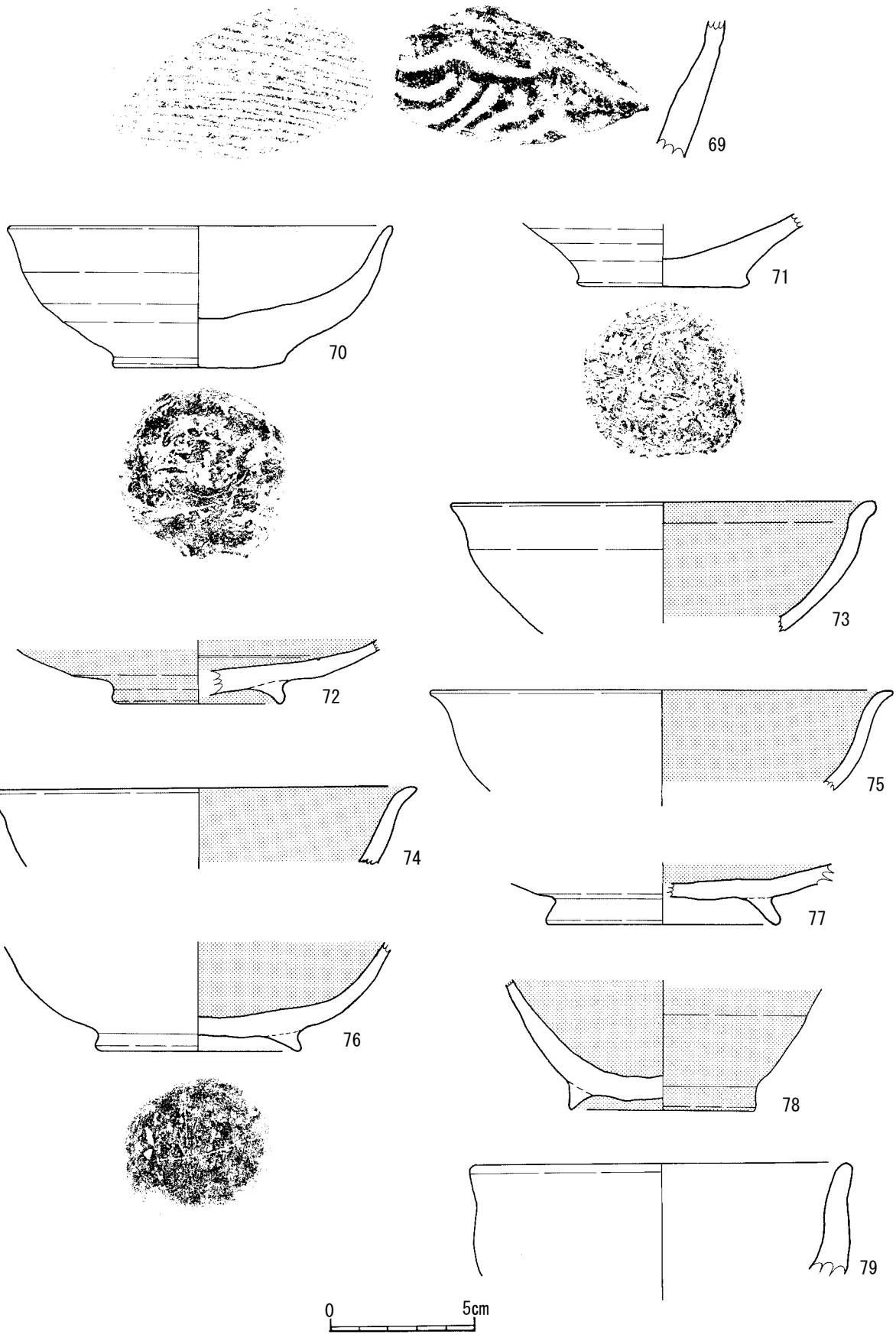
④　竪穴遺構

Ｅ・Ｆ－２区に焼土及び炭化物が検出された竪穴状遺構が２か所検出された。ＳＢ０１は７基の土坑がみられた。土坑は平面径が100cm×40cm の楕円形を呈するもので，土坑内に焼土・炭化物が見られるものである。ＳＢ０２は２か所の土坑が重複した状態で検出された。土坑内には礫も多く出土し，遺物は須恵器・土師器等が上部で出土し，底部付近では遺物の出土はみられなかった。

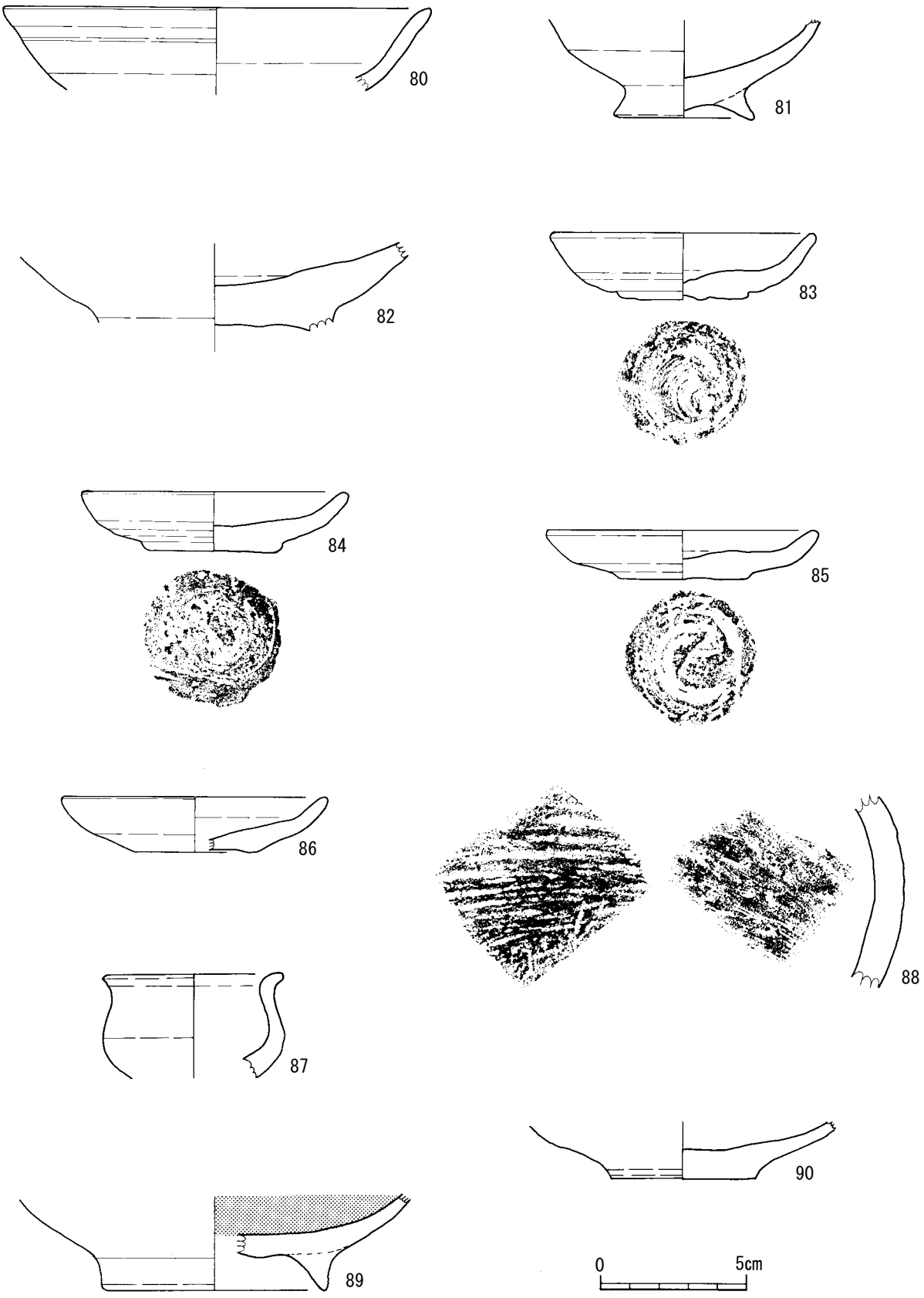
土坑の形態より鍛冶炉の可能性も高く，周辺には羽口・鉄滓等も出土した。また窯壁片も２点程出土している。



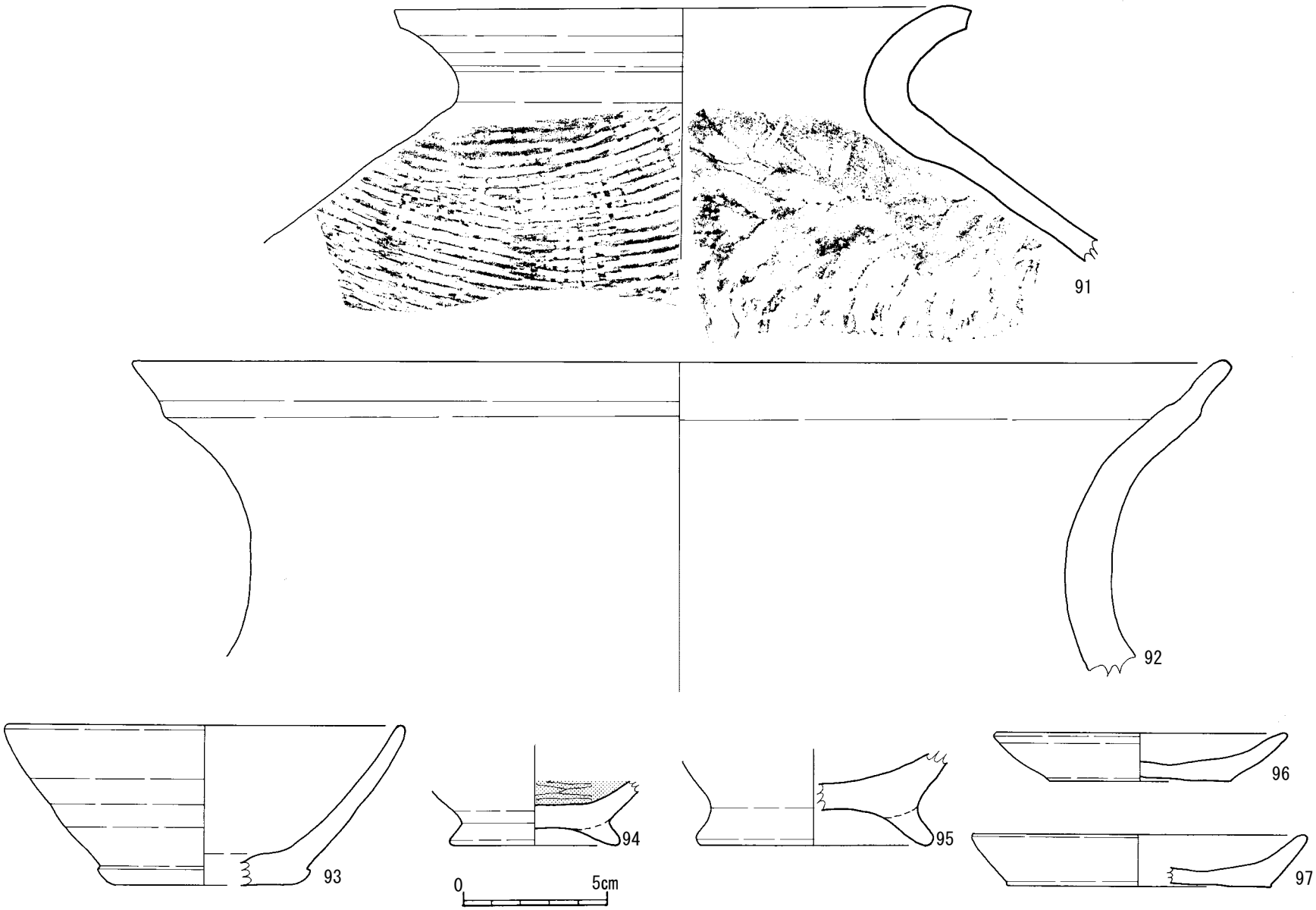
第22図　遺構出土の遺物(2)



第23図　遺構出土の遺物(3)



第24図　遺構出土の遺物(4)



第25図　遺構出土の遺物(5)

第８表　遺構出土遺物観察表

番号	挿図	遺物番号	器種	出土区	層	色　調	胎土	調　整	焼成	備　考
61			埦	Ｃ２	Ｐ08	淡黒褐色	Ｑ・ＰＬ	ナデ	普通	黒色土器
62		2750	皿	Ｃ３	Ｐ39	褐色	Ｑ・ＰＬ	ナデ	良	
63			埦	Ｃ３	Ｐ05	淡褐色	Ｑ・ＰＬ	ナデ	普通	内黒土師器
64	21		埦	Ｃ２	Ｐ09	淡黒褐色	Ｑ・ＰＬ	ナデ	普通	
65			皿	Ｃ２	Ｐ20	淡茶褐色	Ｑ・ＰＬ	ナデ	良	
66			土錘	Ｃ２	Ｐ20	褐色	Ｑ・ＰＬ		粗	
67			埦	Ｃ１	Ｐ29	濃灰褐色	Ｑ・ＰＬ	ヘラ磨き	良	黒色土器
68	22		甕		SK01	淡黒褐色	Ｑ・ＰＬ	ナデ	普通	完形
69			甕	Ｃ３	SK01	灰褐色	Ｑ・ＰＬ	平行	良	
70		2610	坏	Ｃ３	SK01	淡褐色	Ｑ・ＰＬ	ナデ	普通	
71			坏	Ｃ３	SK01	淡灰褐色	Ｑ・ＰＬ	ナデ	良	
72			両黒坏	Ｃ３	SK01	濃灰褐色		ヘラ磨き	良	黒色土器
73			内黒埦	Ｃ３	SK01	淡褐色	Ｑ・ＰＬ	ヘラ磨き	良	
74	23		内黒埦	Ｃ３	SK01	淡灰褐色	Ｑ・ＰＬ	ヘラ磨き	良	
75			内黒埦	Ｃ３	SK01	淡灰褐色	Ｑ・ＰＬ	ヘラ磨き	良	
76		2611	内黒埦	Ｃ３	SK01	淡灰褐色	Ｑ・ＰＬ	ヘラ磨き	良	
77			内黒埦	Ｃ３	SK01	淡褐色	Ｑ・ＰＬ	ヘラ磨き	良	
78			両赤埦	Ｃ３	SK01	淡褐色	Ｑ・ＰＬ	ナデ	普通	赤色土器
79			両赤埦	Ｃ３	SK01	淡朱褐色	Ｑ・ＰＬ	ナデ	良	赤色土器
80			両赤埦	Ｃ３	SK01	淡朱褐色	Ｑ・ＰＬ	ナデ	良	赤色土器
81			土師埦	Ｃ３	SK01	暗褐色	Ｑ・ＰＬ	ナデ	普通	
82		2595	土師埦	Ｃ３	SK01	淡朱褐色	Ｑ・ＰＬ	ナデ	普通	
83			土師皿	Ｃ３	SK01	褐色	Ｑ・ＰＬ	ナデ	普通	
84			土師皿	Ｃ３	SK01	淡朱褐色	Ｑ・ＰＬ	ナデ	良	
85	24	2500	土師皿	Ｃ３	SK01	褐色	Ｑ・ＰＬ	ナデ	良	
86			土師皿	Ｃ３	SK01	淡朱褐色	Ｑ・ＰＬ	ナデ	普通	
87			小型埦	Ｃ３	SK01	黒褐色	Ｑ・ＰＬ	ナデ	普通	
88			壺	Ｃ３	SK02	暗青灰褐色	Ｑ・ＰＬ	平行	普通	須恵器
89			碗	Ｃ３	SK02	淡褐色	Ｑ・ＰＬ	ヘラ磨き	良	
90			坏		SK02	淡褐色	Ｑ・ＰＬ	ナデ	良	
91		SB-39	甕の口縁		SB02	淡朱褐色		格子	良	須恵器
92		44	甕の口縁		SB02	淡黒褐色		ナデ	普通	須恵器
93		28	坏		SB01	暗茶褐色		ナデ	良	
94	25	47	内黒埦		SB02	暗褐色		ヘラ磨き	良	内黒土師器
95		58	土師埦		SB02	淡茶		ナデ	普通	
96		33	土師皿		SB02	淡褐色		ナデ	普通	
97		40	土師皿		SB02	淡褐色		ナデ	良	

３　出土遺物

平安時代の遺物は，Ⅱｂ層の暗黒褐色土から約1,800点の遺物が出土した。須恵器・土師器・黒色土器・墨書土器・刻書土器・焼塩壺・鉄器・紡錘車・土錘・石器等多種な遺物が出土している。

須恵器

須恵器には坏蓋・椀・壺・甕がある。

蓋（98）

98は坏蓋である。平坦な天井部をもつもので，口縁端は丸みをおびて，やや長く開き気味に突出するものである。内外面ともナデ調整を行っている。口径は11.8㎝を測る。

椀（99～105）

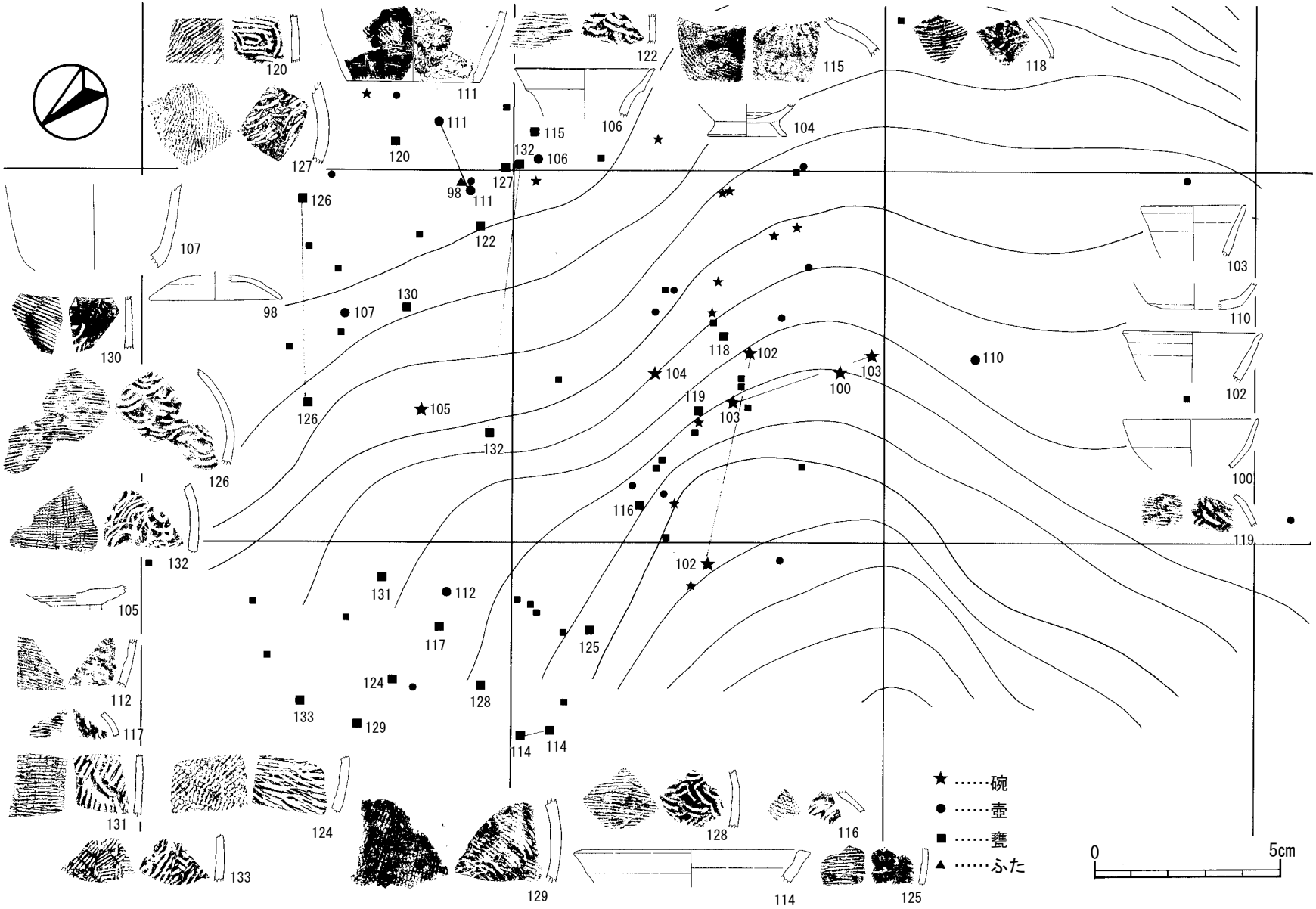
坏と碗の分類を考えたが，本遺跡での須恵器底部が高台付のみであったため，口縁部のみのものも碗とした。99～103は体部のみである。器高が高く口径も9.2～14.2㎝と大きい。99・100は口縁部が直口するもので口縁端部は丸くおさめる。101～103は立ち上がりの急な体部をもち，斜め上方に直線的にのびるもので，口縁端部は外反する。胎土は精良で青灰色を呈し，硬質に焼成されている。104・105は貼り付け高台をもつ椀の底部である。ともに赤茶褐色を呈し，硬質に焼成されている。104は高台高が高く外にひろがっている。105の高台は剥脱している。

壺（106～113）

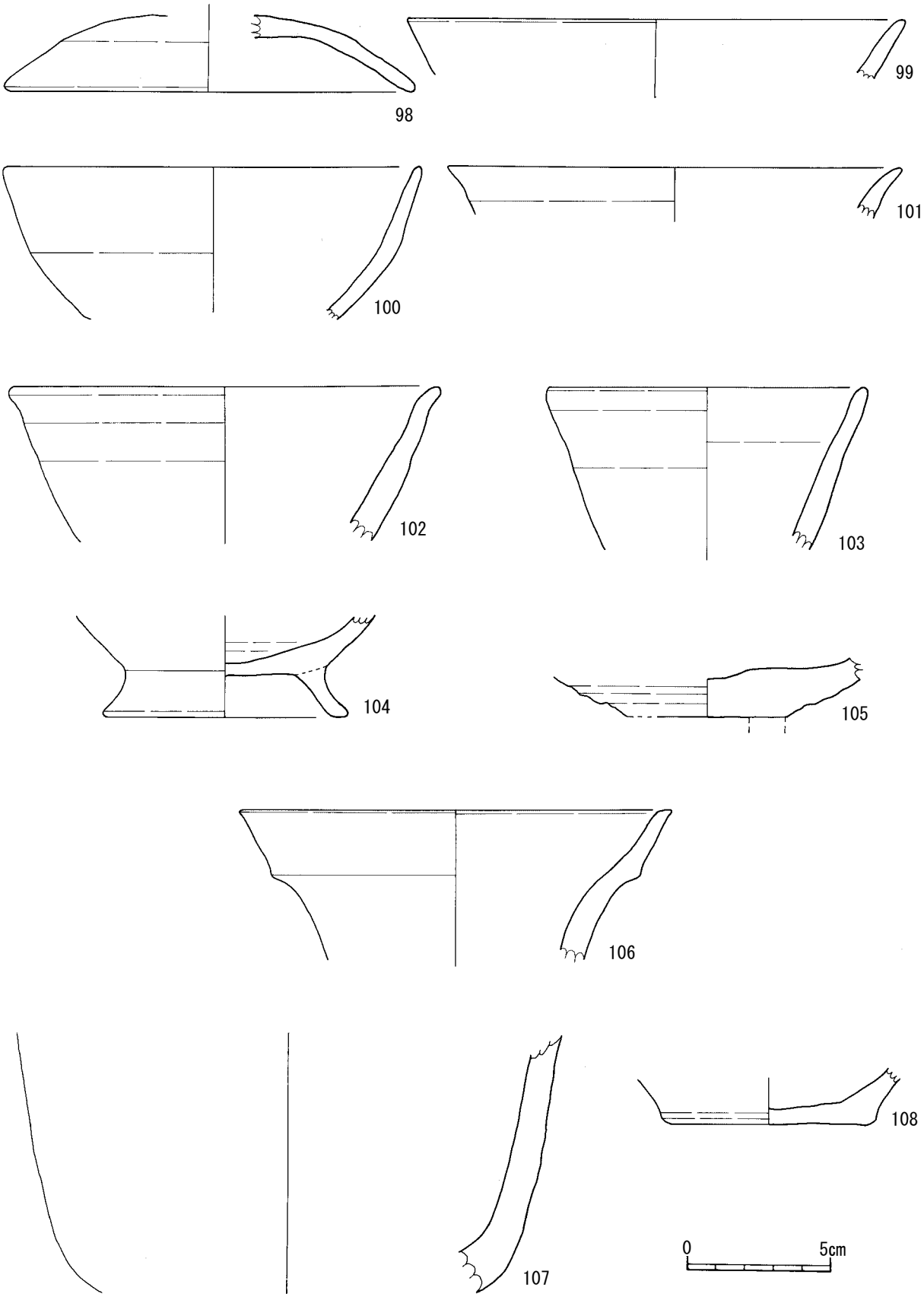
106は口縁部である。頸部が外反し，口縁下位において屈曲するものである。屈曲部には１条の突帯を巡らす。内外面とも緑灰色の自然釉を発している。107の体部は直線的に立ち上がっているもので，底部付近である。赤褐色を呈し，内外面ともナデ調整である。108～113は壺の底部である。108の内面には砂粒が固く付着している。109は低い高台がついたものである。110・111は内外面とも青灰色を呈し，硬く焼成されたものである。

甕（114～133）

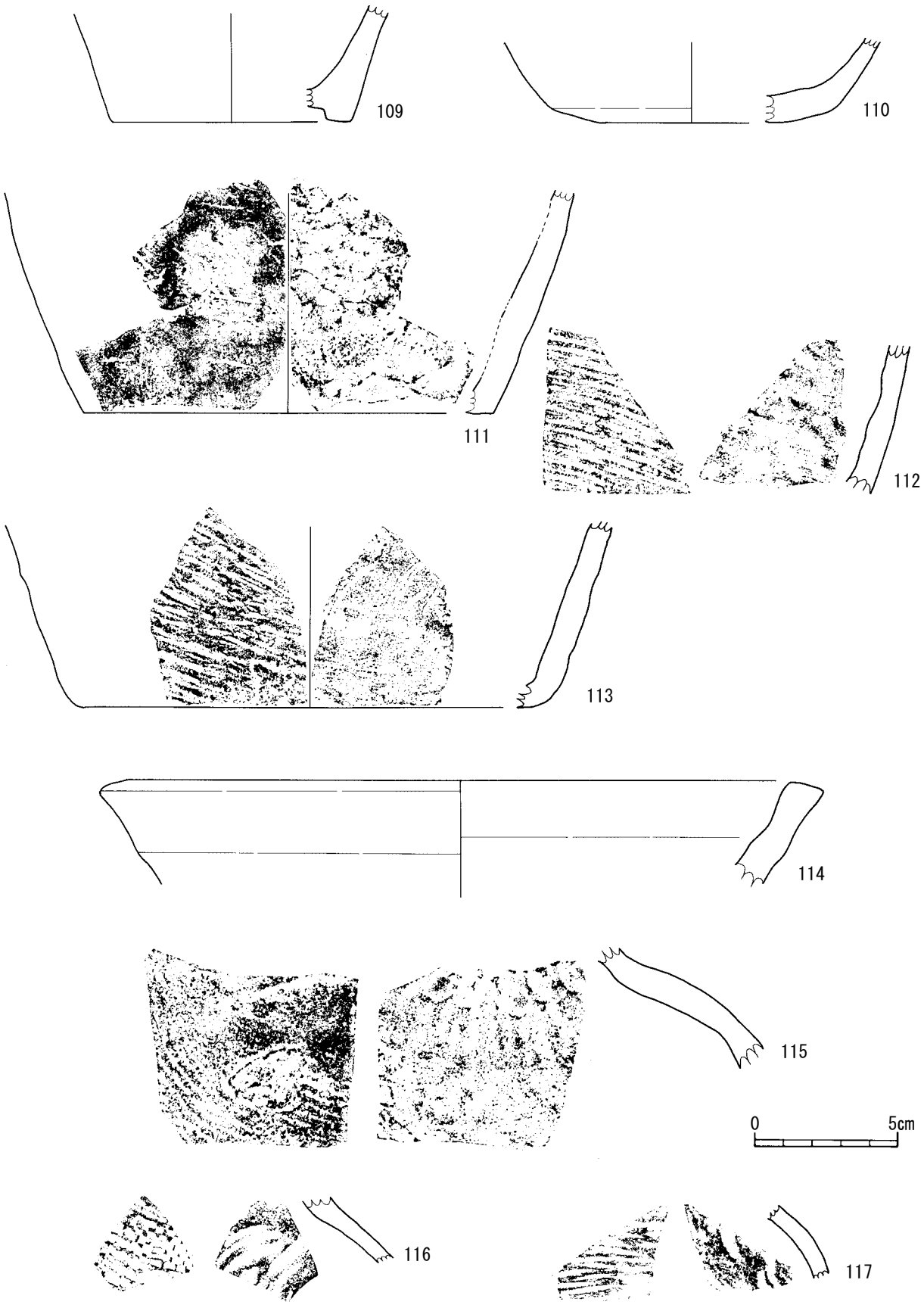
114は甕の口縁部である。頸部から外反し，口縁下位で屈曲して立ち上がるものである。色調は外面が青灰色で内面は淡茶褐色を呈している。115～119は頸部から胴部にかけての部分で，外面を格子状叩き，平行状叩きで内面に同心円状叩きがみられるものである。121・126も同様である。その他は，甕胴部で，外面に平行状，格子状叩きが，内面に平行状，同心円状叩きがみられる。色調は青灰色～灰色が多く，一部に赤茶褐色を呈したものもある。



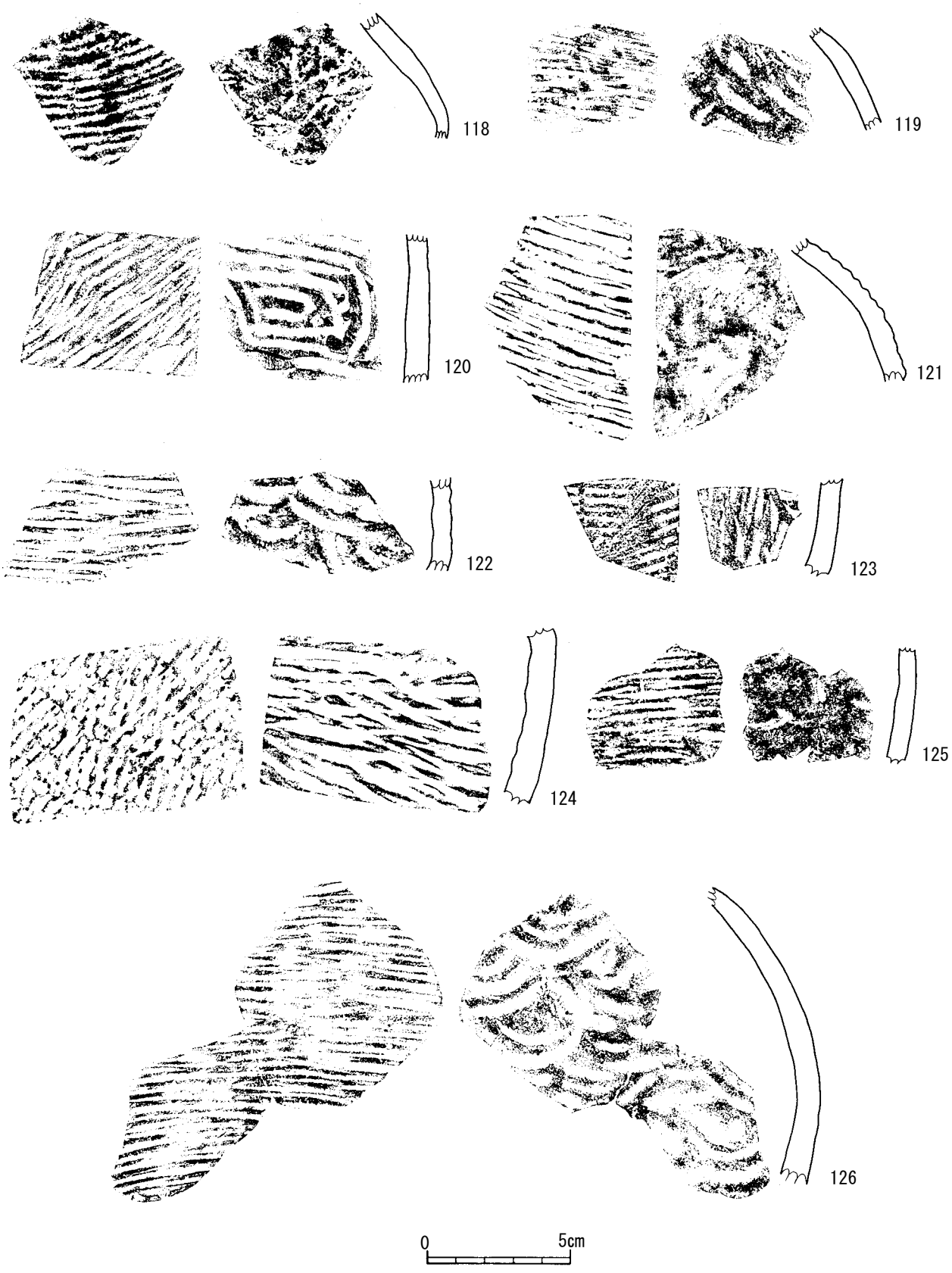
第26図　須恵器出土状況



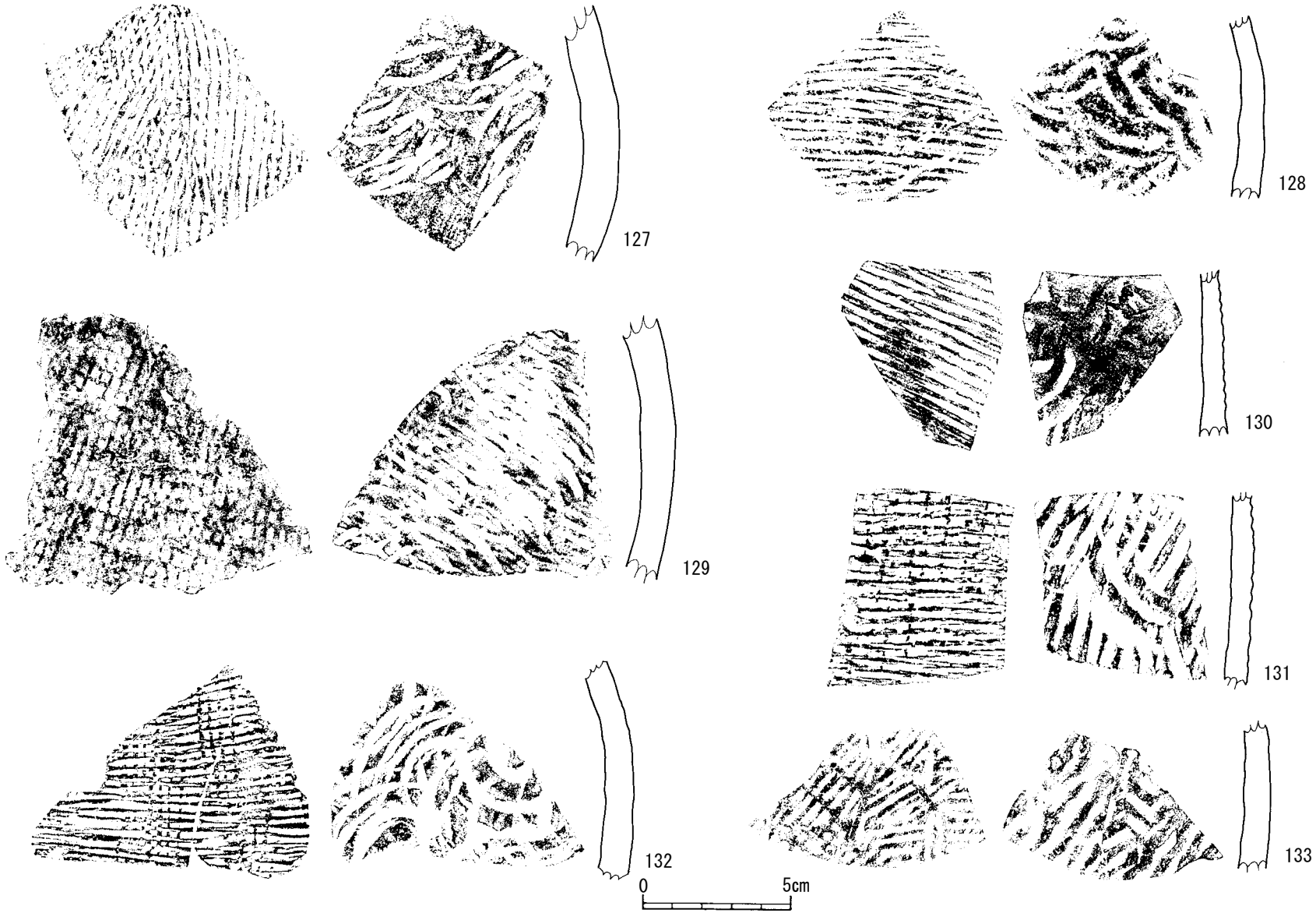
第27図　須恵器(1)



第28図　須恵器(2)



第29図　須恵器(3)



第30図　須恵器(4)

土師器

土師器には，坏・埦・皿・黒色土師器・赤色土師器・甕がある。

坏（134～143）

134はあげ底気味の底部から，明瞭な稜をなして立ち上がる体部をもち，立ち上がりは急で斜め上方に直線的にのび，口縁部は内湾するものである。口径11.5cm，底部径5.0cm，器高5.5cm を測るものである。135～138は底部にやや高さがあり，くびれ部を有しているもので，充実高台を呈している。坏の底部は全てヘラ切り底である。139～143はヘラ切り離しのあとナデ仕上げをしたふくらみ気味の底部である。139は口径16.3cm，底部径7.0cm，器高6.5cm を測る器高の高いもので，体部の立ち上がりが急で，斜め上方に直線的にのびるものである。

埦（144～150）

高台を張り付けてあるものを埦とした。器高が低いものは坏の名称も考えたが，埦ということで分類した。また，体部のみのものは判断が難しく，高台付きの底部のみを図化した。144～150は土師器の埦である。色調は黄灰色ないし淡赤褐色を呈し，胎土はよく精錬されわずかに砂粒が含まれている。144は口径14.3cm で貼り付け高台が欠損しているものである。器高は浅く，底部から明瞭な稜をなして立ちあがる体部をもち，立ちあがりは緩やかで，斜め上方に直線的にのび，口縁部で段をもち口縁端部は外反し，尖り気味のものである。146～150は高台をもつ底部である。高台は外向し端部は尖り気味である。

皿（151～194）

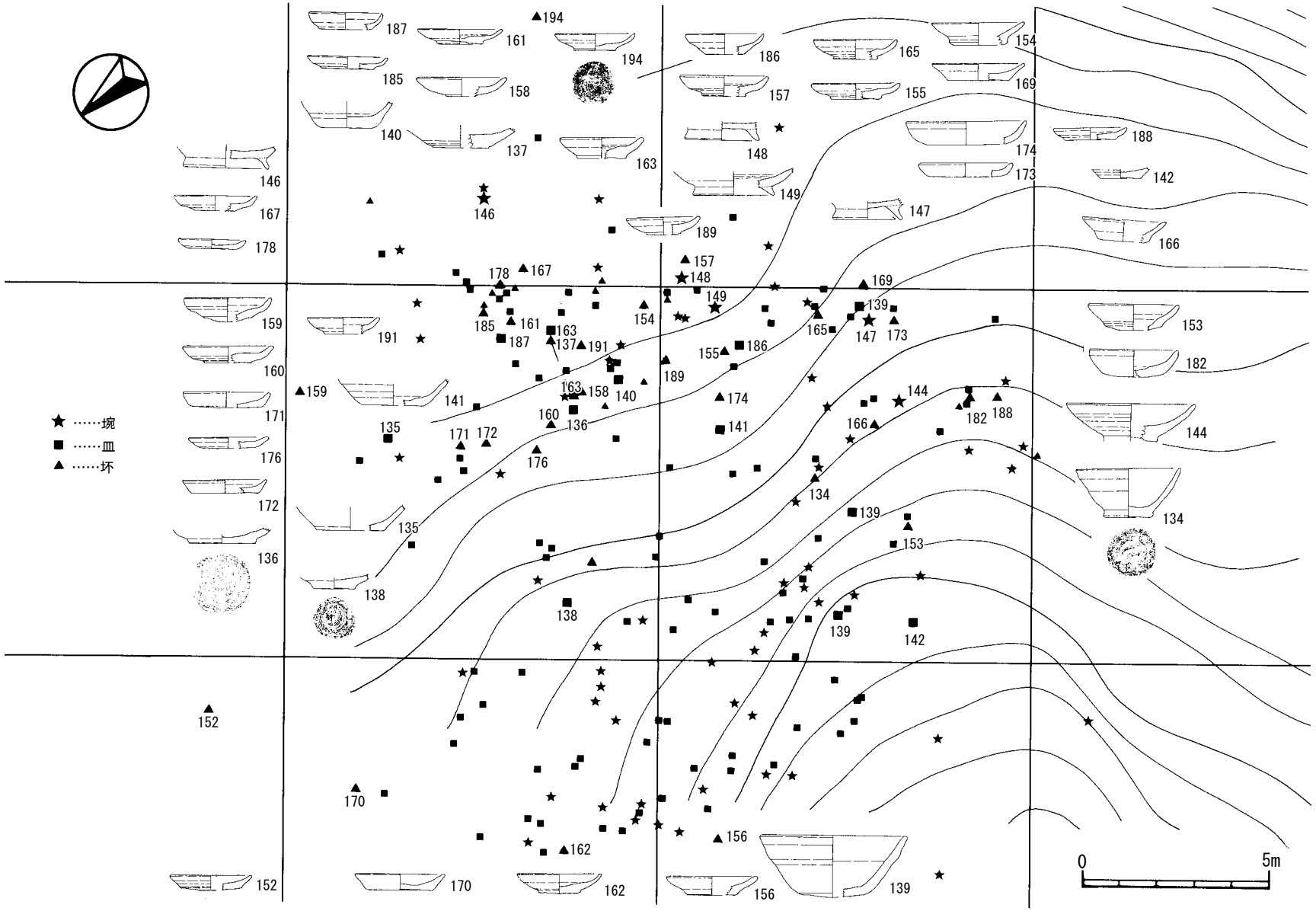
151～194は土師器の皿である。

151～167は底部がヘラ切りの平底で，体部は若干外反するものである。体部と底部の境には明瞭な稜をもつもので，体部の立ちあがりが緩やかなものである。口径が８～10cm で器高は1.6～3.0cm を測る。器高は浅く，口縁端部は丸みをおびる。色調は黄白色，淡赤褐色を呈し，焼成は良好なものである。

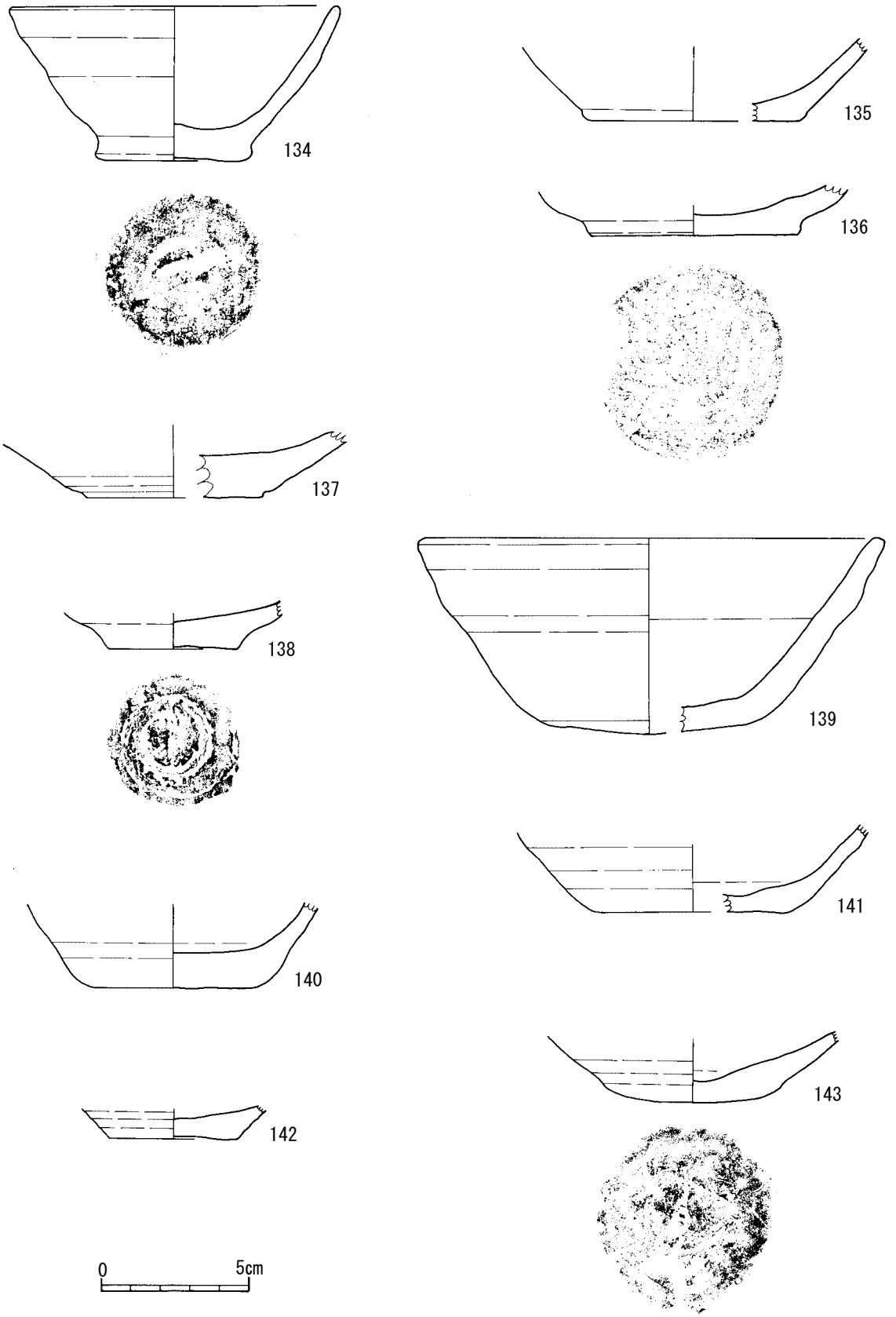
169～172も底部はヘラ切りの平底で上げ底気味である。体部は若干外反するものである。体部と底部の境に明瞭な稜をもち，体部の立ち上がりが急なものである。口径は９～10cm で器高は浅く，口縁端部は丸みをおびる。色調は黄白色，淡赤褐色で焼成は良好である。

173～183は底部はヘラ切りの平底で，体部と底部の境が若干丸みをおび，体部と底部の境があいまいなものである。体部は内湾し，口縁端部が丸みをおびるものである。174は口径が12.9cm，器高2.5cm を測るやや大きめの皿で，淡赤褐色を呈するものである。182は口径9.5cm，器高が2.9cm を測る器高の高いもので，色調は黄白色で焼成は良好なものである。

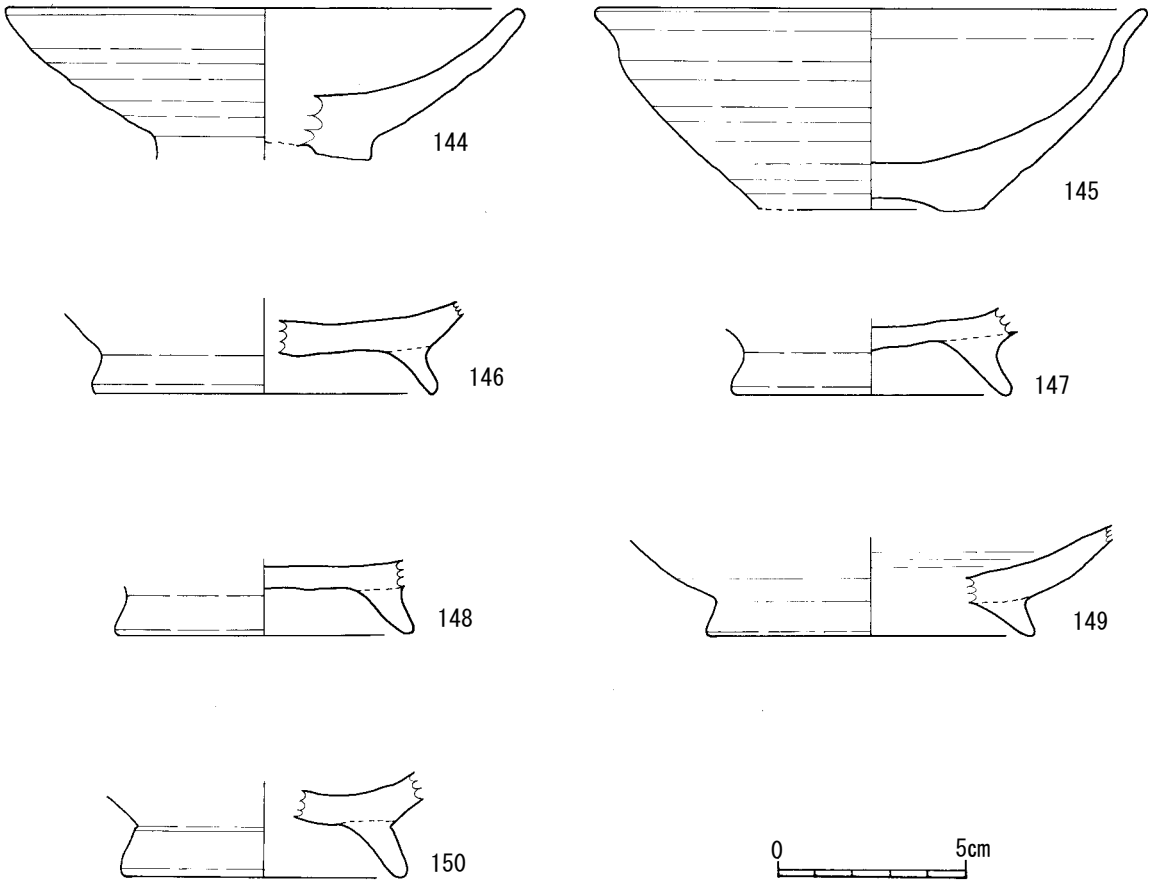
184～194の底部はヘラ切りの平底で，体部が内湾し，口縁端部がやや尖り気味のものである。体部と底部の境には明瞭な稜をもつもので，体部の立ち上がりは緩やかである。



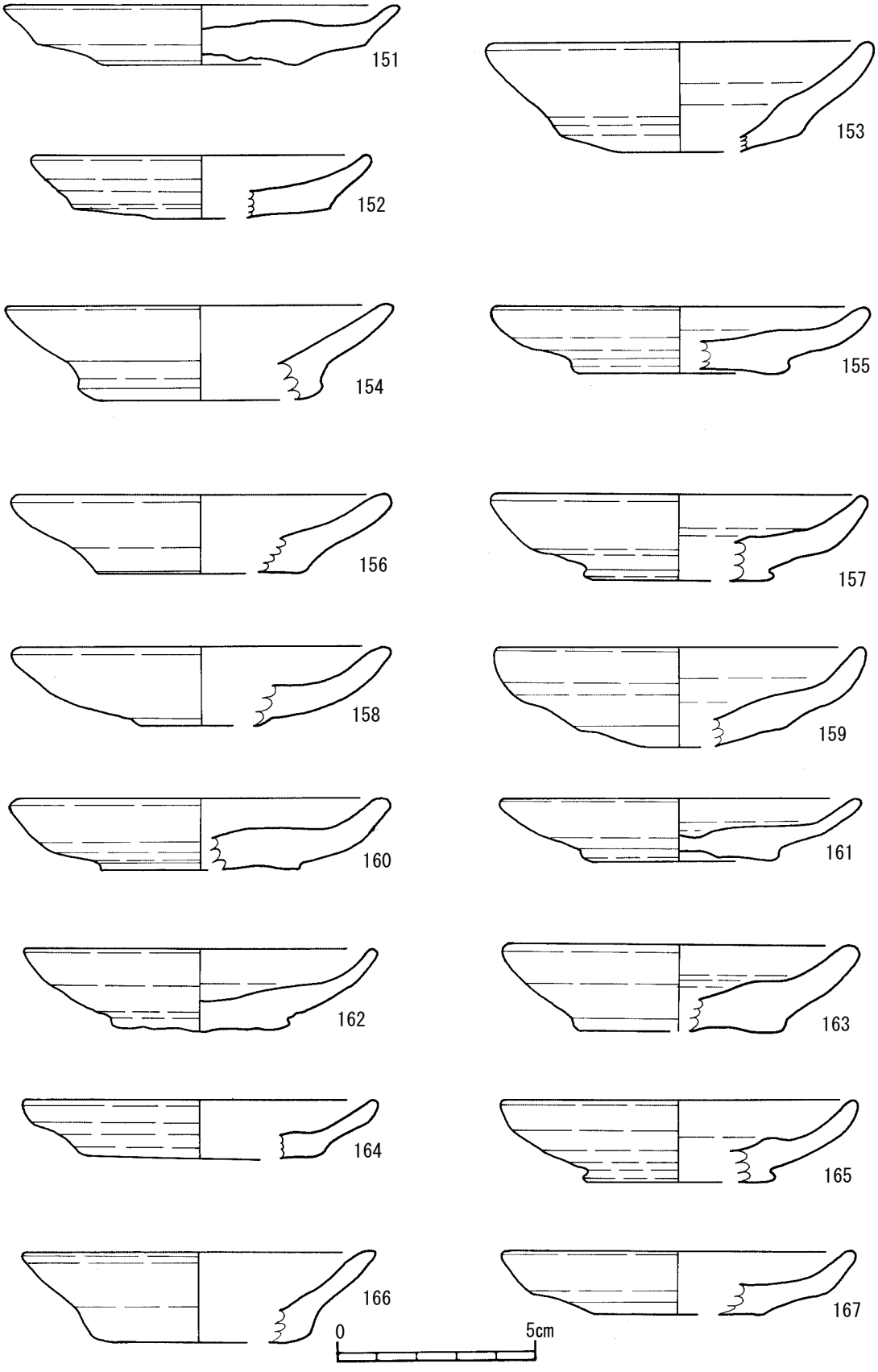
第31図　土師器出土状況



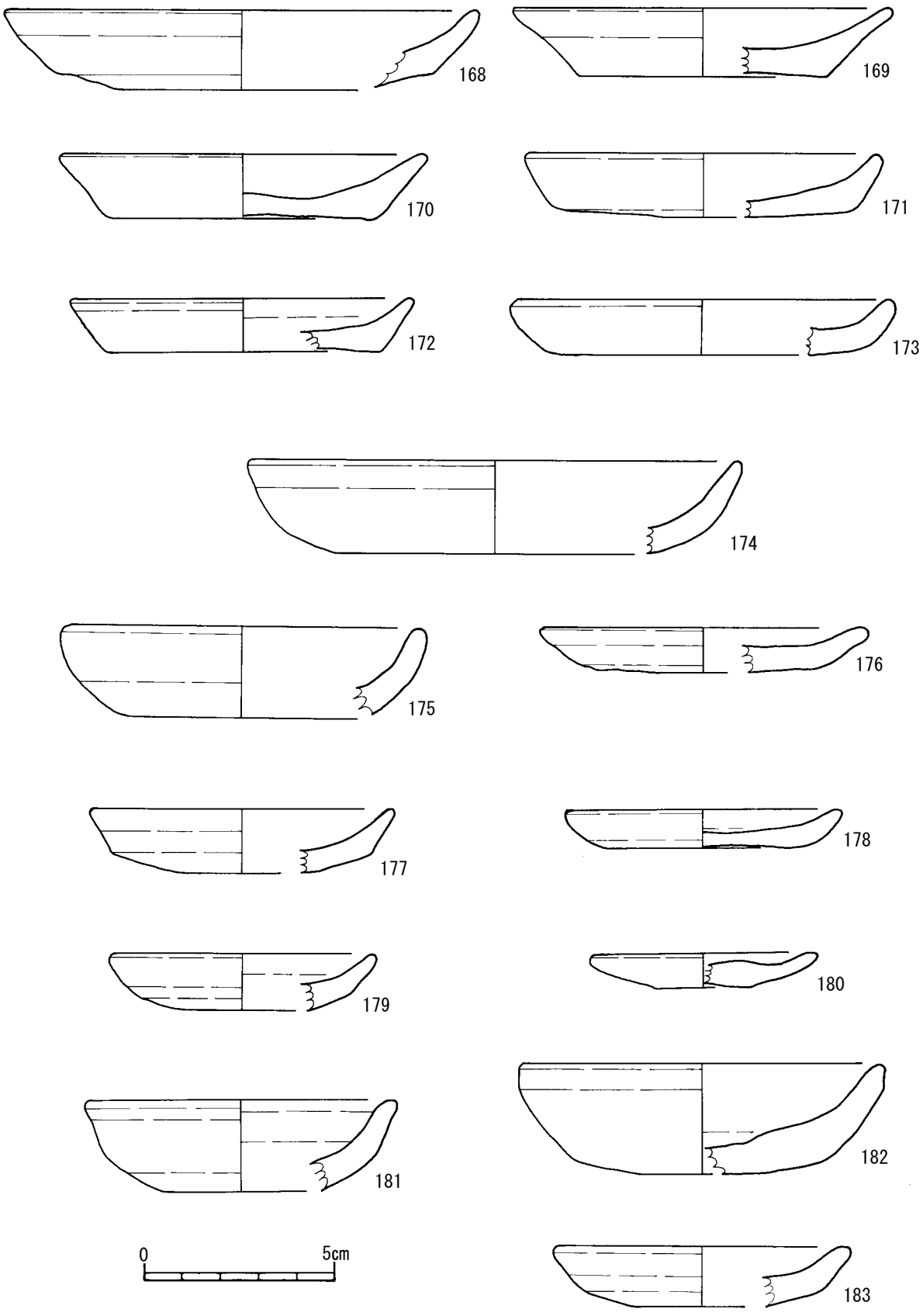
第32図　土師器　坏



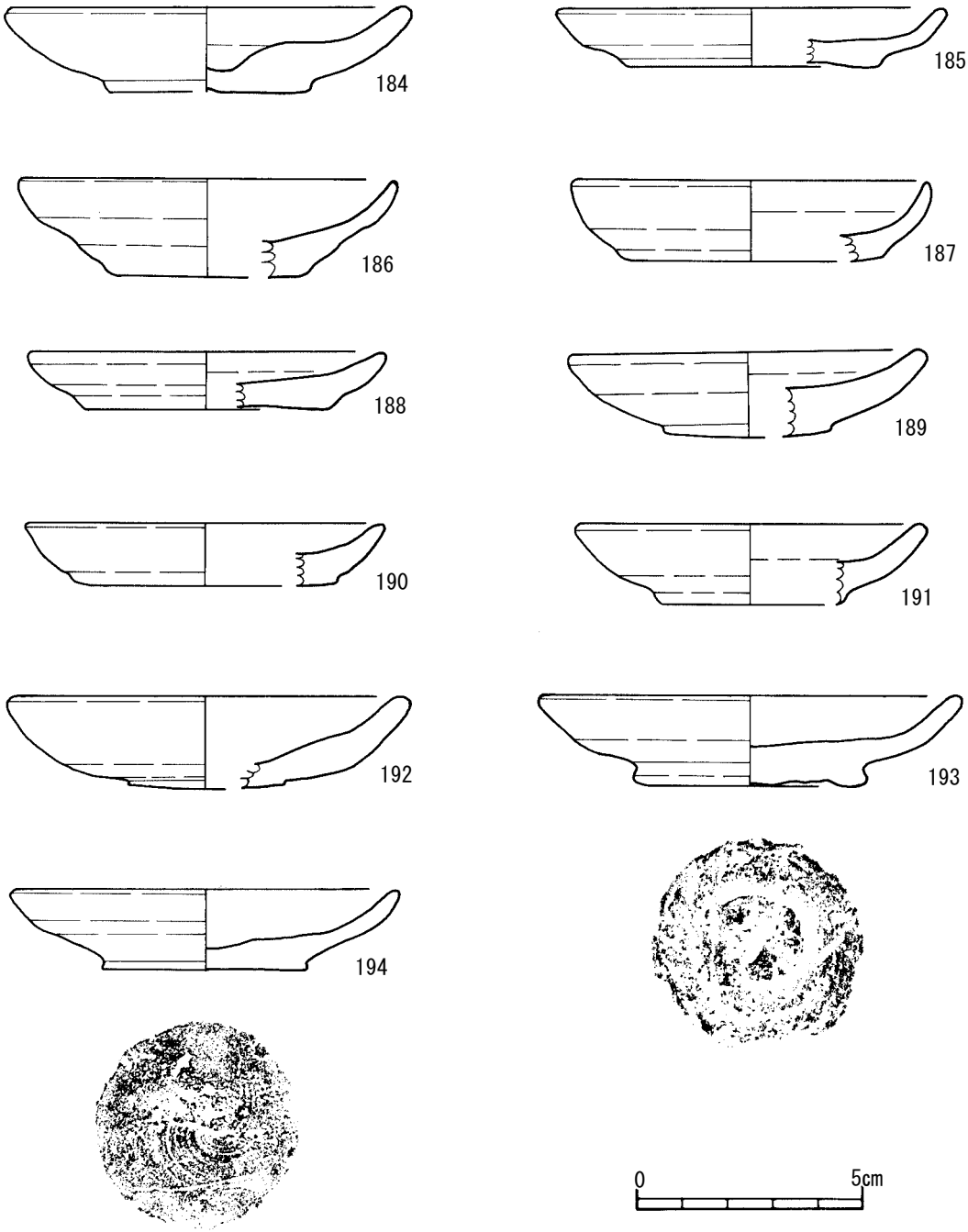
第33図　土師器　埦


151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
0
5cm

第34図　土師器　皿(1)


168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
0
5cm

第35図　土師器　皿(2)



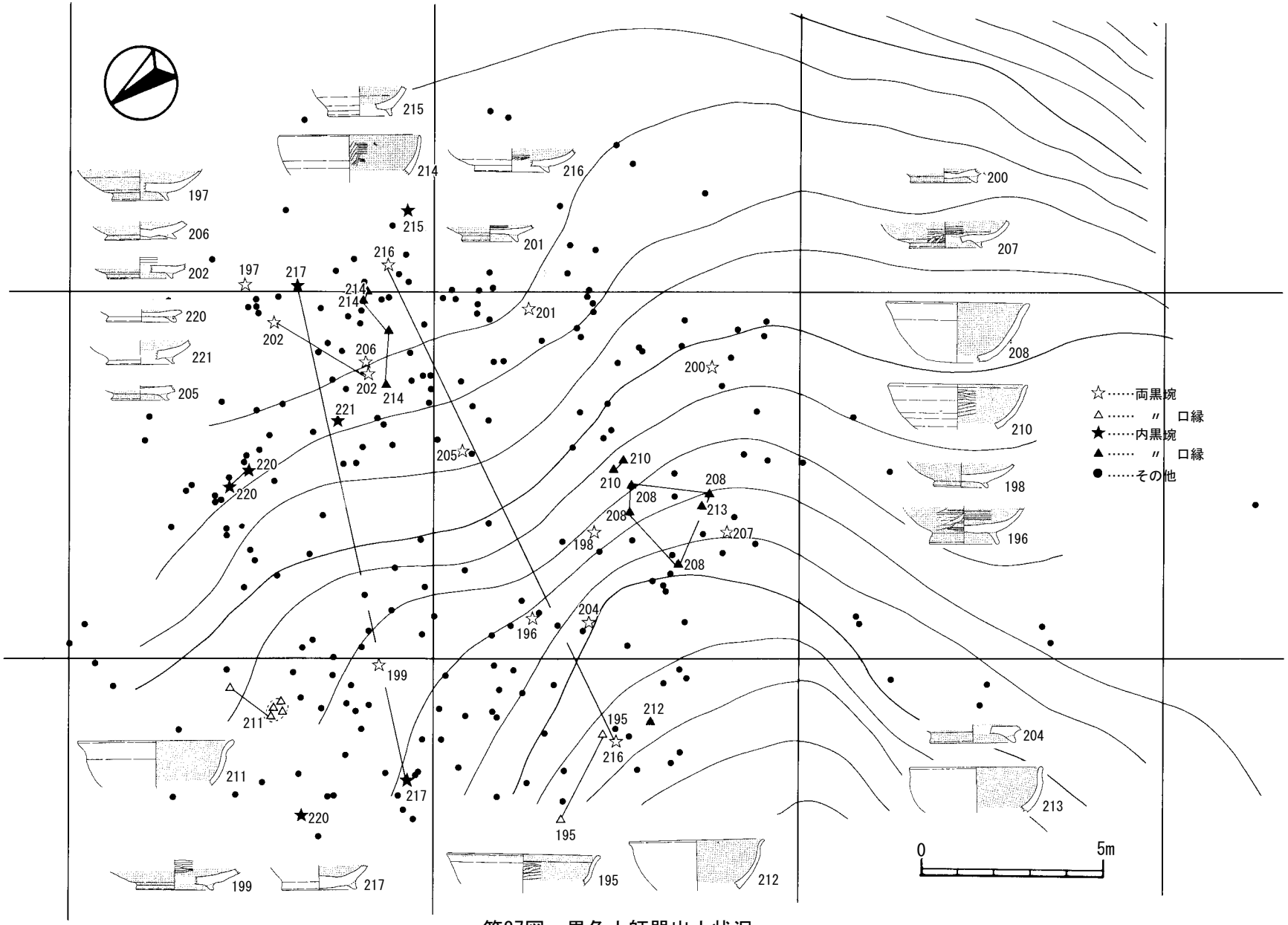
第36図　土師器　皿(3)

第９表　土師器観察表（１）

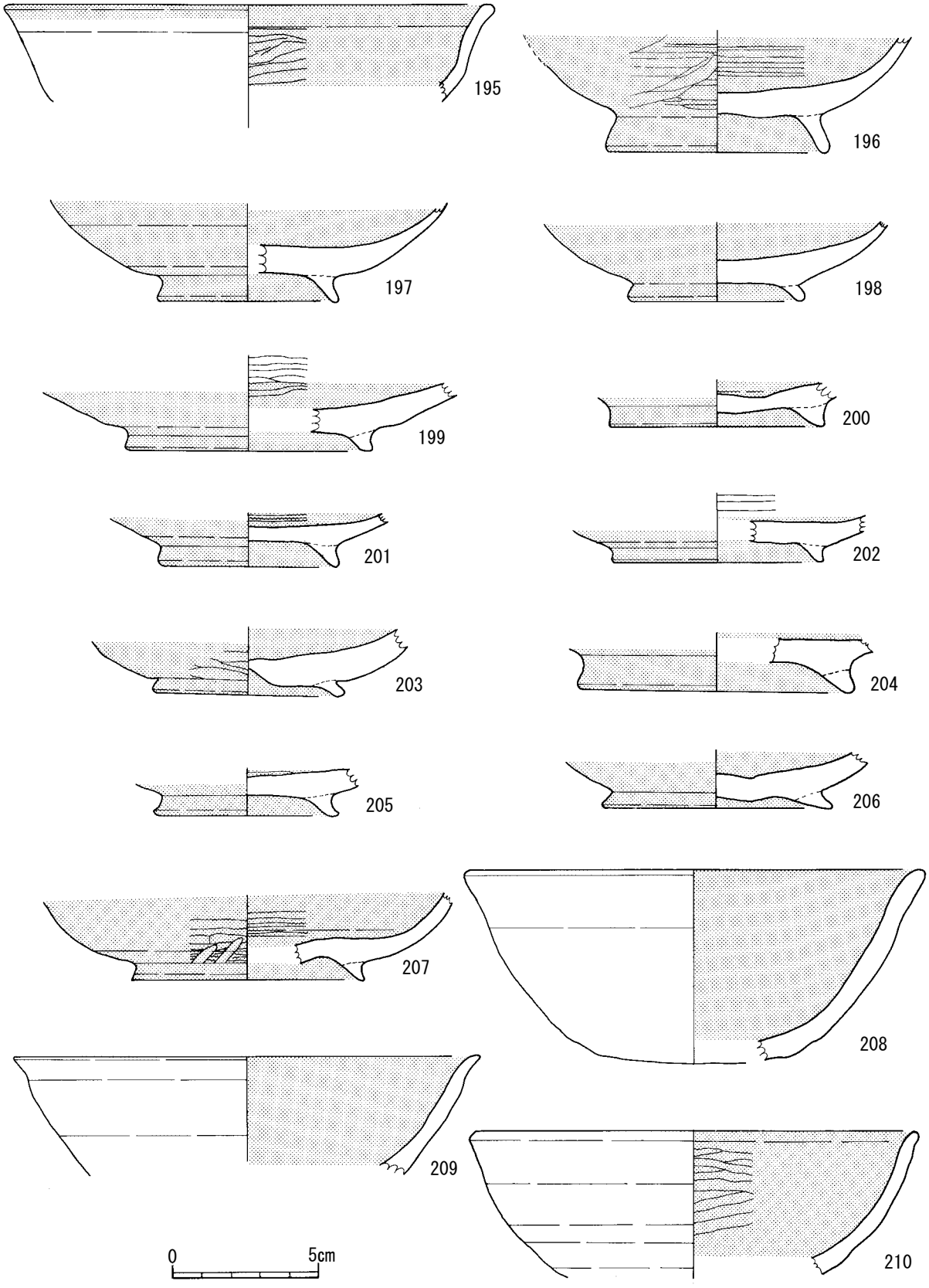
番号	挿図	遺物番号	器種	出土区	層	色調	胎土	焼成	備考
134	32	1000	坏	Ｄ２	Ⅱｂ	淡茶褐色	Ｑ・ＰＬ	普通	完形
135		370	坏	Ｃ２	Ⅱｂ	淡黄褐色	Ｑ・ＰＬ	普通	底部
136		2395	坏	Ｃ２	Ⅲａ	暗褐色	Ｑ・ＰＬ	普通	底部
137		1445	坏	Ｃ２	Ⅱ	淡赤褐色	Ｑ・ＰＬ	良	底部
138		500	坏	Ｃ２	Ⅱ	暗褐色	Ｑ・ＰＬ	普通	底部
139		1891	坏	Ｄ２	Ⅱｂ	暗灰褐色	Ｑ・ＰＬ	普通	
140		1781	坏	Ｃ２	Ⅱｂ	黄褐色	Ｑ・ＰＬ	普通	底部
141		930	坏	Ｄ２	Ⅱ	暗黄褐色	Ｑ・ＰＬ	良	底部
142		1813	坏	Ｃ２	Ⅱｂ	淡茶褐色	Ｑ・ＰＬ	良	底部
143		1049	坏	Ｄ２	Ⅱ	灰褐色	Ｑ・ＰＬ	良	底部
144	33	662	埦	Ｄ２	Ⅱｂ	暗黄褐色	Ｑ・ＰＬ	普通	
145			埦		表	暗褐色	Ｑ・ＰＬ	普通	
146		1543	埦	Ｃ３	Ⅱ	淡褐色	Ｑ・ＰＬ	普通	
147		2035	埦	Ｃ２	Ⅱｂ	暗褐色	Ｑ・ＰＬ	良	
148		2123	埦	Ｄ３	Ⅱｂ	暗褐色	Ｑ・ＰＬ	良	
149		1972	埦	Ｄ２	Ⅱｂ	暗褐色	Ｑ・ＰＬ	良	
150			埦	Ｃ１	表	淡赤褐色	Ｑ・ＰＬ	普通	
151	34		Ⅲ	Ｄ２	Ⅱ	暗黄褐色	Ｑ・ＰＬ	良	
152		464	Ⅲ	Ｂ１	Ⅱｂ	淡褐色	Ｑ・ＰＬ	良	
153		2227	Ⅲ	Ｄ２	Ⅲａ	暗褐色	Ｑ・ＰＬ	良	
154		2651	Ⅲ	Ｃ２	Ⅱｂ	黄褐色	Ｑ・ＰＬ	良	
155		625	Ⅲ	Ｃ２	Ⅱｂ	淡灰褐色	Ｑ・ＰＬ	良	
156		1155	Ⅲ	Ｄ１	Ⅱ	淡茶褐色	Ｑ・ＰＬ	良	
157		2076	Ⅲ	Ｄ３	Ⅱｂ	淡茶褐色	Ｑ・ＰＬ	良	
158		255	Ⅲ	Ｃ２	Ⅱ	淡赤褐色	Ｑ・ＰＬ	良	
159		358	Ⅲ	Ｃ２	Ⅱｂ	淡茶褐色	Ｑ・ＰＬ	普通	
160		505	Ⅲ	Ｃ３	Ⅲ	淡赤褐色	Ｑ・ＰＬ	良	
161		1810	Ⅲ	Ｃ２	Ⅱ	淡灰褐色	Ｑ・ＰＬ	良	
162		1453	Ⅲ	Ｃ１	Ⅱｂ	淡暗褐色	Ｑ・ＰＬ	良	
163		2066	Ⅲ	Ｃ２	Ⅱｂ	淡黒褐色	Ｑ・ＰＬ	普通	
164			Ⅲ	Ｄ２	Ⅱ	淡茶褐色	Ｑ・ＰＬ	普通	
165		1888	Ⅲ	Ｄ２	Ⅱｂ	褐色	Ｑ・ＰＬ	良	
166		660	Ⅲ	Ｄ２		淡茶褐色	Ｑ・ＰＬ	良	
167			Ⅲ	Ｃ２	Ⅱｂ	淡赤褐色	Ｑ・ＰＬ	良	

第10表　土師器観察表（２）

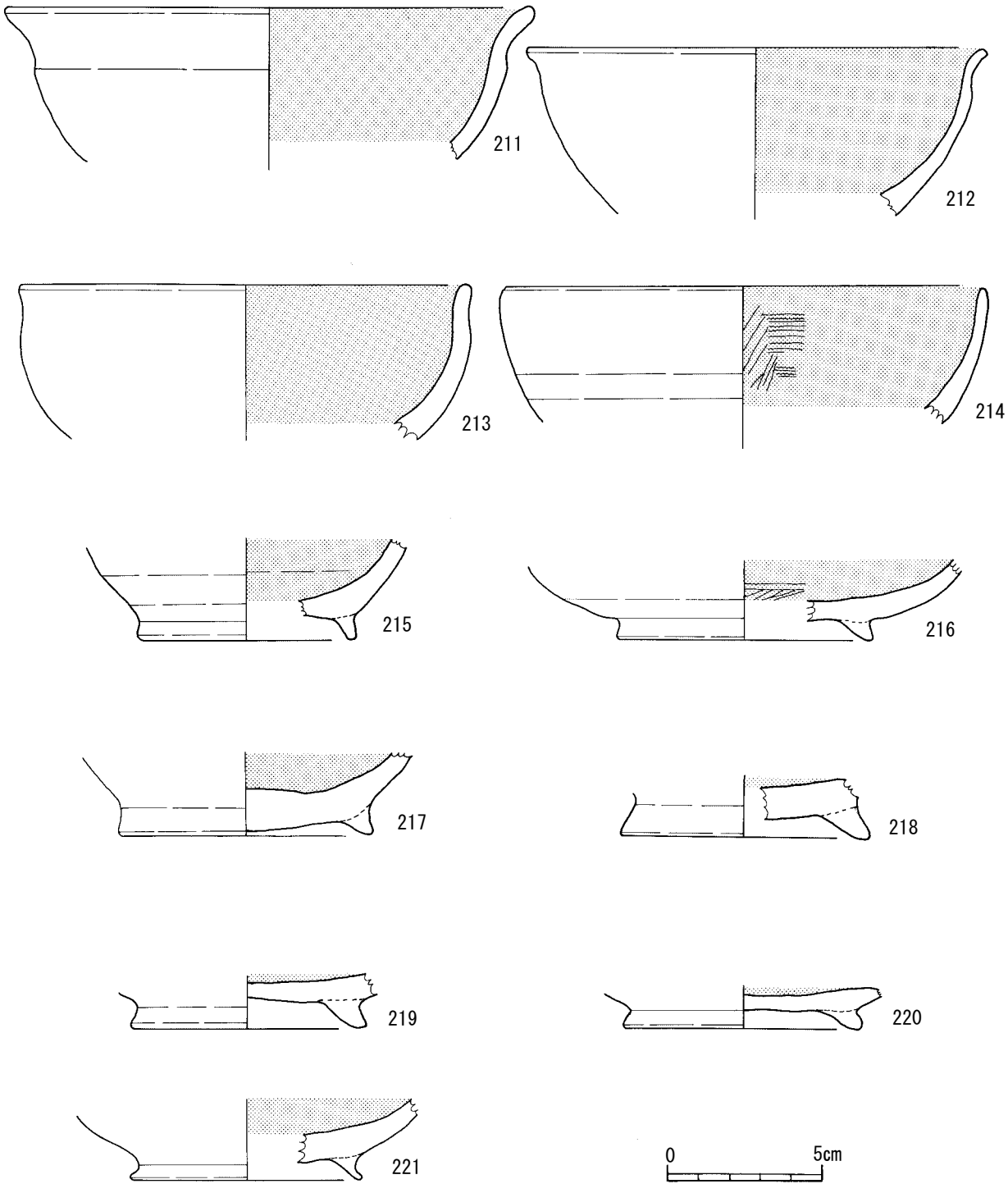
番号	挿図	遺物番号	器種	出土区	層	色調	胎土	焼成	備考
168	35		皿	Ｃ２	表	暗黄褐色	Ｑ・ＰＬ	良	
169		1913	皿	Ｄ３	Ⅱｂ	淡赤褐色	Ｑ・ＰＬ	良	
170		546	皿	Ｃ１	Ⅱｂ	淡黄褐色	Ｑ・ＰＬ	普通	
171		311	皿	Ｃ２	Ⅱ	淡茶褐色	Ｑ・ＰＬ	普通	
172		307	皿	Ｃ２	Ⅱ	淡茶褐色	Ｑ・ＰＬ	普通	
173		1844	皿	Ｄ２	Ⅱ	淡赤褐色	Ｑ・ＰＬ	良	
174		683	皿	Ｄ２	Ⅱｂ	淡茶褐色	Ｑ・ＰＬ	普通	
175			皿	Ｃ２	Ⅱ	淡黄褐色	Ｑ・ＰＬ	良	
176		301	皿	Ｃ２	Ⅱ	淡茶褐色	Ｑ・ＰＬ	普通	
177			皿	４Ｔ		暗黄褐色	Ｑ・ＰＬ	普通	
178		2117	皿	Ｃ２	Ⅱｂ	暗黄褐色	Ｑ・ＰＬ	良	
179			皿	Ｃ２	Ⅱ	暗赤褐色	Ｑ・ＰＬ	良	
180			皿	Ｃ１	Ⅱ	暗黄褐色	Ｑ・ＰＬ	普通	
181			皿	Ｃ２	表	暗黄褐色	Ｑ・ＰＬ	普通	
182		142	皿	Ｄ２	Ⅱ	暗黄褐色	Ｑ・ＰＬ	普通	
183			皿	Ｃ２	表	暗茶褐色	Ｑ・ＰＬ	普通	
184	36	590	皿	Ｃ２	Ⅱｂ	淡褐色	Ｑ・ＰＬ	普通	
185		2063	皿	Ｃ２	Ⅱｂ	暗黄褐色	Ｑ・ＰＬ	普通	
186		908	皿	Ｄ２	Ⅱｂ	淡赤褐色	Ｑ・ＰＬ	普通	
187		2085	皿	Ｃ２	Ⅱｂ	暗黄褐色	Ｑ・ＰＬ	普通	
188		144	皿	Ｃ２	Ⅱ	暗褐色	Ｑ・ＰＬ	普通	
189		618	皿	Ｄ２	Ⅱｂ	灰褐色	Ｑ・ＰＬ	普通	
190			皿	Ｄ１	Ⅱ	淡赤褐色	Ｑ・ＰＬ	普通	
191		1485	皿	Ｃ２	Ⅱｂ	黒褐色	Ｑ・ＰＬ	普通	
192			皿	Ｃ２	表	淡褐色	Ｑ・ＰＬ	良	
193		1555	皿	Ｃ３	Ⅱ	暗褐色	Ｑ・ＰＬ	良	完形
194			皿	Ｄ３	表	暗褐色	Ｑ・ＰＬ	普通	



第37図　黒色土師器出土状況


195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
0
5cm

第38図　黒色土師器(1)



第39図　黒色土師器(2)

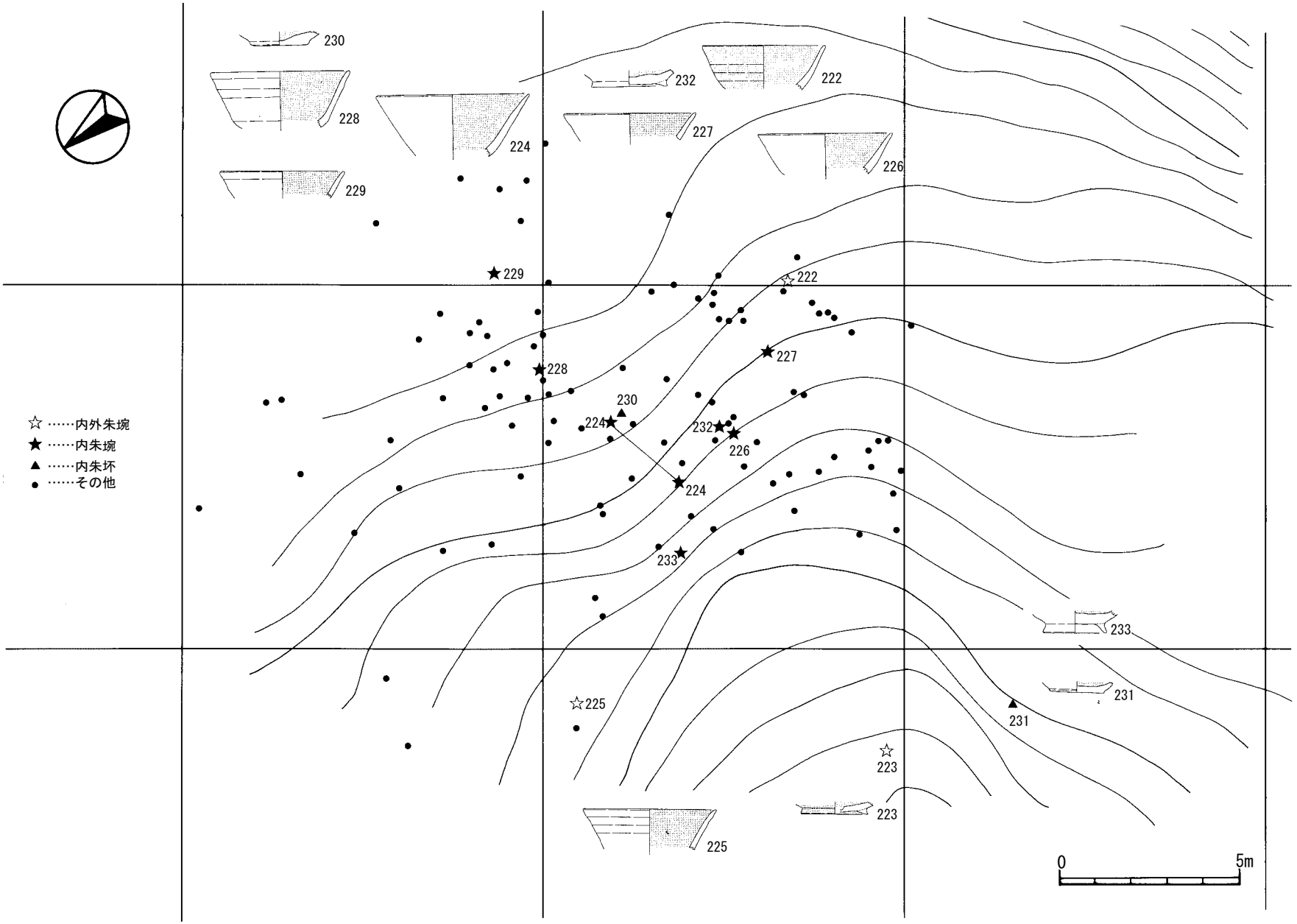
第１１表　黒色土師器観察表

番号	挿図	遺物番号	器種	出土区	層	色　調	胎　土	焼成	備　　考
195		1182	椀	Ｄ１	Ⅱ	暗褐色	Ｑ・ＰＬ	良	
196		1201	椀	Ｄ２	Ⅱ	黒色	Ｑ・ＰＬ	良	
197		2102	椀	Ｃ３	Ⅱｂ	黒色	Ｑ・ＰＬ	普通	
198		2619	椀	Ｃ２	Ⅱｂ	黒色	Ｑ・ＰＬ	普通	
199		820	椀	Ｃ１	Ⅱ	黒色	Ｑ・ＰＬ	普通	
200		651	椀	Ｄ２	Ⅱ	黒色	Ｑ・ＰＬ	良	
201		2393	椀	Ｄ２	Ⅱｂ	黒色	Ｑ・ＰＬ	良	
202	38	1808	椀	Ｃ２	Ⅱ	黒色	Ｑ・ＰＬ	普通	
203			椀	Ｃ２	表	黒色	Ｑ・ＰＬ	良	
204		1250	椀	Ｄ２	Ⅱ	黒色	Ｑ・ＰＬ	良	
205		692	椀	Ｄ２	Ⅱ	黒色	Ｑ・ＰＬ	普通	
206		1680	椀	Ｃ２	Ⅱ	黒色	Ｑ・ＰＬ	普通	
207		110	椀	Ｅ２	Ⅱ	黒色	Ｑ・ＰＬ	良	
208		1038	椀	Ｄ２	Ⅱ	淡赤褐色	Ｑ・ＰＬ	良	
209			椀	Ｄ３	表	褐色	Ｑ・ＰＬ	普通	
210		985	椀	Ｄ２	Ⅱｂ	褐色	Ｑ・ＰＬ	良	
211		606	椀	Ｃ１	Ⅱ	褐色	Ｑ・ＰＬ	良	
212		753	椀	Ｄ１	Ⅱ	褐色	Ｑ・ＰＬ	良	
213		720	椀	Ｄ２	Ⅱ	褐色	Ｑ・ＰＬ	良	
214		1816	椀			淡赤褐色	Ｑ・ＰＬ	普通	
215		1695	椀	Ｃ３	Ⅱ	淡灰褐色	Ｑ・ＰＬ	普通	
216	39	1502	椀	Ｃ３	Ⅱ	淡黒褐色	Ｑ・ＰＬ	良	
217		837	椀	Ｃ１	Ⅱ	淡褐色	Ｑ・ＰＬ	普通	
218		1089	椀	Ｃ１	Ⅱ	褐色	Ｑ・ＰＬ	普通	
219			椀	Ｃ２	表	褐色	Ｑ・ＰＬ	良	
220		315	椀	Ｃ２	Ⅱ	淡赤褐色	Ｑ・ＰＬ	普通	
221		277	椀	Ｃ２	Ⅱ	淡灰褐色	Ｑ・ＰＬ	普通	

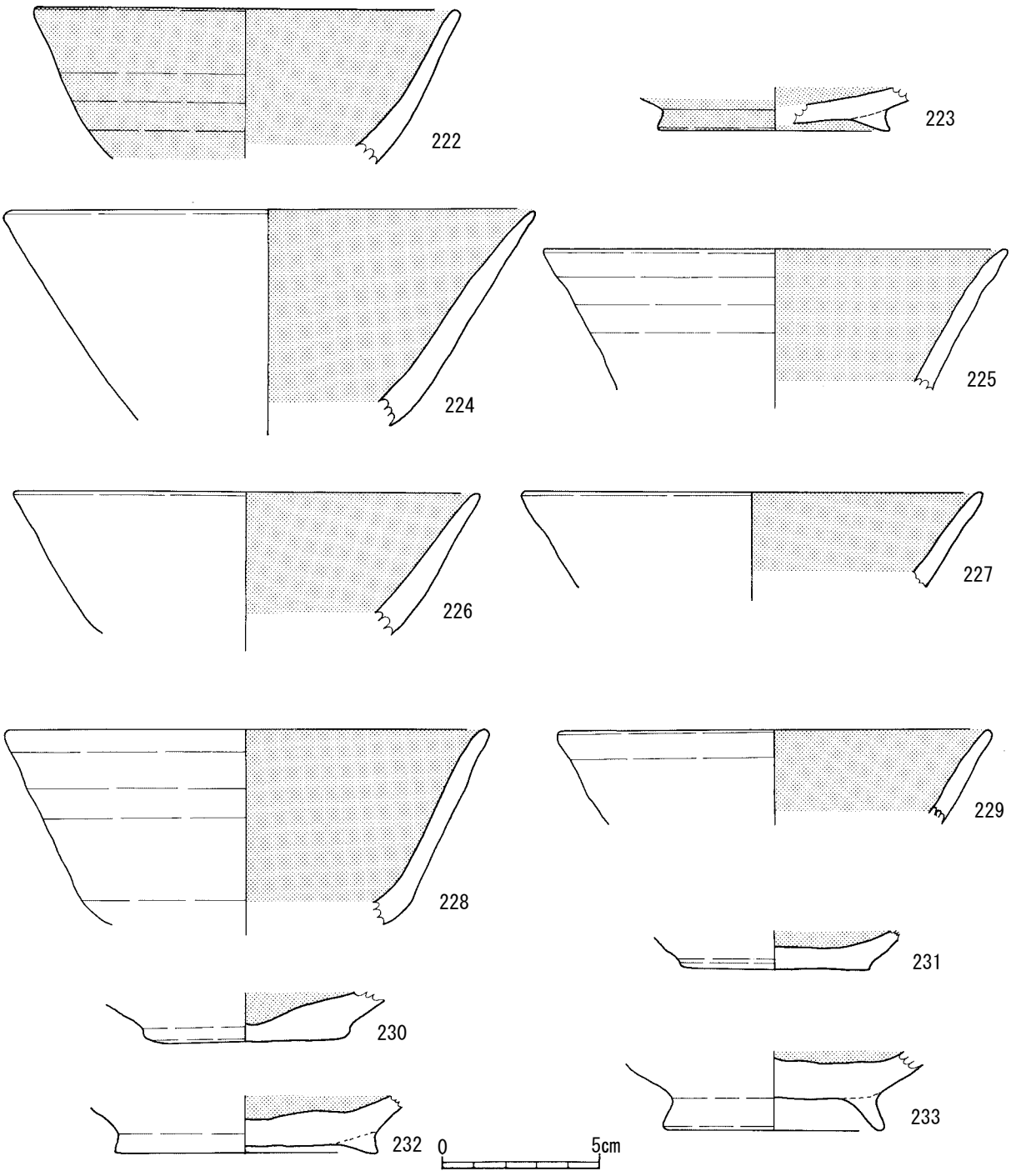
黒色土師器（195～221）

黒色土師器は，内外面とも黒く研磨したもの，内面のみ黒く研磨したものがみられる。器形としては椀のみであった。総数260点出土し27点を図下した。出土状況は第37図のように遺跡全体に点在していた。

195は内面の口縁部端部の一部と外面を黒く研磨したもので，体部の立ちあがりは急で，口縁端部は丸みをおび口径は16.6cm を測る。196～207は内・外面とも黒く研磨された両黒土師器の椀底部である。高台は外向し端部が尖り気味のものが多い。底径は6.3～8.4cm を測る。208～221は内黒土師器の椀である。208～214は口縁部で尖り気味であるが，他は丸みをおびている。215～221は内黒土師器の底部である。高台は外向し，端部が丸みをおびているものが多い。



第40図　赤色土師器出土状況



第41図　赤色土師器

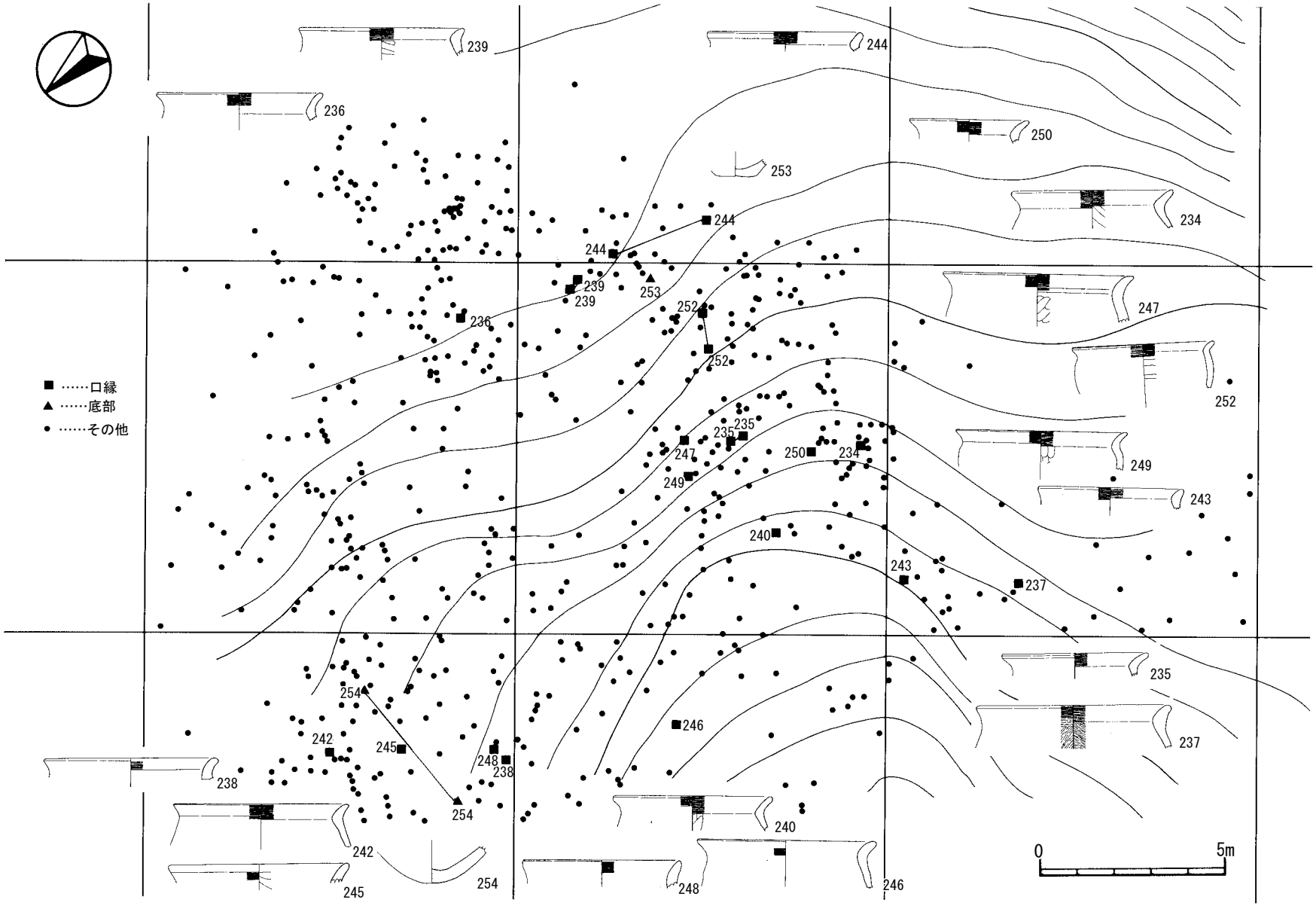
第１２表　赤色土師器観察表

番号	挿図	遺物番号	器種	出土区	層	色　調	胎　土	焼成	備　　考
222		2330	椀	Ｄ２	Ⅱｂ	淡褐色	Ｑ・ＰＬ	普通	
223		2701	椀	Ｃ２	Ⅱｂ	淡褐色	Ｑ・ＰＬ	良	
224		2705	坏	Ｃ２	Ⅱｂ	暗褐色	Ｑ・ＰＬ	普通	
225		931	椀	Ｄ２	Ⅱｂ	暗褐色	Ｑ・ＰＬ	普通	
226		2016	椀	Ｃ２	Ⅱｂ	淡褐色	Ｑ・ＰＬ	良	
227	41	1393	椀	Ｄ２	Ⅱｂ	淡褐色	Ｑ・ＰＬ	普通	
228		643	椀	Ｄ２	Ⅱｂ	暗褐色	Ｑ・ＰＬ	普通	
229		2623	椀	Ｃ２	Ⅱｂ	淡黒褐色	Ｑ・ＰＬ	普通	
230		1504	椀	Ｃ３	Ⅲ	淡黄褐色	Ｑ・ＰＬ	普通	
231		682	坏	Ｄ２	Ⅱｂ	淡赤褐色	Ｑ・ＰＬ	良	
232		1629	椀	Ｄ２	Ⅱｂ	淡褐色	Ｑ・ＰＬ	普通	
233		1220	椀	Ｄ２	Ⅱｂ	暗褐色	Ｑ・ＰＬ	普通	

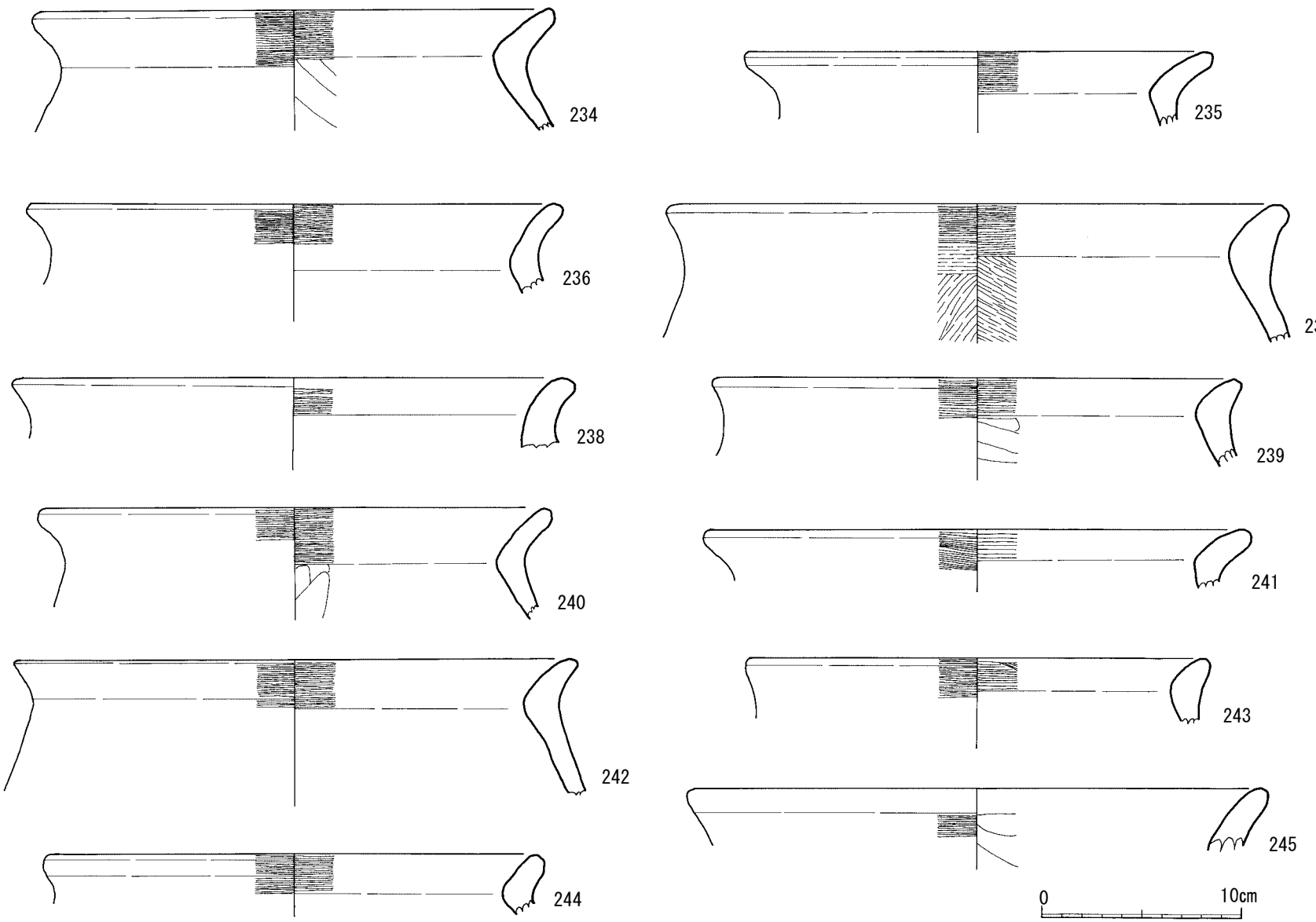
赤色土師器（222～233）

赤色土師器は，内外面とも赤く研磨したもの，内面のみ赤く研磨したものがある。器形は坏・椀である。総数111点出土し12点を図化した。

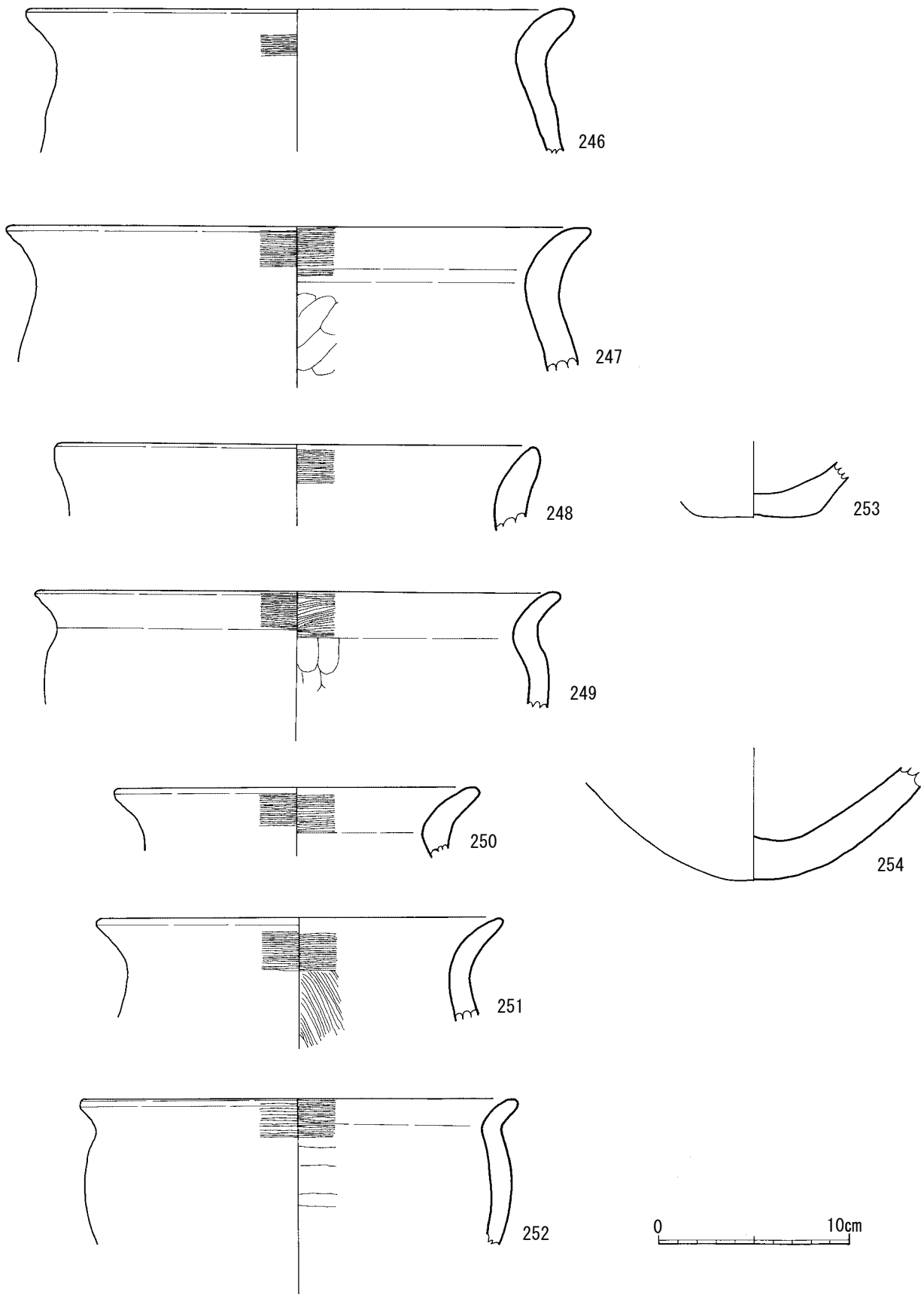
222は内外面とも赤色顔料を施すもので，体部は斜め上方に直線的にのび，口縁端部は丸みをおびる。223も内外面とも赤色顔料が塗られた椀底部である。高台は外向し端部が尖り気味である。224～229は内面のみに赤色顔料が塗られたもので，体部は斜め上方に直線的にのび，口縁端部は尖り気味である。230・231は坏底部である。底径は6.6cm・6.0cm を測る。あげ底気味の底部から明瞭な稜となし立ちあがる体部である。232・233は椀の底部で高台は外向し，端部が尖り気味と丸みをおびるものである。



第42図　土師器甕　出土状況



第43図　土師器　甕(1)



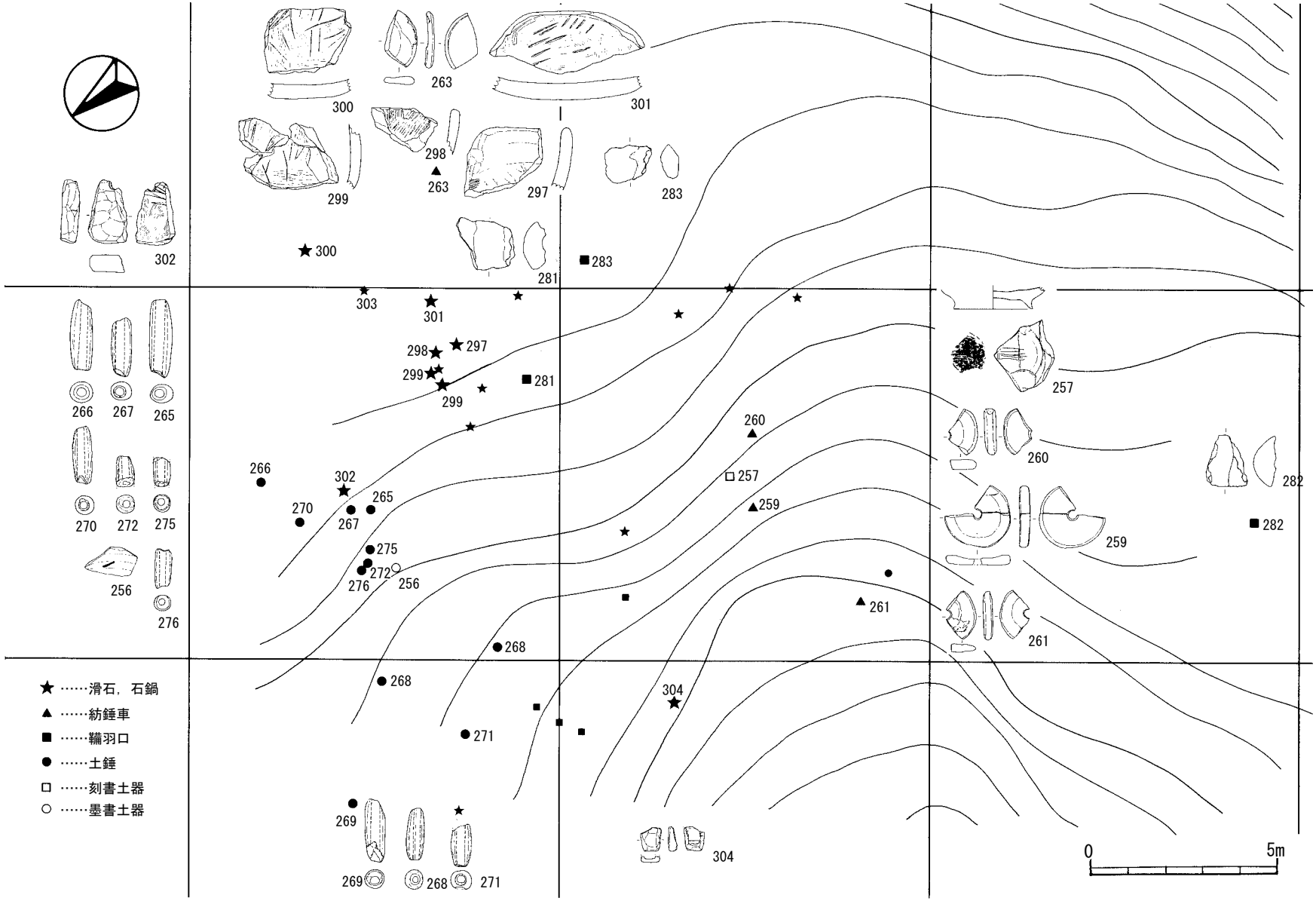
第44図　土師器　甕(2)

第１３表　土師器甕観察表

番号	挿図	遺物番号	器種	出土区	層	色　調	胎　土	焼成	備　　考
234		230	甕	Ｄ２	Ⅱｂ	淡赤褐色	Ｑ・ＰＬ	良	口縁
235		1395	甕	Ｄ２	Ⅱｂ	淡黒褐色	Ｑ・ＰＬ	普通	口縁
236		1673	甕	Ｃ２	Ⅱｂ	淡黄褐色	Ｑ・ＰＬ	良	口縁
237		58	甕	Ｅ２	Ⅱ	淡赤褐色	Ｑ・ＰＬ	普通	口縁
238		838	甕	Ｃ１	Ⅱ	淡黒褐色	Ｑ・ＰＬ	普通	口縁
239	43	1974	甕	Ｄ２	Ⅱｂ	淡黒褐色	Ｑ・ＰＬ	普通	口縁
240		1045	甕	Ｄ２	Ⅱ	淡茶褐色	Ｑ・ＰＬ	普通	口縁
241			甕	Ｂ２	表	淡赤褐色	Ｑ・ＰＬ	普通	口縁
242		1077	甕	Ｃ１	Ⅱｂ	淡黒褐色	Ｑ・ＰＬ	普通	口縁
243		66	甕	Ｅ２	Ⅱｂ	淡黒褐色	Ｑ・ＰＬ	普通	口縁
244		1385	甕	Ｄ３	Ⅱｂ	淡黄褐色	Ｑ・ＰＬ	普通	口縁
245		830	甕	Ｃ１	Ⅱ	淡黒褐色	Ｑ・ＰＬ	普通	口縁
246		1193	甕	Ｄ１	Ⅱ	淡黒褐色	Ｑ・ＰＬ	普通	口縁
247		993	甕	Ｄ２	Ⅱｂ	淡黒褐色	Ｑ・ＰＬ	普通	口縁
248		1135	甕	Ｃ１	Ⅱ	淡茶褐色	Ｑ・ＰＬ	普通	口縁
249		990	甕	Ｃ２	Ⅱｂ	淡赤褐色	Ｑ・ＰＬ	普通	口縁
250	44	200	甕	Ｄ２	Ⅱｂ	淡赤褐色	Ｑ・ＰＬ	普通	口縁
251			甕	Ｃ２	Ⅲａ	淡茶褐色	Ｑ・ＰＬ	良	口縁
252		900	甕	Ｄ２	Ⅱｂ	淡黄褐色	Ｑ・ＰＬ	良	口縁
253		2370	甕	Ｄ２	Ⅱｂ	淡黒褐色	Ｑ・ＰＬ	普通	底部
254		2550	甕	Ｃ１	Ⅲａ	淡赤褐色	Ｑ・ＰＬ	普通	底部

甕（234～254）

土師器甕は遺跡全体から出土した。そこで復元口径のわかる口縁部と底部について図化した。「く」の字状に外反し口縁端部は丸くなるものである。復元口径は26.0～31.5㎝を測るものである。内面はヘラ削り調整や横方向の刷毛目調整を施している。外面は横方向の刷毛目調整を施しているのが主である。253・254は甕底部で，253は平底で，254は尖り底である。



第45図　特殊遺物出土状況

墨書土器

255はＤ－２区Ⅱ層から出土した土師器である。坏か埦の体部に「九」と読める墨書がある。

256は肉眼的観察により墨書と判断したが，赤外線レンズを通して観察した結果，墨書とは判断できず，他の要素をもつものである。

刻書土器

257は内黒土師器の埦底部に「卌」が焼成後に刻まれたものである。Ｄ－２区Ⅱ層から出土。復元底部は8.4㎝を測る。色調は淡褐色で胎土は密で石英・長石を含み，外面調整はナデ整形，内面はヘラ磨きされ焼成は良好である。

焼塩壺

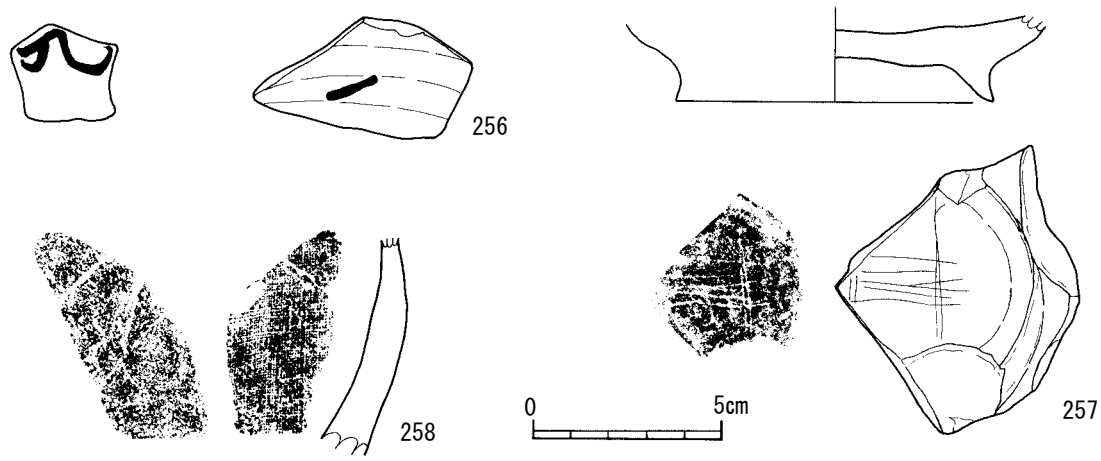
258は焼塩壺と呼ばれる内面に布目痕を附した円錐形の鉢形を呈するもので１点出土している。破損品であるが，丸底状の底部をもち，体部の立ち上がりは急なものと思われる。胎土は荒く，細砂粒を多く含んでいる。外面調整はナデ調整され荒い仕上げである。色調は淡茶褐色を呈している。

紡錘車

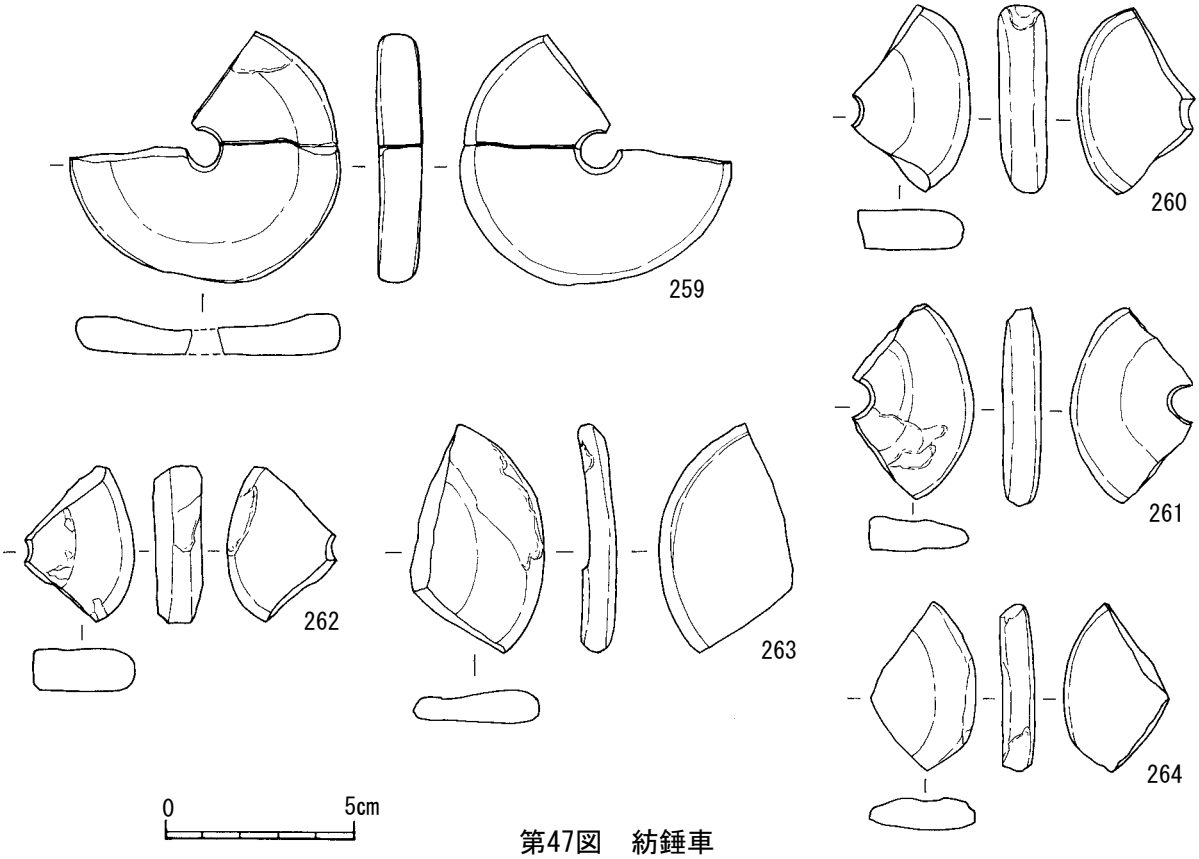
土師質の紡錘車が６点出土している。径は６～８㎝を測る。中央に１㎝内外の両面からの孔を穿つものである。この時期の紡錘車には，土師器からの転用が多いが，これらは当初より紡錘車として制作されたものである。258は約3/4程のもので，片面は平坦で半面は中窪みの形態である。

第14表　紡錘車観察表

番号	挿図	遺物番号	器種	出土区	層	重量	長さ	幅	厚み	備考
259	47	1240		D2	Ⅱb	36.5				
260		954		D2	Ⅱb	13.9				
261		80		D2	Ⅱb	10.7				
262				D2	Ⅱ	10.2				
263		1521		C3	Ⅱ	14.4				
264				D1	Ⅱ	7.7				



第46図　墨書土器・刻書土器・焼塩壺



第47図　紡錘車

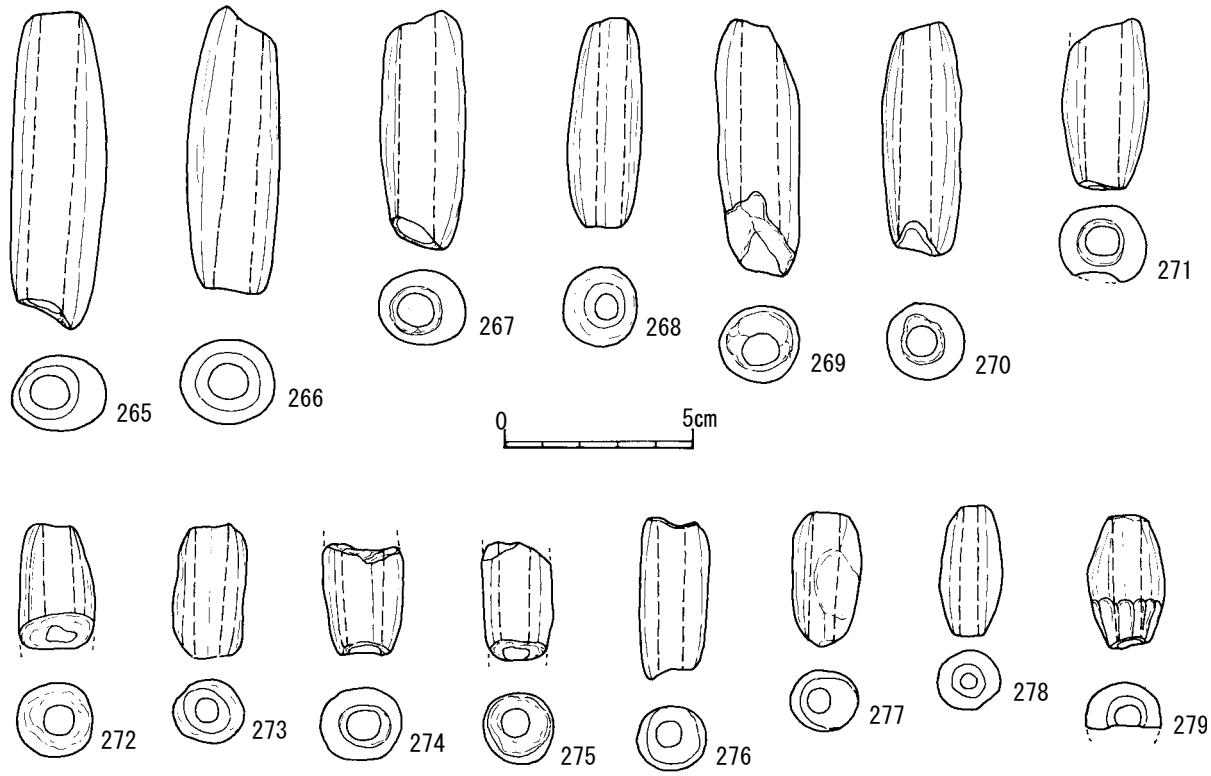
土錘

土錘は15点出土した。いわゆる管状土錘である。長さ３～８㎝，幅1.7～2.5㎝，重量は６～35

第１５表　土錘観察表

番号	挿図	遺物番号	器種	出土区	層	重量	長さ	幅	厚み	備考
265		341		C2	Ⅱ	34.2	7.3	2.5	1.9	
266		352		C2	Ⅱb	34.1	8.2	2.5	2.0	
267		343		C2	Ⅱb	24.3	6.3	2.4	2.1	
268		495		C2	Ⅱ	17.8	5.6	2.0	1.9	
269		440		C1	Ⅱ	22.6	6.2	2.1	1.7	
270		387		C2	Ⅱ	21.9	6.9	2.3	1.8	
271		420		C1	Ⅱ	12.9	4.5	2.4	1.9	
272	48	559		C2	Ⅱ	9.9	3.2	2.1	2.3	
273				C1	表	10.1	3.4	2.0	1.9	
274				C2	表	7.1	2.9	2.2	2.4	
275		554		C2	Ⅱ	8.8	3.1	1.9	2.0	
276		617		C1	Ⅱ	12	4.3	1.9	1.9	
277				C2	Ⅱ	7.4	3.6	1.8	1.6	
278				E2	表	6.6	3.4	1.7	1.7	
279				C2	表	5.8	3.6	2.0		

ｇを測る。色調は黄灰色，赤褐色，暗褐色を呈する。形態的には中央部がふくらみ，両端がすぼまる形のもの，棒状のもの，細身のものがある。形態的に違いがみられ漁網錘としての用途だけであるのか，ほかの用途たとえば編布の重りなどの可能性はないのか考えてみたいところである。



第48図　土錘

鞴羽口（280～283）

羽口は８点出土したが，形態のわかる４点を図化した。280～283は羽口の先端部である。280の先端部は気泡が多くみられ，ガラス化し黒色を呈している。復元口径はそれぞれ5.5，7.5，7.8，5.0cm を測る。

鉄製品（284～290）

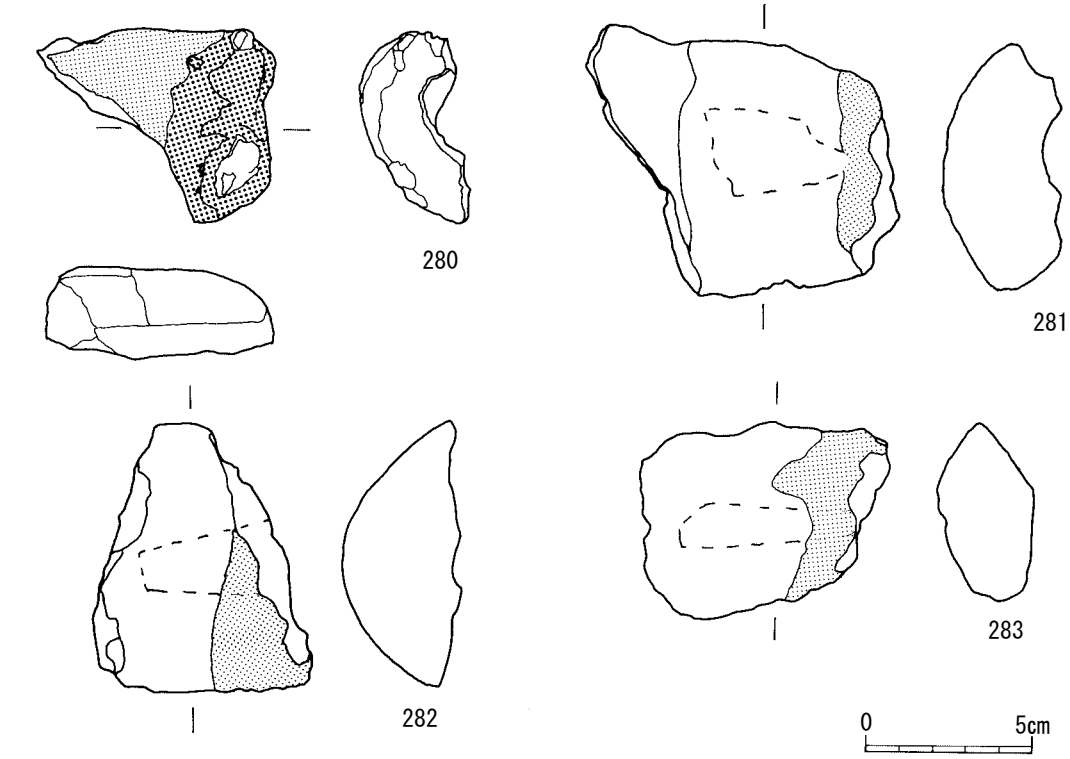
遺跡からは多くの鉄製品が出土したが，形態のわかる７点を図化した。284・285は紡錘車である。284は径4.7cm，厚み0.2cm，重量8.2ｇを測り，ほぼ中央に潜行が施されている。286・287は棒状の鉄製品である。形態より紡錘車の部分の可能性が高い。288・289は欠損しているが，刀子と思われるものである。290は平坦な面を持つ鉄製品で先端部が湾曲している。

石器

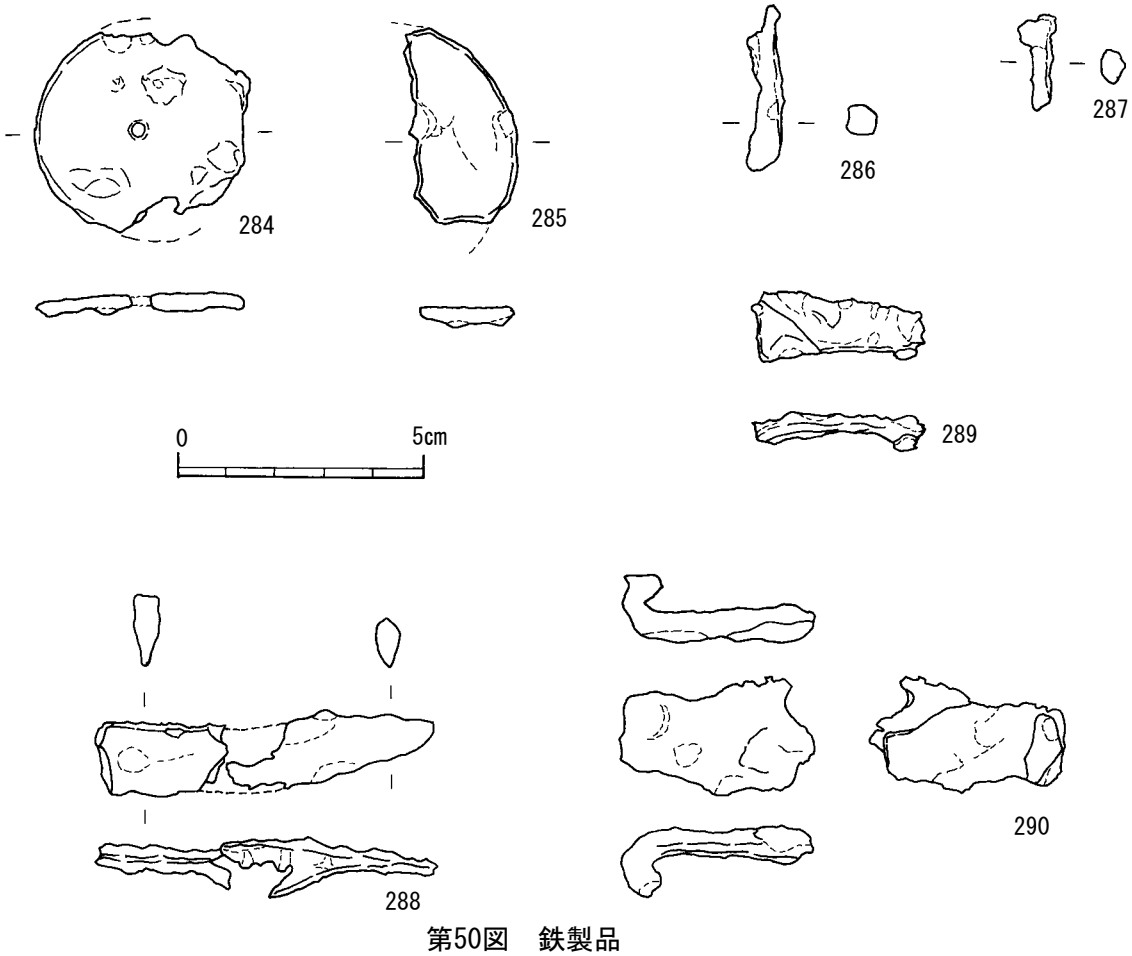
古代の石器は，敲石・磨石・砥石・滑石製品が出土した。

敲石（291～293）

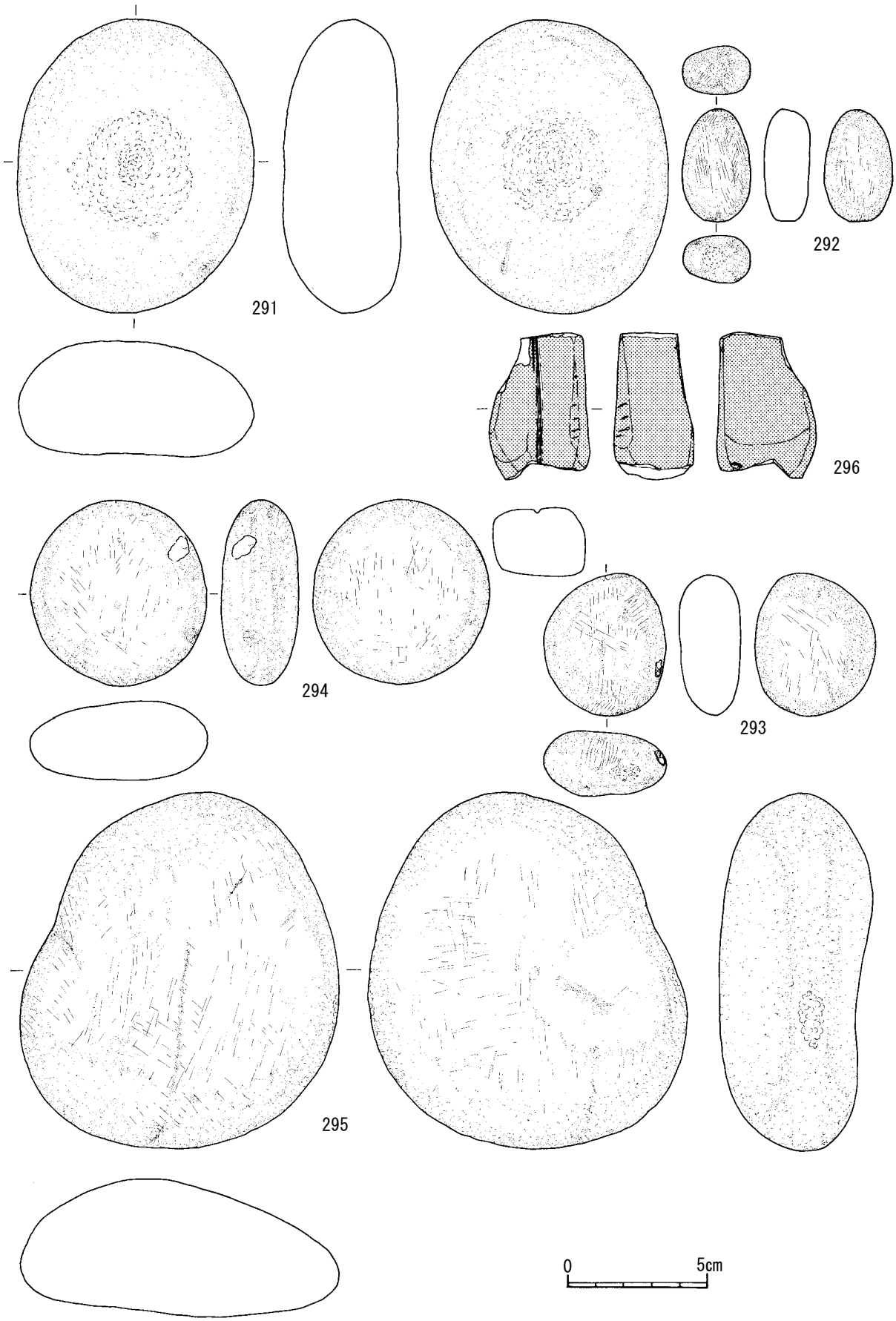
291～293は砂岩を素材に用いた敲石である。291は表裏面の中央部に敲打痕のある磨石兼用のものである。292は小型の川原石を用い，両端部に敲打痕が見られるものである。293も磨石兼用で側縁部に敲打痕が見られる。



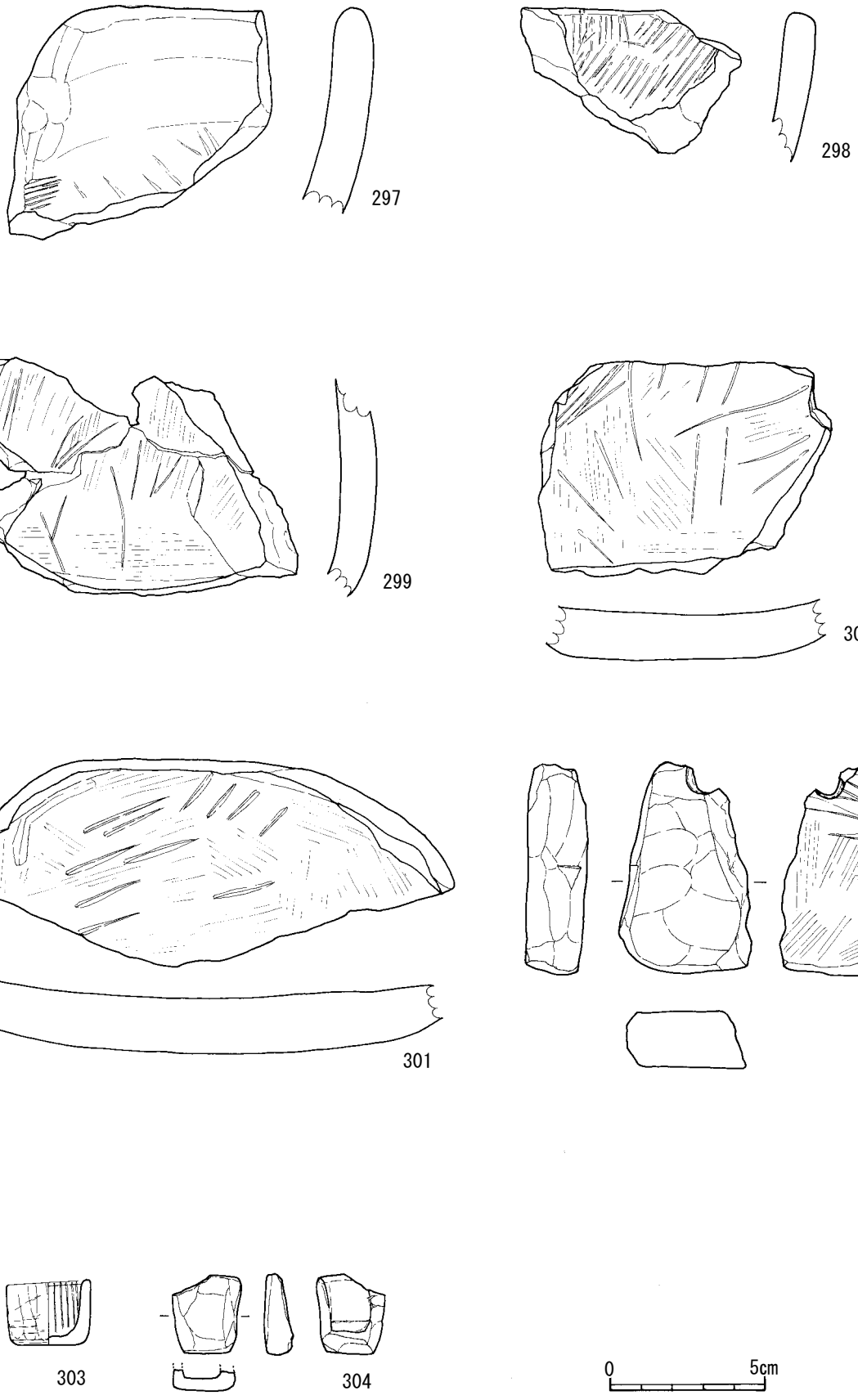
第49図　鞴羽口



第50図　鉄製品



第51図　古代石器



第52図　滑石製品

磨石（294・295）

294・295は安山岩・砂岩を用いた磨石である。295の一部には敲打痕が見られたが，ごく一部であり磨石に分類した。

砥石（296）

296は砂岩製の砥石で，長さ4.6cm，幅3.3cm，厚さ2.4cmを測り，四面に研磨痕がみられ，中央部は湾曲している。中央部一面に鉄状の用具によると思われる溝が一条認められる。携帯用の砥石と考えられる。

滑石製品（297～304）

滑石製品は17点出土し，Ｃ－３区に集中して出土した。そのほとんどが石鍋の破片であった。297～301は石鍋の破損品である。外面は面取りが施され，表面が黒色に焼けている。302は石鍋の再利用である。上方に径0.6cmの穿孔が施され，側縁に面取りがなされたものである。303・304は容器状の製品で，303は口径2.8cm，高さ2.1cmを測る完形品である。304は破損品であるが同様のものである。

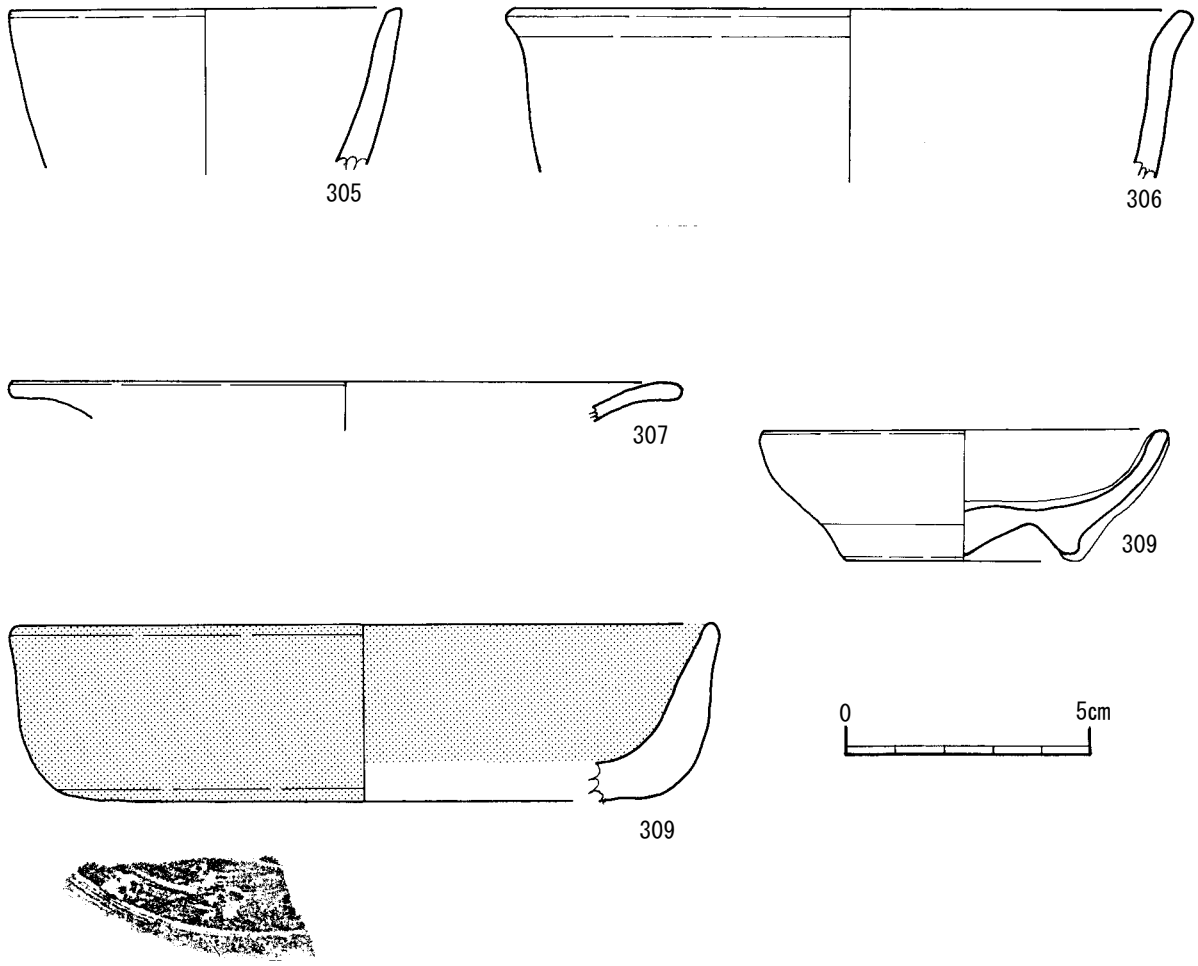
第１６表　石器観察表

番号	挿図	器種	石材	区	層	遺物番号	重量g	長さcm	幅cm	厚みcm	備考
291	51	凹石	砂岩	Ｅ２	Ⅲ	1599	545	10.4	8.4	3.9	
292		敲石	砂岩	Ｅ２	Ⅲa	2532	22	3.9	2.4	1.6	
293		敲石	砂岩	Ｄ２	Ⅲa	2548	71	5.1	4.3	2.2	
294		磨石	安山岩	Ｄ１	Ⅲ	1416	167	6.6	6.2	2.7	
295		磨石	砂岩	Ｃ２	Ⅲa	2555	1040	13.0	11.0	4.7	
296		砥石	砂岩	Ｄ２	Ⅱ	713	67	4.6	3.3	2.4	
297	52	石鍋	滑石	Ｃ２	Ⅱ	1446	161				
298		石鍋	滑石	Ｃ２	Ⅱb	1470	50				
299		石鍋	滑石	Ｃ３	Ⅱ	1554	196				
300		石鍋	滑石	Ｃ２	Ⅱb	2120	320				
301		石鍋	滑石	Ｃ２	Ⅱb	1442	147				
302			滑石	Ｃ２	Ⅱb	1334	90				
303		容器	滑石	Ｃ２	Ⅱb		16.4				
304		容器	滑石	Ｄ１	Ⅱ	746	4.2				

第７節　中　　世

鎌倉時代以降の遺物も若干出土した。陶磁器と糸切り底をもつ土師器であるが，細片が多く図示できたのは５点のみであった。

305は復元口径8.0cm を測る，鎬蓮弁の龍泉窯の青磁碗である。306は復元口径14.0cm を測る，外反する口縁部をもつ無文の龍泉窯の青磁碗である。307は白磁で下部は露胎である。復元口径13.5cm を測る。308はくぼみ様蓮弁をもつ青磁の小碗で，口径8.2cm，器高13.5cm を測る。いずれも14～15世紀のものと考えられる。309は糸切り底の皿である。口径14.1cm，器高3.6cm を測り，底部から急に立ちあがる体部をもち口縁端部は丸みをおびるものである。



第53図　中世の遺物

第5章　ま　と　め

犬ヶ原遺跡では，旧石器時代から中世までの長い期間にわたる生活跡が検出され，それぞれの時期において重要であるが，当遺跡の主たる生活跡は平安時代であった。以下，時代を追って簡単にまとめてみたい。

旧石器時代

わずか４点の遺物が出土したのみであったが，細石刃核・細石刃がみられ，台地半分の調査であったことをを考えれば，周辺に旧石器時代の遺跡が広がることが想定された。細石刃核は，礫を半割したものを素材にし，その時得られた平坦面を打面・側面にし，打面から調整剥離により成形しているものである。

縄文時代

第Ⅲ層から出土した遺物のみで遺構は検出しなかった。遺物は散在した状況で出土した。土器は，早期の前平式土器，後期土器もみられたが，主体は晩期土器であった。深鉢の入佐式土器や鉢形土器の完形品２個体も出土した。

石器は，石匙・石鏃・スクレイパー・石斧・石錘・凹石が出土した。また石材については，黒曜石・頁岩・瑪瑙・安山岩・砂岩がみられた。石鏃は石材・形態とも多様であり，時間差等を考える必要がある。石錘の出土は，この遺跡の立地である独立丘で，海岸から離れていることを考えると特異な遺物である。また，磨石には全て凹部があり凹石の用途であり，石器の器種構成としては特徴のある出土量である。

古墳時代

古墳時代の遺物はＣ・Ｄ－１・２区のⅡｂ～Ⅲ層上部にかけて散在して出土した。古墳時代の遺物は成川式土器が主であり，器種は甕・壺・坩・高坏・手捏ね土器であり，小片が多かった。手捏ね土器が４点出土しているのが特徴である。甕形・鉢形のものである。

古代（平安時代）

古代の調査はⅡｂ層から出土した多くの遺物とⅢ層上面で検出された遺構であった。遺構は掘立柱建物跡（４間×４間・総柱）１棟，土坑２基，竪穴遺構３基，柱穴14個が検出された。

掘立柱建物跡は，遺跡北東部高台部に主軸をＮ－90°－Ｗにとる東西４間（5.7m）×南北４間（5.63m）を有する総柱建物である。柱穴の掘り方は円形ないし楕円形で，直径40㎝内外で深さ平均55㎝を測る大きめの柱穴である。また，西側１間にはやや小型の４個の柱穴，北側には３個の柱穴があり，建物に属する柵列と想定される。柱穴の直径は30㎝内外とやや小さいものである。

土坑は，建物跡の内側と隣接地の２か所で検出した。2.5m×2.2mと1.5m×1.2mの土坑で方形と略円形を呈するものであったが，断面形は逆台形状をなし，底部は平坦である。土坑内からは多量の遺物（須恵器・土師器・黒色土器・鉄器・桃の種子）が出土した。形態よりごみ捨て場と判断したが，建物跡との関連など不明な部分も多い。

遺跡の南側では，焼土及び炭化物が検出された。竪穴状遺構が３か所検出された。１か所は７基の土坑が複合したもので，土坑の平面径は100㎝～40㎝の楕円形を呈するもので，土坑内には焼土・炭化物が顕著にみられる。土坑の形態より鍛冶炉の可能性が考えられ，詳細な調査を行ったがそれ

を証明する程のものはみつからなかった。しかし，周辺に羽口・鉄滓等もあり，未調査部分に遺跡が延びると，未調査部分の小字名が金木山という地名であること等を考えあわせ，引き継ぎ今後の課題としたい。

以上の遺構は，共伴遺物等から平安時代のもので10世紀前半のものと判断した。

平安時代の遺物は，Ⅱｂ層の暗黒褐色土から約1,800点の遺物が出土した。土器では，須恵器，土師器，焼塩壺，紡錘車，土錘，黒色土器，墨書土器，刻書土器等が出土している。石器には砥石・磨石があり，鉄器には紡錘車・刃子・鉄滓が出土している。また，桃の種子，硫黄も土坑・柱穴内から出土した。

須恵器は10世紀前半のものが主で，坏蓋・碗・壺・甕などの器種がある。これらの一部は金峰町にある須恵器窯の荒平古窯跡群(註1)のものと推定されるが，本格的調査がなされていないため，詳細は不明である。しかし，内面に同心円状叩き（車輪文）のあるものが多い。

土師器には，坏・埦・皿などの器種があり，これらも平安時代のものである。坏の中には「九」と読める墨書土器が出土している。黒色土器も多く出土している。このように多量に出土したものは，薩摩郡衙推定地の川内市西ノ原遺跡(註2)や阿多郡衙推定地の金峰町小中原遺跡(註3)が知られている。内外面とも黒く研磨したもの，内面のみ黒く研磨したもの，内外面とも赤色顔料を塗り込めたもの，内面のみ赤い内朱土師器がある。器形としては坏・埦のみであり，遺跡全体から出土した。

このほか，焼塩壺・紡錘車・鉄製品などが出土している。

これらの遺構，遺物等から寺院的性格が強いものが見つかっている。製鉄関連も遺構等も考えられているが，遺跡の範囲や内径部の孤立した立地など，今から研究しなければならない問題が山積みしている状況である。

日置郡一帯では，古代の遺跡が調査により少しづつではあるが解明しつつある状況である。これらの資料を分析することにより，古代史の謎が解けてくる可能性が考えられる。

中世

鎌倉時代以降の遺物も若干出土した。龍泉窯の青磁や糸切り底の土師器である。

註１　上村俊雄「荒平須恵器古窯址群発見の意義とその問題点」『古文化談叢14』　1984
註２　鹿児島県教育委員会「成岡・西ノ平・上ノ原遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書28』　1983
註３　鹿児島県教育委員会「小中原遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書57』　1991

鞠羽口県内出土一覧表

	遺　跡　名	点数	所在地	時　　代	報　　告　　書
1	サウチ遺跡	1	笠利町	弥生時代終末期	笠利町教育委員会報告書　1978
2	池之頭遺跡	2	東市来町	古墳時代	県埋文センター報告書(32)　2002
3	尾長谷迫遺跡	14	指宿町	古墳時代	指宿市埋文報告書(7)　1986
4	山神遺跡	1	溝辺町	古墳時代	県埋文センター報告書(7)　1977
5	野下園遺跡	1	大蒲町	古墳時代	県埋文センター報告書(70)　1995
6	榎木原遺跡	3	鹿屋市	古墳時代	県埋文センター報告書(44)　1970
7	横尾遺跡	1	財部町	古墳時代	財部町埋文報告書(2)　1988
8	島巡遺跡	1	大口市	古墳時代	大口市埋文報告書(6)　1987
9	北麓遺跡	3	鹿児島市	古墳時代	鹿児島市埋文報告書(21)　1996
10	長野田遺跡	1	高山町	古墳時代	高山町埋文報告書(7)　1999
11	成岡遺跡Ⅱ	2	川内市	古代(奈良～平安)	県埋文センター報告書(35)　1985
12	藤坂・禁中遺跡	1	蒲生町	古代(奈良～平安)	蒲生町埋文報告書(2)　1994
13	榎崎B遺跡	3	鹿屋市	古代(奈良～平安)	県埋文センター報告書(4)　1993
14	成岡遺跡	3	川内市	古代(奈良～平安)	県埋文センター報告書(28)　1983
15	中村上原遺跡	1	田代町	古代(奈良～平安)	田代町埋文報告書(1)　1989
16	上中段遺跡	11	末吉町	古代(奈良～平安)	末吉町埋文報告書(4)　1986
17	鍛冶屋馬場遺跡	1	川内市	古代(奈良～平安)	県埋文センター報告書(39)　2002
18	巻畑B遺跡	3	喜界町	古代～中世	喜界町埋文報告書(5)　1993
19	上山野遺跡	1	金峰町	古代～中世	金宝町埋文報告書(12)　2001
20	通山遺跡	1	薩摩町	古代～中世	薩摩町埋文報告書(3)　2001
21	谷山弓場城跡	1	鹿児島市	中世	鹿児島市埋文報告書(11)　1992
22	谷山城跡E地点	1	鹿児島市	中世	鹿児島市埋文報告書(20)　2000
23	上加世田遺跡Ⅰ	23	加世田市	中世	加世田市埋文報告書(3)　1985
24	上ノ城遺跡	5	加世田市	中世	加世田市埋文報告書(2)　1980
25	別府城跡	4	加世田市	中世	加世田市埋文報告書(10)　1995
26	城遺跡	14	笠利町	中世	笠利町埋文報告書(8)　1986
27	下山田Ⅲ遺跡	11	笠利町	中世	笠利町埋文報告書(9)　1988
28	島中B遺跡	1	喜界町	中世	喜界町埋文報告書(3)　1989
29	島中B遺跡Ⅱ	3	喜界町	中世	喜界町埋文報告書(4)　1989
30	向田遺跡	1	喜界町	中世	喜界町埋文報告書(6)　1994
31	松尾城及び宗功寺跡	1	宮之城町	中世	宮之城町埋文報告書(4)　1994
32	諏訪原遺跡	1	宮之城町	中世	宮之城町埋文報告書(6)　1995
33	横川遺跡	1	横川町	中世	横川町埋文報告書(1)　1987
34	萩原遺跡	1	姶良町	中世	姶良町埋文報告書(5)　1993
35	薩摩国分寺跡	2	川内市	中世	昭和55年度発掘調査概報
36	前当遺跡	8	知覧町	中世	知覧町埋文報告書(6)　1988
37	大原・宮園遺跡	2	下甑村	中世	下甑村教育委員会報告書　1974
38	一ツ木B遺跡	7	宮之城町	近世	宮之城町埋文報告書(9)　2001
39	厚地松山製鉄遺跡	36	知覧町	近世	知覧町埋文報告書(9)　2000
40	鍛冶屋馬場遺跡	11	川内市	近世	県埋文センター報告書　2002
41	野久尾遺跡	1	志布志町	歴史時代	志布志町教育委員会報告書　1979
42	柿窪遺跡	1	鹿屋市	歴史時代	鹿屋市埋文報告書(7)　1987
43	史跡旧集成館鋳物場跡	1			鹿大法文学部考古学研究室　1991

図　　版

犬ヶ原遺跡遠景（南から）

犬ヶ原遺跡遠景（東から）

犬ヶ原遺跡遠景（西から）

犬ヶ原遺跡遠景

犬ヶ原遺跡遠景

犬ヶ原遺跡近景

焼土（Ｃ－１区　Ⅲ層）

土坑　１

土坑　１

地層（Ｄ－２区）

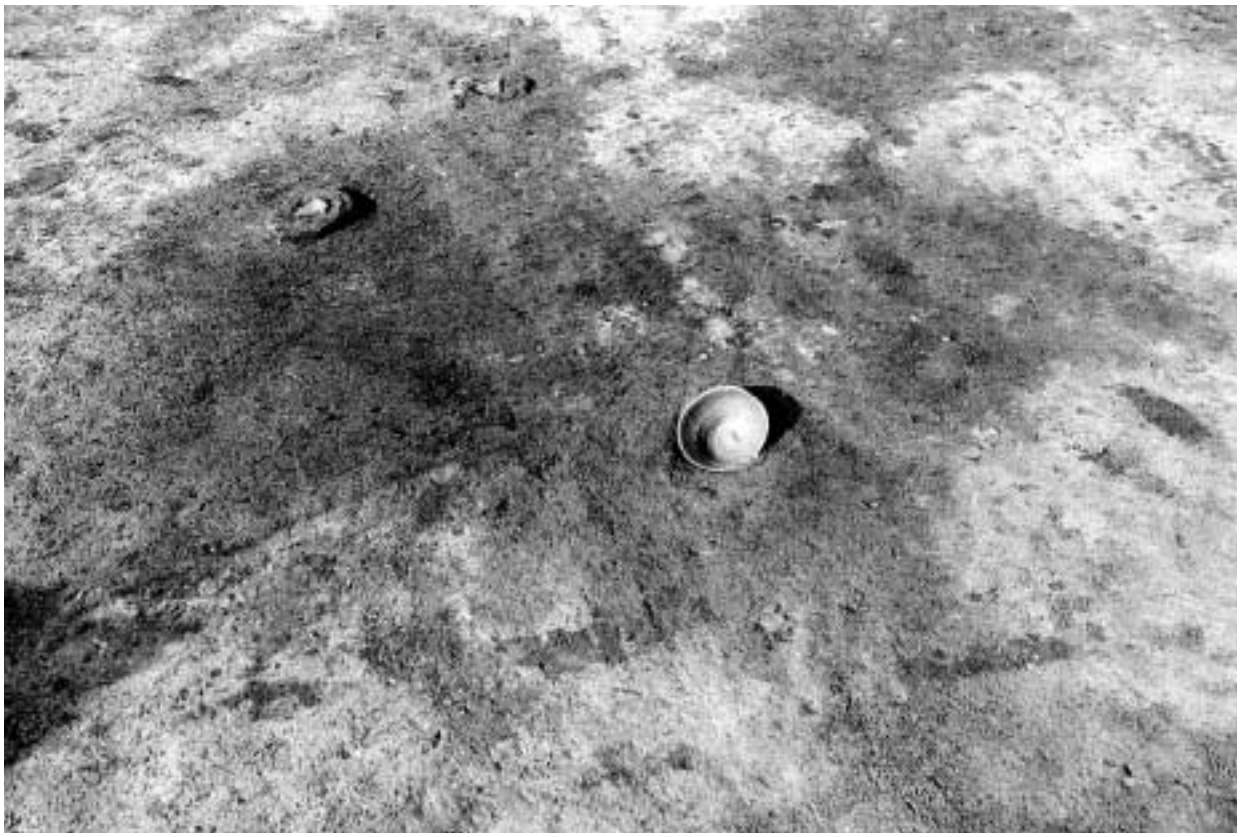
地層（Ｄ－２区）

鍛冶炉跡

鍛冶炉跡

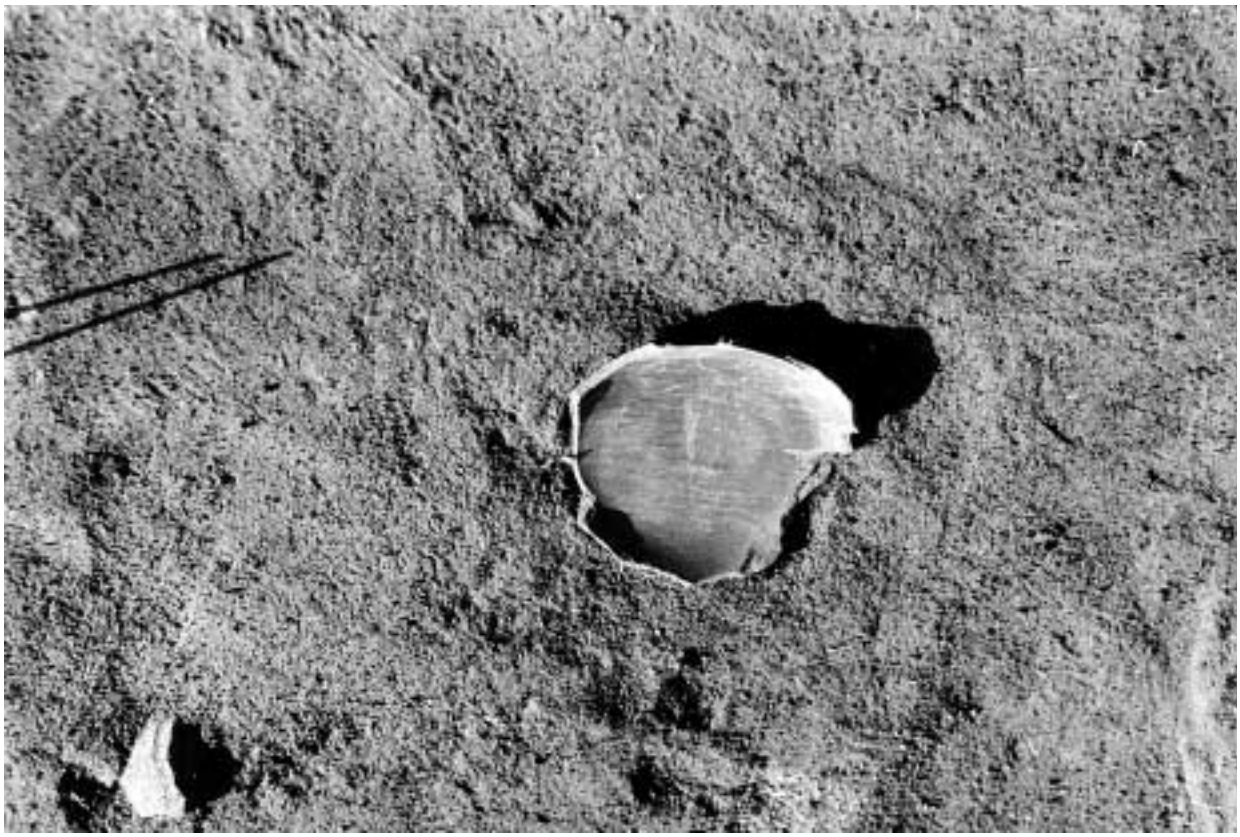
鍛冶炉跡

発掘前全景

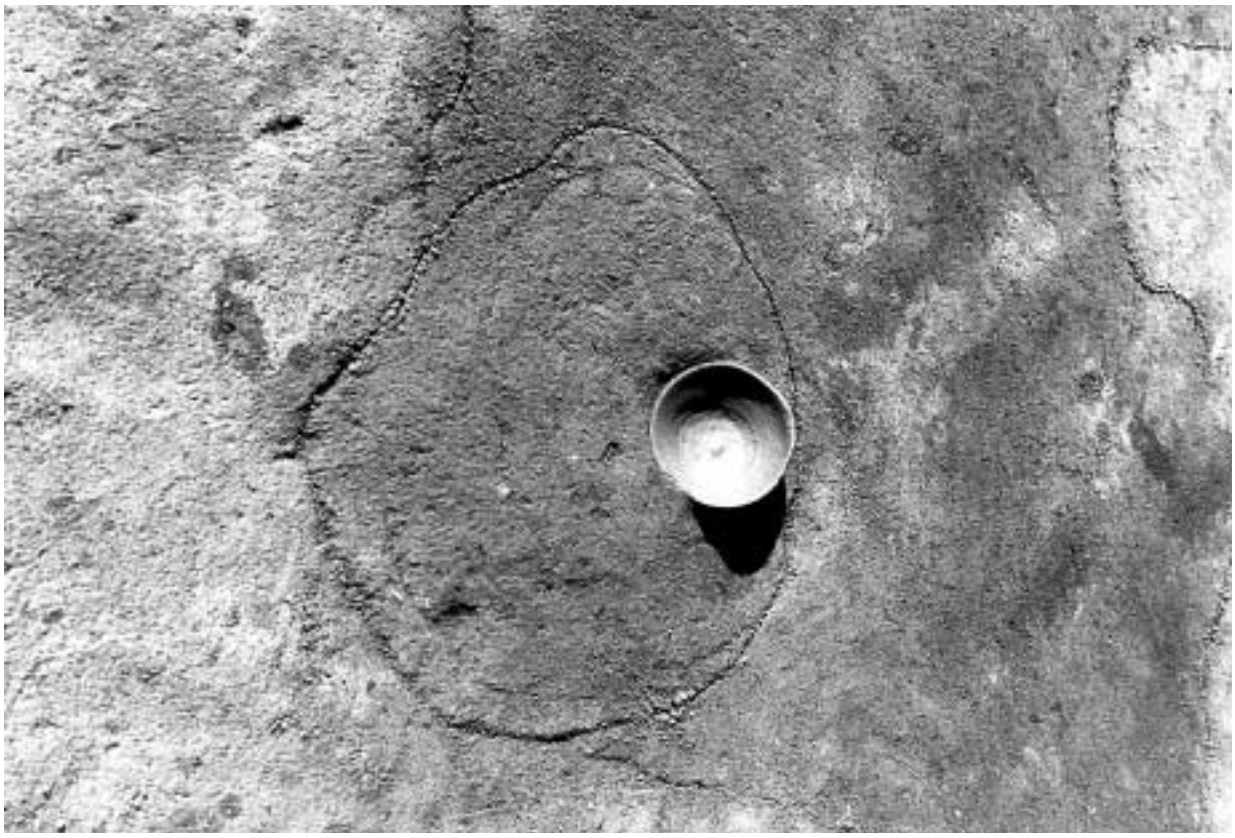


土師器（坏）出土状況

遺物出土状況



内黒土師器出土状況

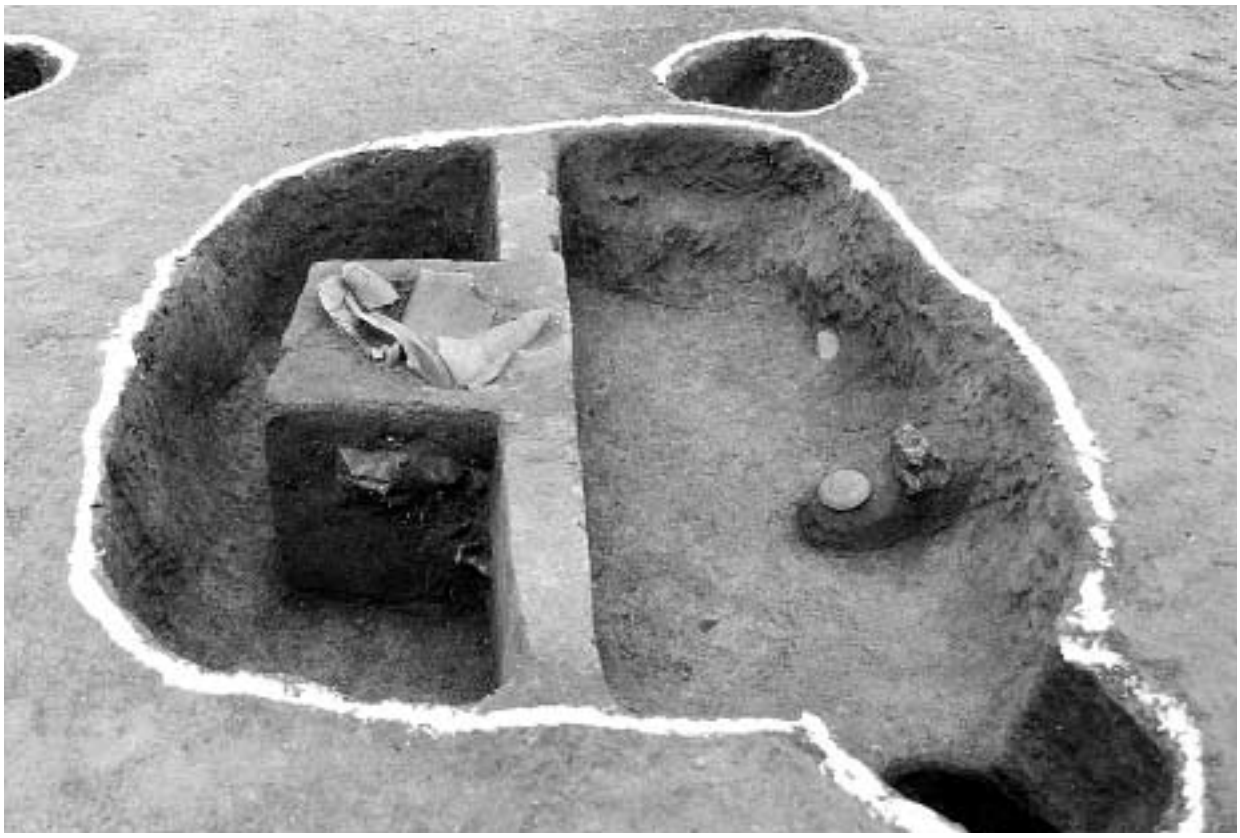


土師器（坏）出土状況

土師器（坏）出土状況

作業風景

土師器（甕）出土状況



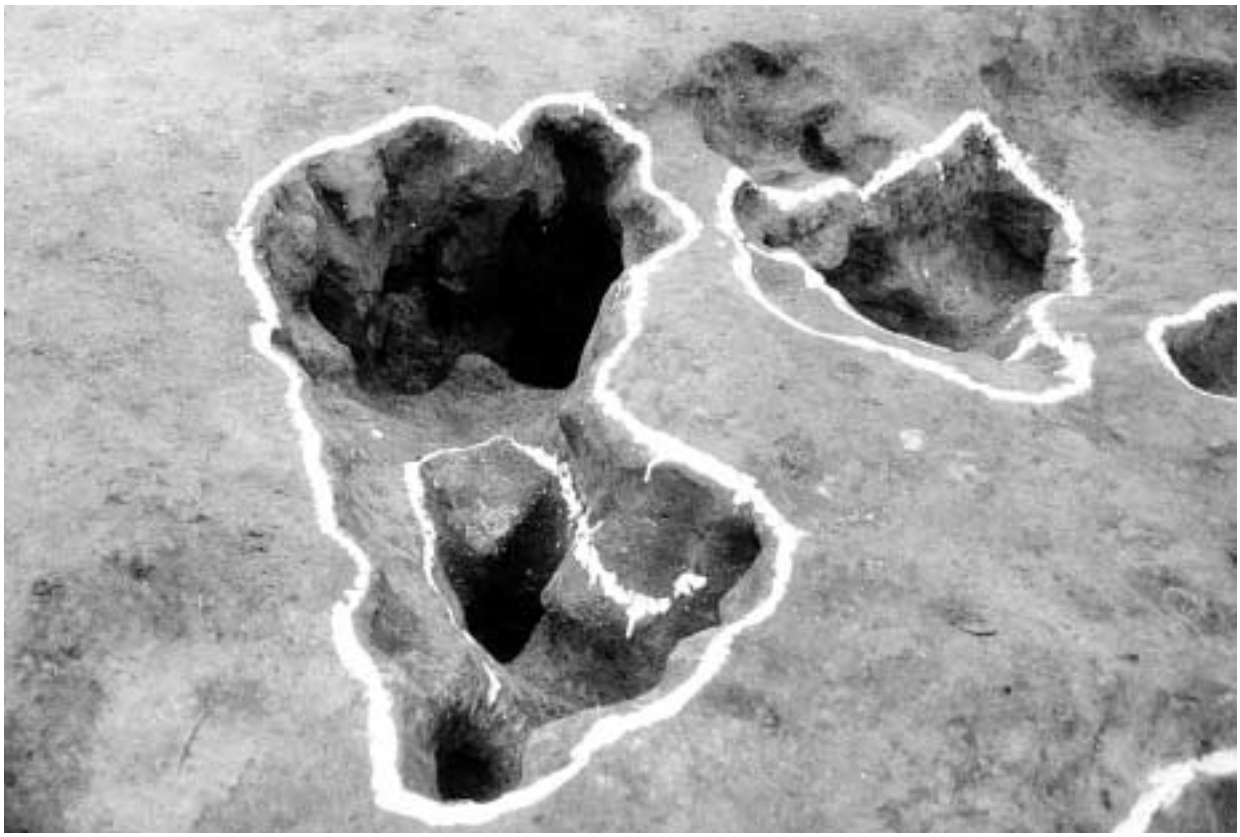
土坑１

遺跡全景

作業風景

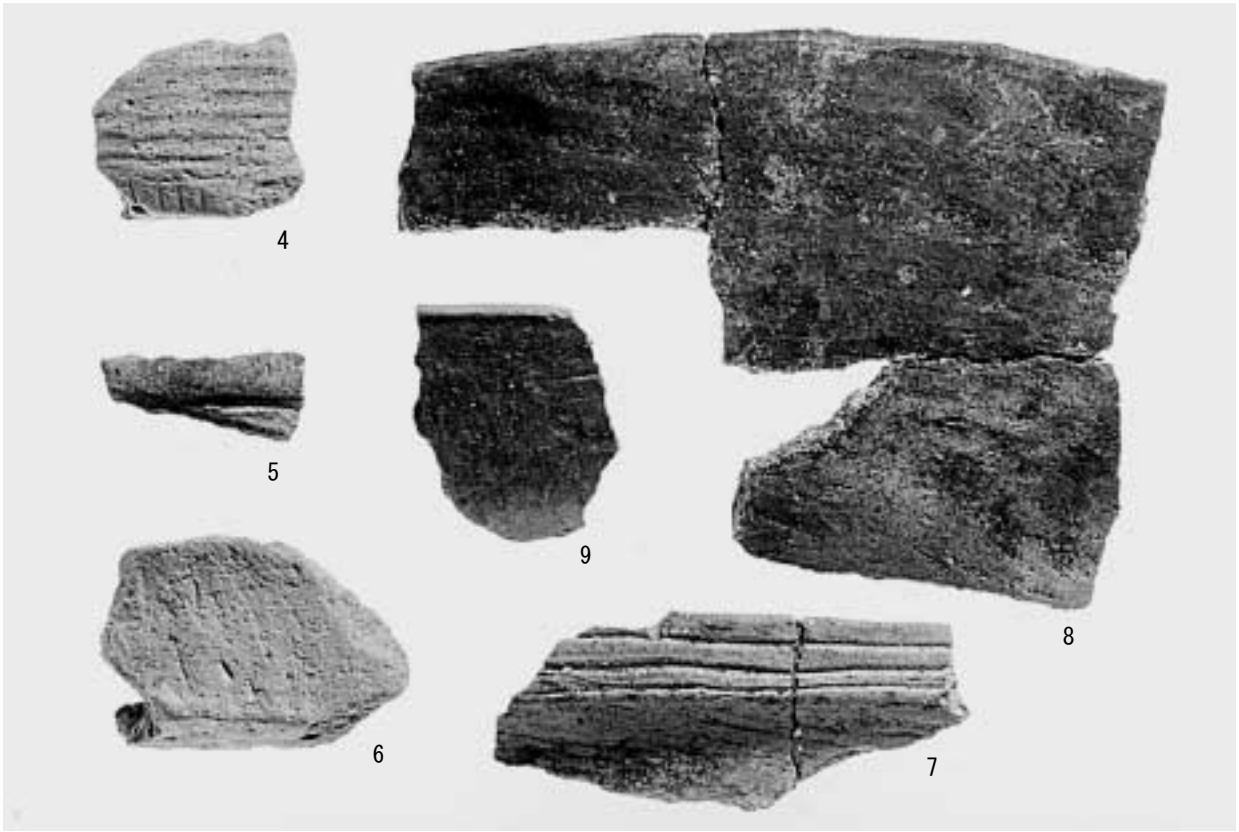
掘立柱建物跡

遺跡全景



鍛冶炉

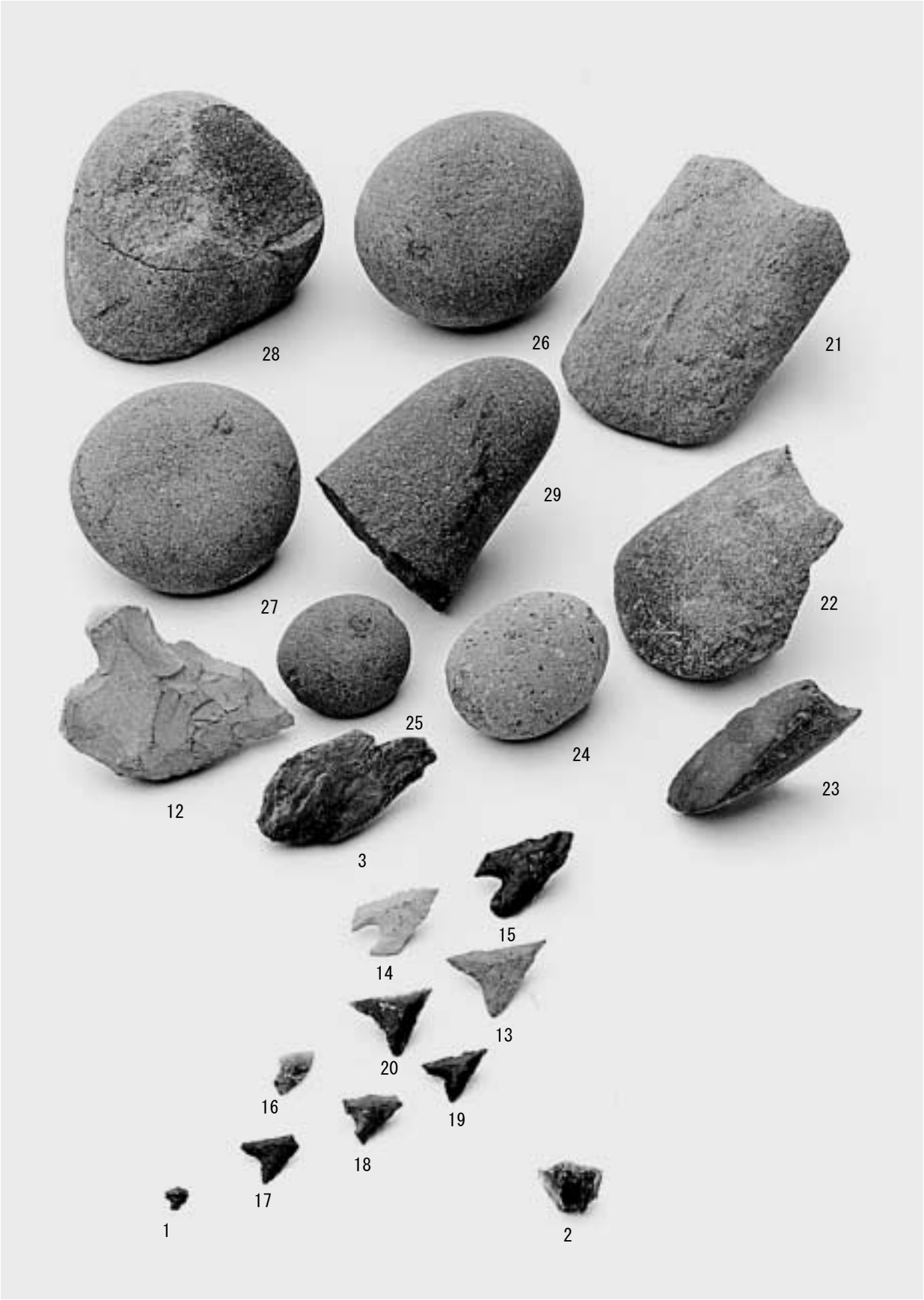
伊作田小　体験学習



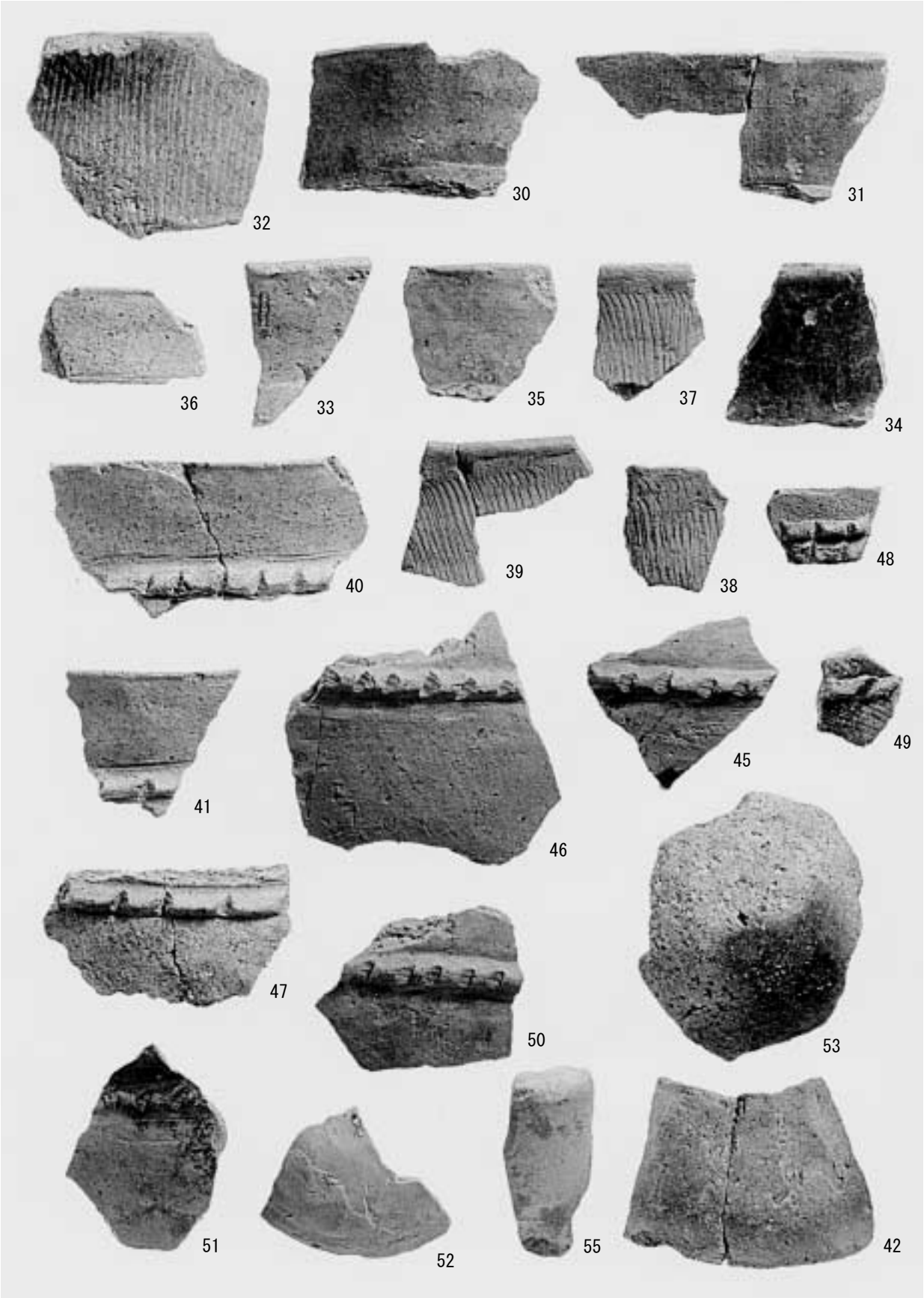
縄文土器(1)

縄文晩期土器(1)

縄文晩期土器(2)



縄文時代石器



成川式土器

70

76

91

93

63

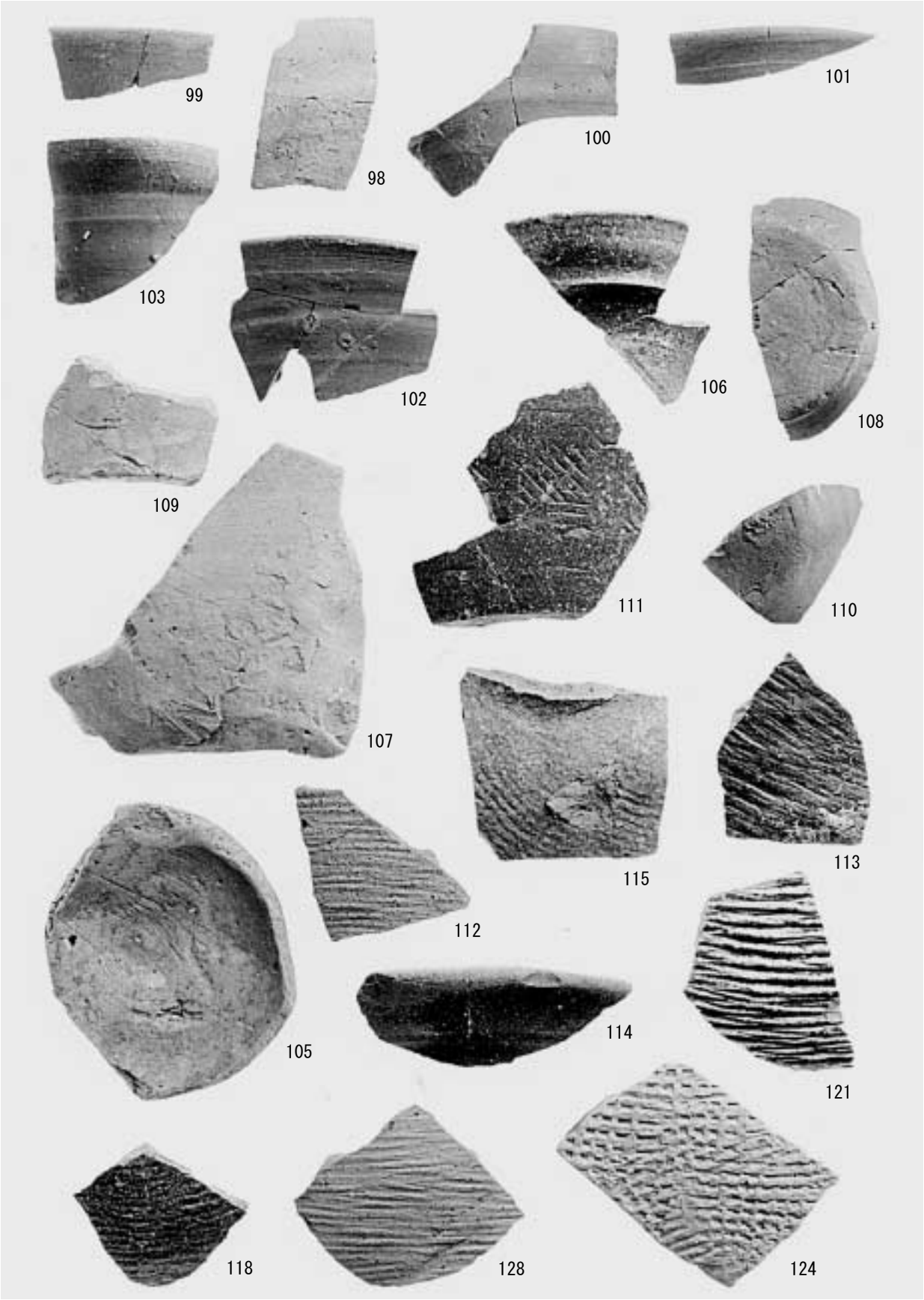
83

84

85

86

遺構出土の遺物


99
98
100
101
103
102
106
108
109
111
110
107
115
113
112
105
114
121
118
128
124

須恵器

土師器(坏・埦・皿１)

163

164

165

166

167

168

169

170

171

172

173

174

175

176

177

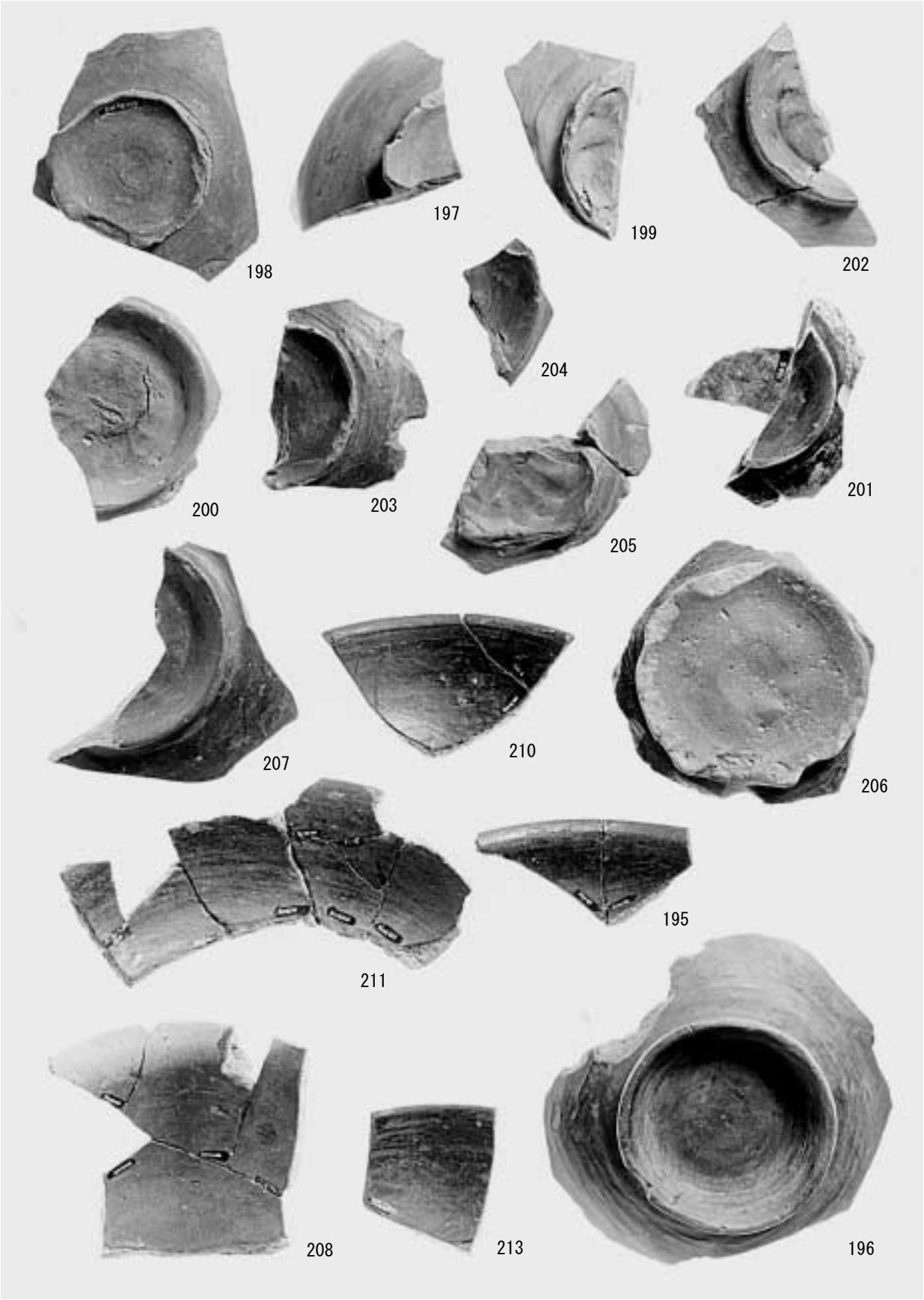
178

179

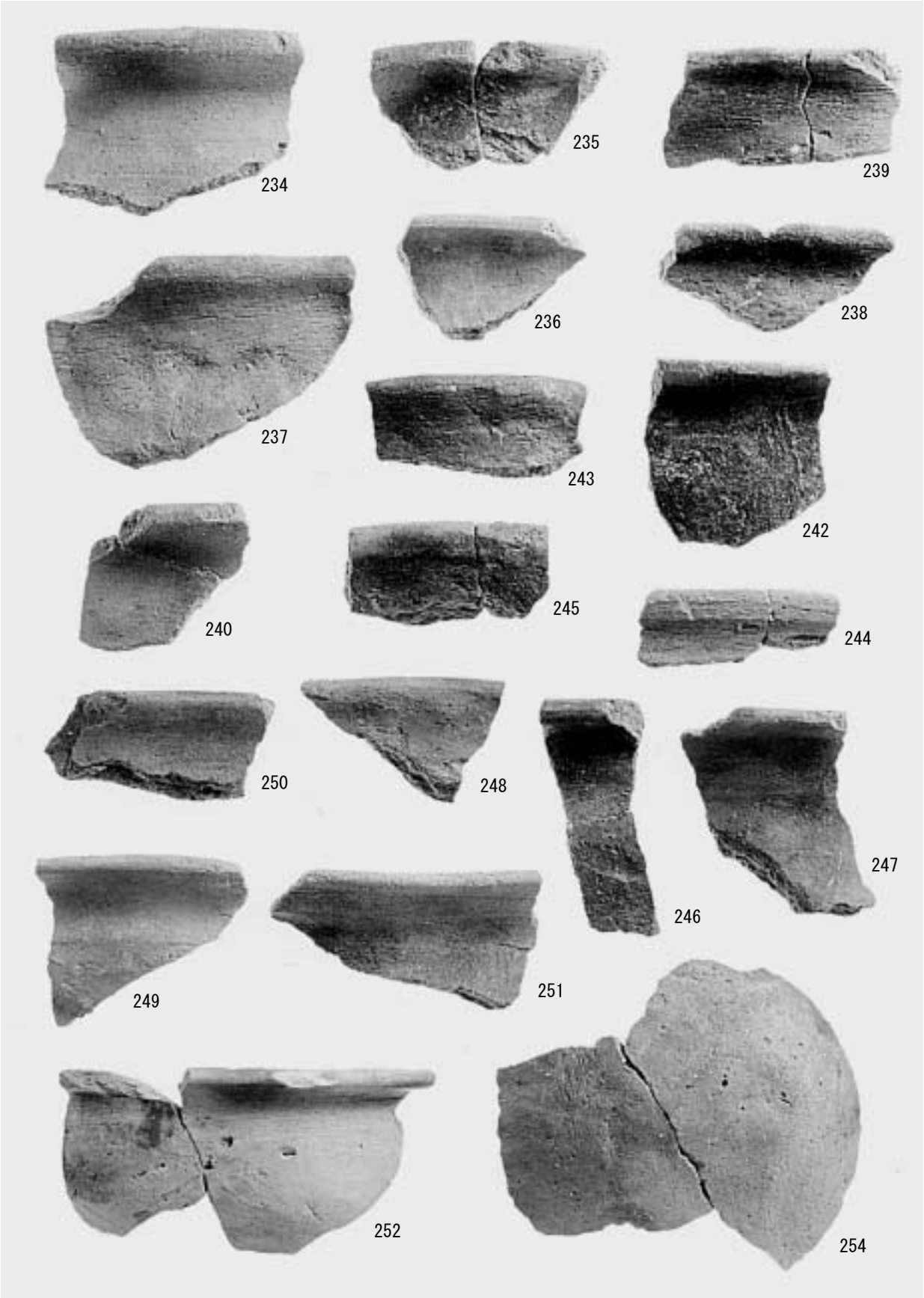
180

土師器（皿２）

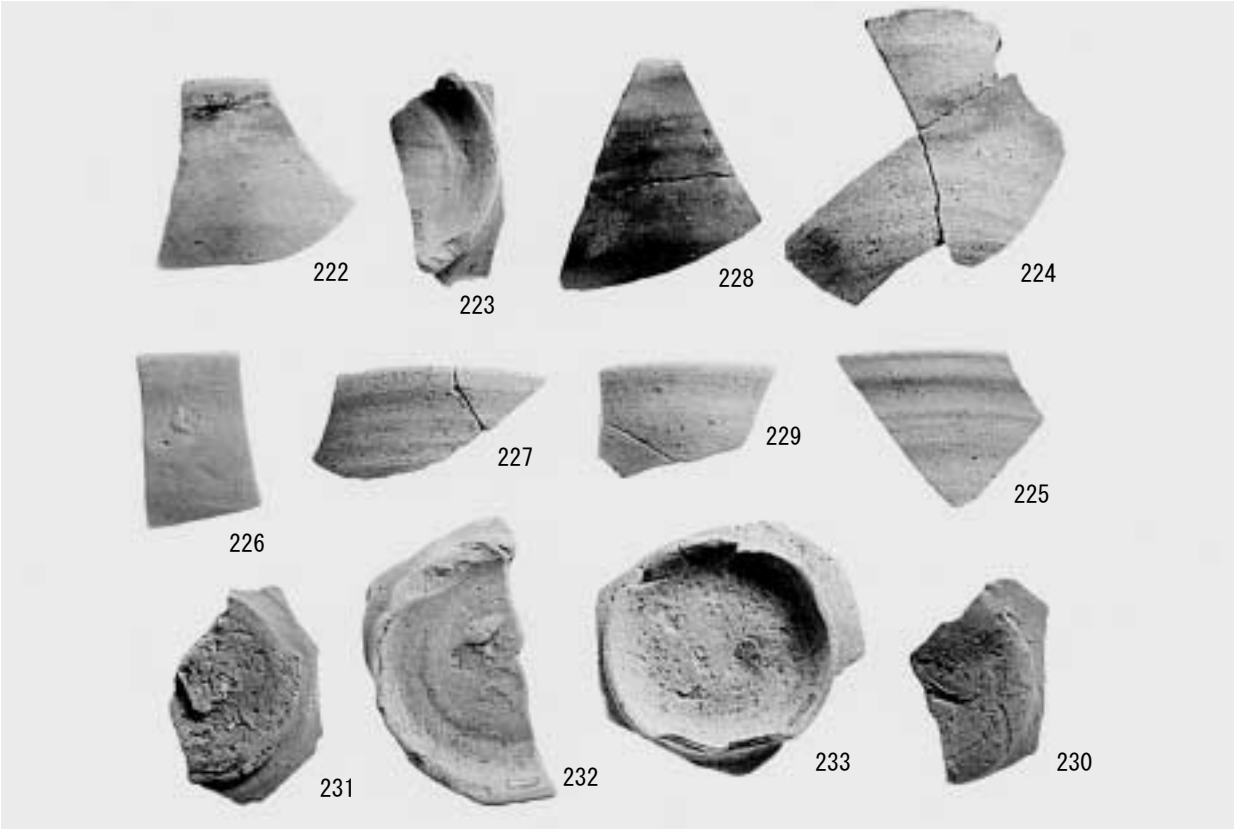
土師器（皿３）


198
197
199
202
200
203
204
201
205
207
210
206
211
195
208
213
196

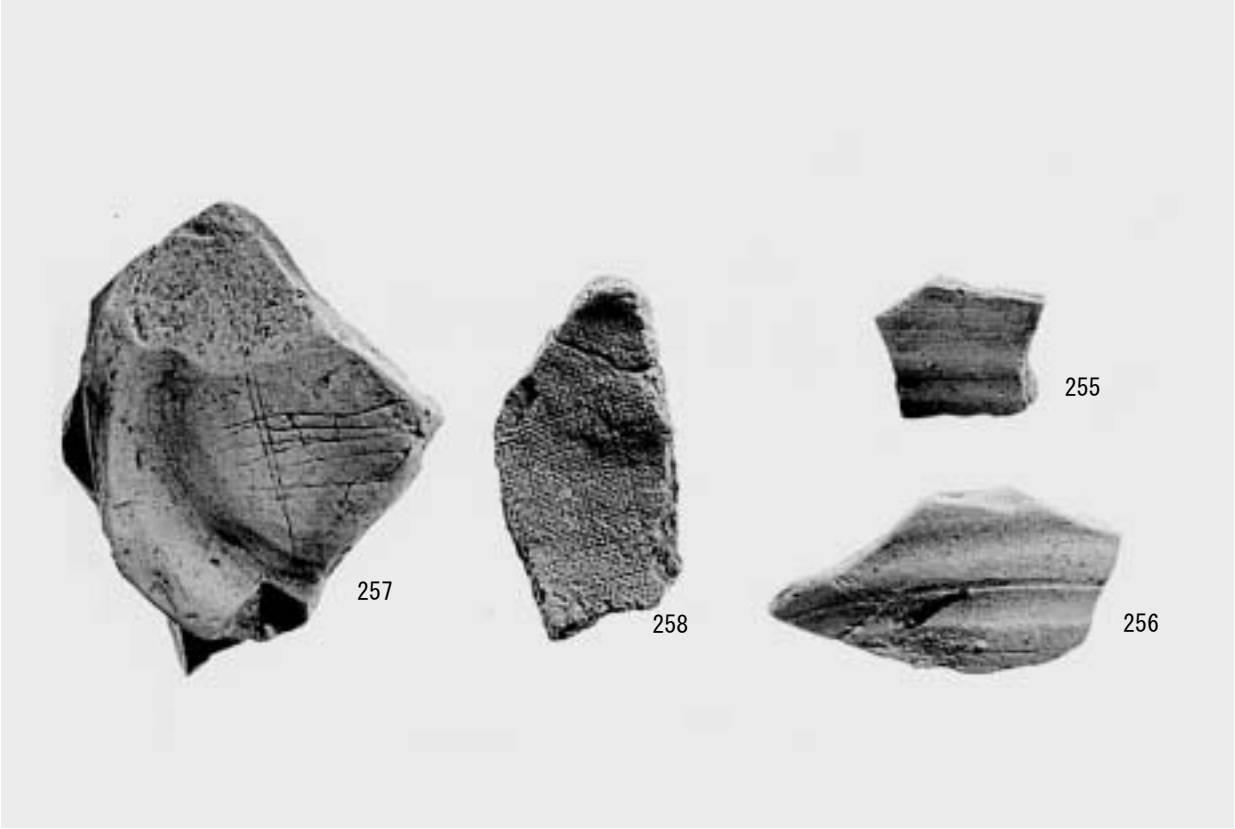
黒色土師器


234
235
239
236
238
237
243
242
240
245
244
250
248
247
246
249
251
252
254

土師器（甕）



赤色土師器



刻書土器・焼塩壺・墨書土器

紡錘車・土錘・羽口

滑石製品・桃の種子・硫黄

あ と が き

日本三大砂丘のひとつ吹上浜は延長70㎞の白砂で有名なところである。季節はずれの大波が打ち上げた貝殻採集をするため，砂浜をそぞろ歩くと，突然白砂が黒砂に変わることがある。最初は気にも留めずにいたが，犬ヶ原遺跡で発掘調査を行うと，東市来町には鉄に関する地名が多いのに気づく。黒い砂は砂鉄だったのである。周辺の字を調べていくうちに，鍋山・鍛冶屋堀・鐙・金惣内・鑪口・金木山等の地名があるのに気づく。郡名の日置も火に関する地名であると文献に記載されている。犬ヶ原遺跡の隣接地の字名は金木山であった。

犬ヶ原遺跡では製鉄に関する遺構が検出され，この地域での歴史を解明する意図で報告書を作成した。万全を期したつもりであるが，必ずしも十分といえないものになった。今後，検討を要するものが多いと思うが，機会を見て不備を修正し，その責務を全うしたい。

調査に当たり，便宜を図ってくださった東市来町教育委員会，発掘作業員としてご協力いただいた地元の方々，整理作業に従事していただいた鹿児島県立埋蔵文化財センターの方々に心より感謝申し上げます。

【発掘作業員】

有川恵子・有村照雄・幾留ノリ子・今田三千代・内野律子・奥茂・奥薗佐知子・海田淳則・潟山喜美子・上和田治夫・崎野義盛・迫田信男・新川アサエ・新村小夜子・新村まさ子・豊辻貞美・永山アヤ子・西久保淳美・畠中良子・濱田明美・樋口末男・平田トシエ・廣濱タエコ・廣森久美子・深見由美子・古川美津子・古城早月・鉾之原冨子・宮之前順子・元山千代子・山口テルエ・横手ミツ・脇田修・脇田スミ子・脇田富士子

【整理作業員】

有村裕也・川崎弘子・逆瀬川恵子・下野智美・橋口そのみ・園田和江

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(50)
南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ

犬　ヶ　原　遺　跡

発行日　２００３年３月２５日

発　行　鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4461 国分市上之段1175番地１
電話 ０９９５－４８－５８１１

印　刷　有限会社　こ だ ま 印 刷
〒892-0873 鹿児島市下田町1898番地乙
電話 ０９９－２４４－４１１８